

戦國時代は地方的競争の世である。地方の豪族が其の領土を根據として互に勢力を争つたことは、南北朝時代以來の語であつて、足利の権力が一と通り固まつてからも、さういふ大體の形勢に變りは無く、特に九州とか關東、東北とかいふやうな京都へ遠い地方では、諸大名の領土がほぼ固定してゐて、幕府の命令によつてあまり動かされないと共に、其の争も主として地方的であつて、ずつと小さいところでは領分境目の争に互に睨み合をして、隣りの領分の作毛をふみ荒らすやうなことも尠なくなつた。固より中央の政權を左右しようといふのでは無かつた。けれども其のほかの地方では、幕府の権力によつて領土が動かされるのみならず、幕政に關與してゐる大名の領土が多かつたから、それらの大名の争は中央に於ける政權の争と密接の關係が有つたので、其の最も著しく又た最も大規模に行はれたのが應仁の亂である。ところが此の大騷亂によつて、將軍の實力が諸大名を拘束するに足らないといふことが證明せられると、それから後はすべての大名が實力を以て争ふ外は無く、さうして其の實力の本源は領地であるから、全國を通じて領地を守り、領地を擴げようとする地方的の争が行はれるやうになつた。そこで所謂戰國割據の世が開かれたのである。

かうなると、全國を通じての大きい政治的中心が無くなつて、其の代りに地方的の中心が多く

てき、國民のすべての行動が、其の小さい中心によつて結合せられてゐる小國家の存立を目的として行はれ、従つてそれに都合のよい社會的組織が成り立つやうになる。列國競争の行はれる自然の結果として外交政策が發達し、或は鄰保同盟、或は遠交近攻、合縱連衡が成り立つたり崩れたりする。國內に於いては、今まで割合に散漫であつた行政組織が、領主の居城を中心として幾分か緊密になる。従つて南北朝時代から戦争などの場合に屢々現はれる野武士、旗色を見てどちらへもつくといふあふれもの、又は無所屬の浪人といふやうなものが尠なくなつて、武士は大抵定まつた主人持になる。士民を國々で固めて他國ものを排斥するやうな傾向ができる（大内家壁書には御家人以外のものを養子にすることを禁じてあり、今川紹倍の制詞や信玄家法には他國ものとの縁邊について戒飭が加へてある。また朝倉敏景十七ヶ條には、僧俗とも一藝あるものが他國にゆくを禁じ、猿樂の役者すらも京から呼び下さずに國內で養成せよといつてゐる。信玄家法や長曾我部元親百ヶ條に、他國との音信往來を自由にさせないやうにしてゐるのは、寧ろ軍國の祕密を保つためであらうが、それにしても國々が互に障壁を築いて其の中に固まらうといふ傾向は見える）。君臣主従の關係が土地の觀念と緊密に結び付く。従つて一種の國自慢が生じ、他國人に對する敵愾心が發達する。三河武士とか甲州ものとか越後ものとかいふ語に地理的名稱以上

の意味がつけられる。領主は自分等の地位を固くし、又た外に對して國勢を強くする上から（後に述べるやうに）幾分か農民を愛護する傾向が生ずる（北條早雲の逸話等）。鑛山のあるところでは金銀を採掘し、外國交通の開かれる場所では貿易を盛にして、富の發展を計る。政治的中心である領主の居城がそのづから經濟的中心ともなる。従つてすべての文化が、やはり國々に於いて或る程度の發達をする。要するにあらゆる點に於いて地方的大名の領土が小獨立國らしいものになるのである。これが戰國時代の第一の特色であるが、且らくそれを名けて割據主義といつて置かう。

さて此の地方的競争は主として武力によつて行はれ、其の勝敗は戰鬪によつて決せられるのであるから、斯ういふ小國家の政治は所謂軍政主義であり、其の社會は武士を中心として組織せられ、又た其の文化に於いては戰鬪に必要な事物が際立つて發達する。更に詳しくいふと、官吏はすべて武士で、制度は戰爭を目的として作られる。行政組織の全體が其のまゝに野戰陣營の組織であるといふ徳川幕府の制度は、即ち此の戰國時代に生まれたものである。一面に於いて農民を愛護する思想が幾分か發生しながら、他の一面に於いては課税賦役が頗る苛重であるといふのも、戰時に於ける徵發の意味を考へるとそのづから了解せられる。戰爭本位の政治に於いて、農民が

兵糧を供給するものとしてのみ認められるのは當然のことであらう。刑罰が嚴酷になつて、死刑を輕々しく行ひ、特に磔刑とか焚殺とかいふ慘酷な方法が行はれ、一人罪あるとき無辜の妻子までも罰せられるといふ習慣の生じたのも、やはり軍政の自然の傾向であり。又た動もすれば殘忍に陥り人の生命を重んじない傾のある武士の思想の現はれたものである。戰爭の場合、又は敵境に入つた時に人家を焼き拂ひ、作毛を荒らすなどは常のことであるが、同じ態度はすべての場合に見えるのである。

それから、四隣みな敵で何時も臨戰状態にあるのであるから、國主の住地は勿論、或は領土の防禦陣地として或は敵國攻撃の根據地として、到る處に堅固な城廓を築かねばならず、武士は絶えず其れ等の城に住つて、咄嗟の間にも出陣のできる用意をしてゐなければならぬ。徳川時代に武士が城下に集中して、其の生活が農民と全く分離してゐたのも、斯ういふ必要から戰國時代に發達した習慣であつて、武士階級の特種部落が此の間に成り立つたのである（此の部落は經濟的見地からいふと單純な消費者であるから、斯ういふ社會に特有な經濟組織が此の間から生ずる。もつとも場合によつては武士とても農業などをしなければならぬことがあつて、三河武士の田植をしてゐたことが三河物語に見え、また家康も武士の妻には木綿を織ることのできるものを求め

よといつたと傳へられてゐるが、妻子は兎も角も、武士が田を作るのは其の本分では無いとせられてゐたことが、三河物語の記事によつてもわかる。そこで武士が政治的に特殊の權力を有つてゐるのみならず、社會上にも農民とは全く懸絶した高い地位を占める。百姓に對して切捨御免の特權が武士に與へられ、同じく戦死するにしても百姓に首をとられるのは非常な耻辱と考へられたのも此の故である。戦争本位の世の中に武人が威張るのは自然の勢である。百姓に對してばかりでは無い。「とても死ぬる命をいかで武士の家に生れぬことぞ悔しき」(應仁記、一條太閤)。公家貴族とても武士を羨まねばならぬ程、武士は社會的に重んぜられたのである。「人は武士」といふ諺も此の頃から行はれたのであらう。

なほ戦闘の方法が一騎打ちの舊態を脱しないで、人々がみな一番槍の功名をめがけるのであるから、劍術や槍術が発達すると共に、一面に於いては大規模の戦争が屢々行はれるにつれて、戦争が漸次組織的になり、隊伍を整へ、節制を重んずるやうになり、従つて軍ぞなへや懸け引きや、乃至は兵糧小荷駄といふやうな後方勤務の問題が研究せられ、所謂軍學が進歩して來る。また前に述べたやうな事情から平地に城郭を構へることが必要となるにつれ、築城術がずつと發達する。それから刀劍工のやうな武器製造の術が進歩し、鐵砲が傳來すると忽ち全國に擴がるといふのも、

みな戦争中心の社會に於ける文化の狀態である。斯ういふ風に武士が社會を支配する狀態と其の思想とを假に武士本位主義と名づけることにしよう。これが戦國時代の第二の特色である。

さて此の割據主義と武士本位主義とは相伴つて行はれてゐるのであるから、其の結果として武士の社會と國土とが結びつけられ、従つて主従關係が一定の國土の上に存立するやうになり、武士の生活と思想とに新しい傾向が生じた。源氏時代の關東武士を支配してゐた主従關係は、恩賞が基礎になつて養はれた情誼によつて成り立つてゐたのであるが、それはどこまでも主従の人的關係のみであつて、一つの國をなしてはゐなかつた。鎌倉時代以後は源氏によつて建てられた幕府が全國の主權者となつたため、主従關係が全國に擴がると共に結合が散漫になるから、其の間の感情的要素は薄らいて、恩賞で維がれてゐる單純な利害關係のみが残り、従つて情誼よりは寧ろ權力の問題となつた。足利時代には將軍と諸大名との間に於いてその傾向が一層甚だしくなると共に、諸大名と領地との關係が固定しない場合が多いので、大名と其の配下の武士との間柄もまた緊密で無く、主従の關係が十分に發達しなかつた。それがために世の中が絶えず動搖してゐたのである。ところがその勢が極點まで進んで此の戦國時代になると、全國の主權者と諸大名との間には事實上主従關係が全然無くなつたと共に、諸大名がそれ／＼の領土を一つの國として有

つてゐて、それら諸國の間に國際競争が成り立ち、さうしてそれが領主と其の家來として養はれてゐる多くの武士との働さによつて行はれるのであるから、主人は家來の力に依頼し、家來もまた主人の勢威によつて此の競争に勝利を占めなければならぬ。そこで主従の間が極めて親密になり、こゝに深い情愛が生じ、さうしてそれは多數の武士が主人の居城に集中して生活することや、時代を累ねて所謂譜代の主従となるに従ひ歴史的な感情が加はることによつて、一層濃厚になるのである。ところが主人の勢力は即ち一定の土地の上に立つてゐる國の勢力であつて、武士の行動は直に其の國の盛衰興亡に關し、國の盛衰興亡はまた直に彼等の生活と運命とを動かすのであるから、多數の武士に自分等の家中、自分等の國といふことについて一種の公共的精神が生ずる。さうして競争といふことから自然に起る敵愾心もまたそれを促進するのである。もつとも大名の勢力を形づくる根幹はどこまでも主従關係で結合せられた武士であつて、其の武士は土地に固着してゐる農民からは遊離してゐる。だから大名の勢力も武士の生活も、それと土地との關係は十分緊密にはなつてゐない。其の上、國をなしてゐるとはいふものゝ、日本全體から見れば地方的勢力に過ぎず、又た競争の激しい結果、大名の興亡が頻繁であつて、土地からいふと領主と其の家來とは屢々變更せられる。さうして土着の農民は單純なる被治者、もしくは武士に租税を輸す

るものとしてのみ取り扱はれ、國勢の原動力としては認められない。斯ういふ状態であるから、武士にも農民にも愛國心とか愛郷心とかいふ思想は發達しない。けれども兎も角も一種の團結心が武士の間に生じたことは注意しなければならぬ。

なほ一つの明白な事實は、戰國時代が實力競争の世界だといふことである。幕府が實權を失つてから、將軍と諸大名とを結びつけてゐた權力關係が消滅し、すべてが實力によつて支配せられるやうになつたのである。諸大名の間にも弱肉強食が露骨に演ぜられて、國々の盛衰興亡が激しく、また新しい家が下層の階級から起つて舊家を仆すことが多い。武士と百姓とは、一方に於いて其の間に嚴然たる階級の區別があるものゝ、百姓でも機略あるものは武士になることができ、さうして不斷の兵亂はさういふ機會を多く與へる。従つて社會上の尊卑は家柄や血統で定められず、實力でさまる。ところが實力競争の世は優勝劣敗の遠慮なく行はれる世であり、また實力の大小強弱は、人により場合によつて固定しないもの、斷えず變動するものであるから、其の實力の競争で成り立つてゐる世は、固定した秩序が無くなつて、不斷に動搖してゐる。此の不斷の動搖といふことが戰國時代の第三の特色である。

戰國時代の性質は大略右に述べた三つで概括することが出来る。しかしこれは大體の傾向であ

つて、其の間には幾分かそれと調和しないやうな状態も見えないでは無い。國々が固まつて來た  
とはいふものゝ、商工業とか文藝學術とか、概していふと文化上の現象は、大體に於いて列國共  
通であつて、特に僧侶、連歌師、猿樂の役者などは、所謂銚楯になつてゐる國々の間をもあちこ  
ち往來してゐて、其の間に障礙が少い。武士に於いても各國を遍歴する武者修行が行はれ、また  
奉公するにも他國の大名を主人に持つことさへ尠なくはなかつたので、尾張浪人や甲州浪人が越  
後の家來になつたといふ例もある(松隣夜話)。連歌師や僧侶は猿樂や刀鍛冶と同様な職人であつ  
て、何處へでも需要のある地へゆくのは當然であり、武士とても武藝が一つの職業となれば、報  
酬の多いものに買はれるのに無理は無からう。それから武士は主従關係の細細工に編み込まれ、  
また武士と百姓とは明に區別せられたとはいふものゝ、亂波らっぱといふ野ぶしめいたものが存在する  
ところもある(北條九代記)。戦が起れば百姓も飛び出して來て、時には敗け方に對してひきはぎ  
めいた所行もし、大將の首をとつて恩賞を得ようとする。純粹の武士で無いものでも、戦亂の  
絶え間が無い世には、それに乗じて何かの利益を得ようとするのは自然である。また武士が社會  
組織の中心になつてゐて、最も巾をきかしてはゐるものゝ、商人の勢力は却つて此の間に加はつ  
て來たらしい。貿易の發達と共に堺が繁昌したことはいふまでもなく、國々の城下は商業上の中

心ともなつて、そこに商賣も盛に行はれたのであるが、農民が武士を養ふために存在するものと  
して取り扱はれ、ひどく賤まれたに反し、商人は寧ろ武器や贅澤品の供給者として重寶がられ、  
經濟上の權力を有つてゐるものとして大切にせられる傾があつたらしい。これは或は消費者たる  
武士と生産者たる農民とが全く分離したため、或は交通の便利の悪い割據の世の中に武士の需要  
を充さうとするには、商人が無くてはならぬからであらう、だから一見調子外れに見えるやうな  
此等のことも、實はやはり戦國時代に必然の現象である。

ところが、國々の競争が長く行はれてゐる間に段々兼併が行はれ、小領土を有つてゐる小君主  
は滅亡するか、附近の大國の附庸となるか、但しは諸大國の間に介まつてゐるために、勢力平衡  
の關係上、纔に存在するを許されるかに過ぎない有様となつて、北條とか上杉とか織田とか、又  
は大内、毛利とかいふやうな大勢力が現はれ、地方的勢力が大きく固まるやうになると、競争の  
舞臺も廣くなり、今までは關係の無かつた遠方の國々が互に接觸して來て、其の間に種々の外交  
關係が生ずるやうになり、さういふ大君主の欲望も大きくなつて、單に地方的競争に於いて領地  
を廣めるのでは満足せず、機會があれば天下に號令しようといふ様になる。戦國割據の勢が極ま  
つて國家統一の氣運が開けて來る契機がこゝにあるのであるが、さすがに全國が全く分裂してし

まつたので無く、古くから歴史的に養はれてゐる精神的の結合が嚴として存在してゐるのであるから、大なる欲望を有つてゐるものが天下に事をしようとする場合には、それが生きてはたらいて来る。そこで彼等は或は將軍の名を假り、或は攝家を戴き、更に一步を進めると勅命をかりる。謙信、信長等が即ちそれであつて、秀吉によつて統一の事業が成就せられると共に、皇室を上に加へ、直接に勅命を奉じて天下に臨むといふ形式を取つたので、朝廷の外に幕府を建てる將軍政治を一變させたのであるが、これは京都に遠くないところから起り、而も微賤から身を立て、領地の上に鞏固な勢力を有つてゐない彼の境遇の、自然の成りゆきでもあらう。もつとも信長も權力の關係では足利氏の後を繼承しながら、また世間からは將軍と呼ばれたこともあつたらしい程でありながら（大村由己の播州征伐記、惟任退治記、柴田退治記）、實際は將軍の名義を取らなかつたのを見ると、將軍の權威の衰弱から生じた戰國の擾亂を靜めるには、直に皇室を戴くのが必要の方法でもあつたらう。勿論天下の平定は武力によつて出来上つたので、それは全く信長の後を承けて大きい勢を有つてゐた天縱の英雄、秀吉の事業ではあるが、日本全國が一國であるといふ感情と、其の國民的結合の象徴である皇室の精神的勢力とが、冥々の裡に此の間にはたらい

てゐたことは明である。

しかし斯うして成就せられた國家の統一は、どこまでも大名を基礎としたものであつて、諸大名の領土が渾一せられてしまつたのでは無い。たゞそれが實力の競争によつて動かされず、權力者の意志の下に左右せられるやうになつたのみである。領土を獲得し維持するのは大名自身の力では無くして權力者の命令である。これが此の時の統一の意味であつて、所謂封建制度がそれによつて成立し、政治上の秩序がそれによつて定められたのである。さて政治的秩序が定められると、社會上の秩序もそれに伴つて立つて来る。しかしこれも、政治的組織が所謂割據時代に形成せられた大名の領土を基礎にして出来上がった封建制度であると同様、戰國時代に養成せられた武士本位、武士中心の習慣が、其のまゝに繼承せられたものであつて、たゞ實力競争によつてそれが動搖しなくなつただけのことである。要するに前に述べた戰國時代の三大精神のうち第一第二の精神は依然としてゐて、たゞそれを支配するものが第三の實力競争で無く、新に生じた政治上の權力がそれに代つたのである。

さて斯ういふ時代の文化の状態はどうかといふに、武士の生活と戦争とに必要な事物が、盛に

行はれもし進歩もするのは自然である。前に述べたやうに、工藝に於いては武器の製法が益々鍛錬せられ、其の附屬品が愈々精巧になるのは勿論のこと、城郭建築の行はれるにつれて、土木工業や建築術の發達したことも明な事實であつて、特にそれは昔の宮殿や寺院のやうに繊巧な風はなく(其の多數にはよし雄大華麗の趣が無かつたにせよ)、堅牢なものであつたには違ない。斯ういふ風に、戰國時代に相應な文化はちのづから發達してゆくのであるが、しかし一方からいふと、戰爭は破壊の事業である。人を殺すは勿論のこと、勝手次第に火を放ち物を毀す。勝敗の上に必要手段とあれば、如何なることをしても憚らないのみならず、殺伐な武士は、勢に乗じて必要以上の破壊をすることも珍らしくは無い。だから全國が戰場と化し去つた此の時代に、上代の遺物がなくなり、舊くから續いて來た文化が衰微する傾があることはいふまでも無い。特に昔から文化の中心であつた京都に於いては、朝廷と其の周圍の貴族とは纔に存續してゐるといふばかりである。南都北嶺といふやうな大寺院の領地も、漸次武人に押領せられたから、種々の法會なども漸次廢れて、昔のやうな文化上の地位を維持することは段々出來なくなつたらう。政治上に於いて中央の權力が無くなり、將軍及び其の周圍にゐる上流のものが地位を失ふと共に、文化の上にも同様の現象は生じたので、京の文化は著しく衰へた。

けれども全國に號令する幕府の權力は無くなつたものゝ、兎も角も將軍の位置はあり、さうして何人が實權を握つてゐても幕府といふものは、京畿の狭い範圍に多少の勢力を有つてゐるのであるから、それに伴つて昔の文化は或る程度まで京都に存續してゐて、文藝の上でも連歌や能などは盛に行はれてゐる。朝廷でも朝儀などは多く行はれなくなつたものゝ、個人の力で出來る歌とか古文學の學習とかは、公家の間に絶えたのでは無い。それから地方を見ると、鎌倉時代、室町時代の長い歴史によつて漸次文化上の修養を積んで來た武士は、決して平安朝時代の田舎ものではなく、野蠻人では勿論無い。彼等は因襲的に昔から續いて來た文藝を仰景してゐて、京から下る公家や歌人、連歌師を尊敬する。彼等はまた武士たる職業の上から、神佛に對する信仰を失はず、其の領地内の神社佛閣に相當の保護を加へ、僧徒をも優遇した。さうして其の僧徒は宗教的職務の外に於いて、學問の師匠として何處の田舎でも尊崇せられ、特に諸大名の直接の保護の下にあるやうな都會の大寺院に於いては、禪僧ならば漢學の知識を武士に與へ、教僧ならば國文學を弘める上に於て幾分か力があつたであらう。さうして武士は戰闘の方法が進歩して兵學的研究が必要になり、行政や外交のためにも知識を要することが多くなつて來たので、自然に學問の大切なことが感ぜられ、或は彼等の社會があまりに血腥く、あまりに落ちつきが無く、其の日常

生活があまりに殺風景で、あまりに無趣味であるので、それを緩和し、調節するものゝ必要を思ひ、又た或は浮沈榮枯の定めなき世、明日の命の知られぬ身を感じることが切實であり、死を以て情に殉じ義を立てねばならぬ場合の勘なくない彼等が、其の情懷を抒へ苦衷を訴へることのできる文筆の技を重んずる事情もあるので、文事は此の間に於いて却つて一般に奨励せられた。

これは事實を見てもわかる。諸大名の制詞や訓誡には大抵學問歌道を奨励してゐ、文武二道とか左文右武とかいふやうな語が屢々此の時代のものに見えてゐる。連歌の會は到る處の陣營に行はれ、女などでも非常の場合に(歌としては拙いながらに)辭世を詠むものが多く、北條氏康には武藏野紀行があり、毛利元就には詠草が遺つてゐ、信玄や謙信は漢詩を作り、文選を開板させた直江兼續の如き篤學者が北越の田舎にもあつた。小田原の文化については相州兵亂記等にも記事があるが、慶長見聞集の著者三浦淨心などが出たのを見てもそれが知られる。此の時代に作られた戦争の記録などは僧侶の作もあるが、武人の手になつたものも少なくないらしい。現に大内義隆記などは僧徒の作らしいが、相州兵亂記や今川記や別所長治記の如きは明に武人の筆である。大内義隆や島津忠昌が或は公家の風尚を學び、或は禪僧を招いて宋學を講じさせたことなどはいふまでも無い。織田の家來が山科言繼の歌の弟子になり(山科言繼卿記)、陣中で古歌を誦し(信

長記)、名護屋の陣中で或る士がしき物が無いといふ謎に臆月夜といふ額を打つた(備前老人物語)といふ話などを聞いても武士の修養が察せられる。落城の場合に七珍萬寶は惜むに足らず榮雅自筆の古今集を取り忘れたといつて氣にかけたといふ話(鹿島治亂記)などは、固より一種の物ずきを示すに過ぎないのではあるけれども、武人が文事を重んじたといふ一證である。(もつとも、それによつて武士が、どれだけ文筆の力を養ひ得たかと云ふと、それは大したものでは無かつたに違ない。このことはなほ後にいはう)。文事のみならず田舎武士が鞠の誓古をさへしてゐる(山科言繼卿記、備前老人物語)。武人の演藝ともいふべき能や舞が地方武人の間にもてはやされ、茶の湯が流行したことはいふまでもない。武士が公家風を學ぶことは、一面に於いて非難的ともなつてゐて、大内義隆の敗亡の原因がそれであるやうに思はれ、また上杉定正の如きは武士の歌連歌に耽るをすら難じてゐる(山鹿語類卷二二)。北條早雲も歌は奨励しながら、笛尺八の友は悪友としてゐる。これは遊藝に耽溺して武事を忘れるのを非としたので、人によつては(例へば加藤清正などのやうに)歌連歌をも其の仲間に入れたのであるが、兎も角も武人の間に斯ういふ嗜好のあつたことは事實である。さすれば諸大名の城下はそれ／＼に斯ういふ文藝の地方的中心ともなつてゐたであらう。



戦闘を職業としてゐる武士の間に廣く文藝が傳はつてゐたのみならず、商業の發達と共に平和的な市府が繁昌して、そこに文藝の中心ができて、従つて商賈の間にもそれが尊ばれるやうになつたらしい。堺に書籍の印刷が行はれ、またそこが連歌や茶の湯の本場のやうになり、能にもこゝに一根據を据ゑたものがあり、隆達の小歌もこゝから起つたことはいふまでも無く、此の點に於いては堺が京都に代つた様な觀がある。地方的都市も小規模ながらそれ〴〵の地方の文化に深い關係があつたらしく、中國西國などの海上交通が行はれる地方には、博多などのやうに小堺ともいふべき場所があつた。たゞ戦國割據の時代であるから大名の城下が、おのづから商業の中心ともなつてゐたところが多く、東では小田原、西では山口などが、其の最も名高いところである。しかし、何れにしても、これは富の發達につれてのことであつて、其の富が商賈の手に握られ、従つて平民の力によつて文藝の維持せられたことが、此の時代の新しい現象といはねばならぬ。早く宗長手記にも坊の津の商人が京で連歌を興行したことが見えてゐる。

けれども、商業の發達に伴ふ文化上の現象は、舊いものが保持せられるばかりで無く、新しいものが興されたのであり、文藝のやうな精神的方面ばかりのことでは無く、物質的側面にも大なる影響があつたので、それは主として海外貿易の興隆した影響である。明との貿易は昔から斷え

間なく行はれて、奢侈品の供給をそこからうけてゐたゞけに、此の時代になつて急に新しい様子も無いが、それでも三絃のやうに、後になつて我が國の民間樂に一大進歩を與へた新樂器の輸入があつた（三絃は通常琉球から傳へられたことになつてゐるが、著者は寧ろ支那から直接に入つて來たもので堺が其の輸入地ではなからうかと考へる。詳細は東洋學報第二卷第一號に述べて置いた。三味線といふ名は琉球の蛇皮線の轉訛ではなく三線の音から來てゐる）。けれども忽然として海上に現はれた葡萄牙人の來航は、此の外國貿易の趨勢に一大轉化を與へたのであつて、今までは見も聞きもしなかつた珍貨奇物が、それによつて段々入つて來る。さういふものを取り扱ふ商人は利を得ることも多かつたに違なく、堺などはそれがために益々繁榮を加へたであらうし、全體から見るとこれによつて我が國の文化に新しい要素が加へられたのである。ところがその要素は、少くとも種々な贅澤品を供給する點に於いて、恰も戦國時代の人心の一面に甘く投合した様子が見える。

昔から一般に産業が著しい發達をしなかつた上に、長い間の戦亂に惱まされたのであるから、地方の武士は概していふと生活程度が低かつたに違ない。後の人はそれを回顧して質素といふが、實は意識して行つた儉約ではなく、全體の文化が發達しなかつたので、仕方なくそれに満足して

わたに過ぎない。けれども華やかな生活を望むは普通の人情であつて、手が届けばそれを取らうとするに躊躇はしない（もつとも一方には、慣れた質素の生活にものづからなる安らかさを求めて、生活程度の向上を喜ばないものがあることは勿論であるが）。のみならず、戦争といふ主として肉體のはたらきを要することに従事し、籠城にしても野戦にしても、場合によつては極度に肉體の困苦を味はさせられ、其の上に何時死ぬかわからぬといふ境遇に置かれる武士は、其の自然の傾向として官能的の快樂を求め、従つて刺戟的な華やかさを悦ぶ傾がある。これが軍人には自然の心理的また生理的要求であつて、質素でゐられず、禁欲的生活をしてゐられないのが武士としては當然である。特に社會の秩序が無くなつて全體の空氣が動搖してゐる世の中では、思ひきつた勝手の振舞、放縱な行をすることも出来て、益々此の傾向を増長させる。だから一方で古典的文藝などを崇敬しても、そればかりで満足がでざる筈はなく、或はそれを官能的悅樂と結びつけ、或は其の外に別な刺戟と快樂とを求める。前篇にも述べて置いた如く、武將ともいはれるものゝ生活は大抵それであつて、此の時代になつても、外國貿易などで多く利益を得てゐる西國筋の諸大名は、随分豪華な生活をしてゐたらしい（大友義鎮や大内義隆が豪華をつくした有様は大友記や大内義隆記に詳しく見えてゐる）。ところが兼併の結果として大名の領地が大きくなり、

又た金銀などが多く出て財貨が潤澤になると、其の傾向は益々甚しくなるので、一般の地方武士は兎も角も、多少地位のあるもの、又は都會生活をするものは、決して所謂質素な状態に満足してはゐなかつたらう。

武士ばかりで無い。如何なる物騒な世でも、如何なる混雜の社會でも、何かの場合には何かの遊樂が無くてはならぬ。古い文化が衰頹して舊い遊樂の方法がなくなれば、それに代る新しいものが要る。世が固定してゐて因襲的趣味が權威を有つてゐる時には顧られないものも、斯やうな紛亂の時代には無遠慮に飛び出して來、それがまた自然に世の要求に應じて益々發達する。此の時代になつて京都に民間の盆踊が流行を極めたのは、其の一例であつて、老若貴賤群集してそれを見物し喝采したのである。朝儀の廢絶と共に、公事として行はれた貴族的の葵祭などがすたれて、町人の盆踊が京の年中行事になつたのは、此の時代の特色を示すものである（文學に於いて古風の連歌の外に、宗鑑や守武の俳諧體が起つたのも同じ風潮である）。此の踊は金銀綾羅の目のさめるやうな行装をして、幾十人の男女が町々を練りあるき踊りまはつたので、物まねめいたことをも演じたい（山科言繼卿記、永祿十年、十一年、元龜二年等の條参照）。上品なところの無い代りに、思ひきつて豪華なものであつたらしく、それは、ひたすらに華美を喜ぶ民間の遊

樂の特色を示すものであると同時に、戦亂時代の一般の嗜好もまたこゝに現はれてゐるといつてよからう。平和な時代に尙ばれるやうな、優雅な又た精練せられた趣味は、落ちつきの無い、物騒がしい、荒つぽい、強烈な刺戟でなければ感應しない、戦亂時代の人間には適合しないのである。さうしてそれは前に述べた武士の嗜好とも一致する。だから、これは必しも京都のみに限つたことでは無からう。

所謂桃山式の藝術は、斯ういふ戦國時代の趣味が、世の治平に歸すると共に、一層はてやかに現はれたものに過ぎないので、そこに豪放な秀吉の性格の影響も全く無いとはいはれなからうが、彼を俟つて初めて興つたものでは決して無い。特に多數の諸大名を會合するために要する廣い室には、狩野永徳などの絢爛たる色彩と雄渾な筆致とがふさはしいのを見ると、裝飾畫などは建築其のものから生ずる自然の要求もあつたのであらう。また柱や天井を漆ぬりにするやうなことも、一つは城郭建築の堅牢を要するところから來た點もあるのでは無からうか。屋根に瓦を用ゐたり、重苦しい唐破風を作つたり、其の他すべての點に於いて全體の結構が莊重で、外觀がドッシリしてゐるのも、城郭建築としては自然のことであらう。同じく華麗ではあるものゝ、金閣や銀閣の緻細な輕快な結構とは迥に趣が違つて、どこまでも戦國武人の間から生まれたいらしい特色がある。

さうして其の建築や裝飾法なども、信長の安土城に於いて既に出來上つてゐたらしい(信長記)。

さて安土城の天守の裝飾畫に、釋迦十大弟子や釋尊成道說法または天人影響の圖などがあるのを見ると、其の意匠は佛寺建築から來た分子があるに違ないが、實際柱繪や天井繪を宮殿建築に用ゐるのは、これより前には例の無いことであらうと思ふから、是は技術の點に於いても、直接もしくは間接に佛寺建築の影響を受けてゐるのであらう。たゞ宮殿又は城郭としては不似合な宗教的題目が其の儘に用ゐられてゐるのは、斯ういふ裝飾の法が世俗的建築に初めて適用せられたものであることを暗示してゐるのでは無からうか。さすればこれは、柱を朱や金に塗つたりするのと同様、此の時代になつてから行はれたので、そこに堅實莊重を欲すると同時に華美を喜ぶ戦國武士の風尙が、現はれてゐると考へても大なる無理は無からう(壁を總金の張付にするなどは例の金閣に淵源があるが、其の後も世俗的建築には用ゐられなかつたらう。もつとも金屏風は東山時代には既にあつたらしい。これもやはり武士的、もしくは成り上りものの趣味の發現であらう)。たゞ呂洞賓だの許由だの、又は高山四皓だの竹林七賢だのと、隱者のすまゐか禪院か、鬼も角も瀟洒たる、もしくは淡泊な建築の裝飾にふさはしく、また單純なる水墨畫に適する題目を、はてやかな金地の張付や屏風や襖に畫くのも甚だ不調和ではあるが、そんなことに頓著なく、思

ひきつて大きく、思ひきつて強烈で、又た思ひきつて豪華なところに戰國的精神が現はれてゐる。(所謂桃山式の建築の裝飾的彫刻などは頗る煩雜なもので、斯ういふ豪華な精神とは調和しないやうに見えるが、それをも構はずに用ゐたのが、やはり時代思想であらう。) 禪院の裡に行はれてゐた宋元風の水墨畫は骨董品として珍重せられ、繪卷ものゝ土佐繪も喜ばれたてはあらうが、武士の嗜好はそれでは満足せられないので、此の二つを結合しながら、それを大規模な極めてはやかなものにしたのである。

服装なども同様で、天正九年に信長が諸大名を従へ馬揃へをして叡覽に供した時、信長は紅梅に白のんだららの小袖をきて、其の上に袖口に金で覆輪をした蜀紅の錦の小袖を重ね、紅緞子の肩衣袴をつけ、腰に造り花をさし、諸大名もわれ劣らじとさらびやかな装束をしたといひ(信長記卷一四)、秀吉が伏見から參内をした時、鳥を背縫にし、襟を摺箔にした潤袖の羽織を着たといふ話にも、服装についての武將の趣味が見られる。所謂桃山藝術は畢竟此の思想が現はれたものに外ならぬので、今日にも遺つてゐるが、此の時代の婦人服のはてやかな大きい模様も、やはり同じ精神から出てゐる。秀吉の時代から一般に遊樂の風が盛になり、而もそれが野外的、公衆的で、又た頗る華美の趣のあつたのも、此の風潮と關係があらう(子女遊樂の圖といふやうな

のが此の時代から作られたらしい)。また此の頃盛に行はれた茶の湯は、歌連歌と同様に上品なものとせられ、茶器は支那畫と一般、貴重な骨董品とせられたのであるが、それにしても有名な北野の大茶の湯に、秀吉の氣象と時代の精神とが現はれ、茶器を天下の名物として、一つの茶碗にも數千金を投ずるところに、武人の豪奢を喜ぶ風尙が見える。

ところが斯ういふ華美の生活と遊樂の氣風とに對からぬ關係のあるのが外國貿易であつて、前にも述べた如く、輸入品が其の材料として用ゐられ、又た貿易によつて富を得てゐるものが、一層此の風尙を盛にしたらしい。だから珍奇を喜ぶ情と利益を得ようとする欲望とは、益々外國貿易の發達を刺戟し、九州邊の諸大名は外國船を争つて自分の領土に引き寄せようとし、信長も秀吉も貿易を奨勵した。明人はもとより、毛色の異つた歐羅巴人も大に歓迎せられた。すべての新しいものを喜ぶ邦人が、斯ういふ風潮に乗じて入つて來た「珍しい佛法」の切支丹をもてはやすやうになつたのも自然のことで、一種異風のちきて異風の「佛像」を安置し、異風の音楽を奏し、異風の儀式で異風の經文を誦するのも、好奇心を誘ふに力があつたであらう。また僧侶の傳へた異國の知識にも多少の興味を有つものもあつて、それも宗教の流行を幾分か助けたい。(羅

句字などが好奇的に玩ばれたことは知れ渡つてゐる事實であるが、まだ見ぬ世界のことを聞き、今まで知らなかつた知識を得れば、それを喜ぶと共に、其の知識を齎した異國人と其の宗教とを崇敬するのは自然である。宗教上の學校も設けられ、神學も教へられ、契利斯督記によれば、レトリカ、フィロソフィヤ、ロジカ、テオロキヤ等の名は、邦人の間にも知られてゐた。日本西教史によれば、日本人は天文の知識を得るを喜んだと報告せられてゐる。それから教會樂も一通りは演奏せられ、聖母の像をはじめ宗教畫も將來せられ、其の技術も傳へられたから、新しい藝術にも接したのである。もつとも音樂は日本人に喜ばれなかつたといふことが西教史に見えてゐる。貧民救助や病人治療やも幾分か其の弘通を助けたかも知れないが、そんなことが無くても切支丹は行はれたに違ない。兎も角も、昔し百濟や隋唐から渡來した佛教が歓迎せられたと同様に、切支丹も歓迎せられたのである。さうして此の宗教によつて（昔の佛教と同じやうな事情のもとに）異國の文物との接觸も幾分か密接になり、貿易もそれにつれて進歩し、従つてまた異國に對する景仰の念も動いて來たので、終には九州の大名から使節を歐洲に派遣するに至つた。此の使節は南歐文化の中心に於いて親しく其の狀を見て來たけれども、しかしそれは特別の事例であつて、何といつても遠隔の地ではあり、交通は極めて不便である上に、秀吉によつて下された

禁教の令が（少くとも一時）布教の勢を阻遏したため、歐洲の文化が國民の上に大なる影響を及ぼすには至らなかつた。奢侈品としての貨物は依然として輸入せられたが、學術文藝の上、思想上にはあまり大きい効果をば遺さなかつたらしい。

けれども外國人との接觸が、實際方面に於いて邦人の海外渡航を促したことは尠なくなつたので、所謂倭寇から引き續いて冒險的に海外に出かける風習は、歐洲人に刺戟せられ誘發せられて、一層盛になつた。秀吉の胸に畫かれた明國征服、四海併合の計は、もとより彼の個性、彼の境遇と、それによつて激成せられた彼の尋常一様ならざる事功欲とから出たものではあるが、其の背景としてやはり斯ういふ時勢のあつたことを忘れてはならぬ。さうして秀吉の態度も、かの冒險者流が確實な知識も秩序ある計畫も無く、夢のやうな空想に驅られて突飛な行動をしたのと大差が無かつたので、彼の計畫もやはり我れから縦に空中に畫き出した幻影を追うて走つたものに過ぎない。のみならず、彼の企が國民的要求から出たものでは無かつたことも、また倭寇一味の活動が、國民の海外に發展しようとする必要と希望とから生じたもので無いのと同様である。征韓の役に従軍した將士は武人の習として、敵に向つてこそは奪戰勇闘をしたれ、大抵は故國の天を望んで歸ることの一日も早きを願つてゐたので、國民の全體から見ても、海外征服其の事を

喜んだものは殆ど無かつたといつてよい。秀吉の薨去と共に遣外軍を撤退するに當つて、一人の異議が無かつたのでそれが判る。しかし秀吉も多くの冒険者も、我が力を新しい土地に向つて試るところに絶大の愉快があつたので、茲に活動的な、進取的な、また放膽な戰國的精神が現はれてはゐる。たゞ秀吉のは大なる事功欲を充たすために過ぎず、又たそれが一定の國土に對して企てられ、彼のみによつて行はれたことであるため、功名も事業も其の人と共に消え去つたのであるが、個人的に海外に出かけたものは、それによつて物質上の利益を得ようとしたのであるから、それがもし秩序ある平和的事業に向つて進んでゆくとすれば、到るところに、また何時までも彼等の活動する場所と機會とがある。けれども倭寇的習癖、戰國的氣風と、當時の幼稚な交通の狀態、及び商人にも武器の用意が必要であつた當時の事情とは、海外渡航をしてなほ半ば冒險的、むしろ冠掠的性質を帯びてゐたのであつた。さうしてその結果は、彼等が贅澤品の輸入によつて利益を得た位のことであつて、國民生活と國民全體の文化とは、それがために直接な又た大きい影響を受けるには至らなかつたのである。

## 第二章 文化の大勢 下

### 徳川時代の初期

斯ういふ状態の間に、政治上の権力は豊臣氏から徳川氏に移つて來た。秀吉といふ個人の力によつて打ち立てられ、世間に對する歴史的因縁も無く、固定した根據地も譜代の家來も有たない豊臣氏の権力は、事實上幼い秀頼によつて維持せられることが出来なかつたのであるから、さうしてあの天縱の英雄が死に臨んでの慘澹たる苦衷から考へ出された、頼みになりさうもないことを頼みにして不安心を將來に強いて安心しようとした、合議組織の中央政府は、初めから永續きのすべきものでは無かつたのであるから、さうして又た力づくで事をしようとする戰國的氣風は、一面に於いてなほ存在してはゐるものゝ、或は平和を望む自然の要求から、或は戰亂に疲れた點から、又た或は既に得た地位と勢力とを失ふまいがために、一たび治まつた世を再び戰亂の渦中に投ずるを避けようとする大名の態度から、治平を欲する念が一般に擴がつゐたのであるから、用心に用心をしながら、而も思ひきつてぶつゝかつた家康の大博奕は首尾よく成功して、關が原

の一戦に世は忽ち徳川氏の手に歸してしまつたのである。勿論斯うなるには種々の事情があつたけれども、それはたゞ大勢の推移を促したまでのものである。縦横の機略を胸に藏してゐたらしい黒田如水などが、大言壯語をしながら、九州の一角で寧ろ落ちつき拂つて世のなる様を眺めてゐたのも、或は又た戦後に諸大名が争つて徳川氏に阿附したのでも、それが察せられる。

さて徳川氏の政治は、其の將軍といふ名義上の地位が足利氏の後を繼いだものであり、朝廷との關係も、豊臣氏が關白の名により朝廷の最高官吏として天下に號令したのとは違ひ、再び足利氏の舊に復つて、朝廷の外に幕府を開いたのであるが、是は空名の上の變化に過ぎないので、豊臣氏とても、事實は嚴然たる武家政治を形成してゐたのである。たゞ徳川幕府が京を遠く離れた江戸に置かれたがため、政治上の中心がまた關東に移つて、朝幕の關係が鎌倉時代と同じやうな形になつたのが、秀吉の時とは違ふのみである（家康は秀吉と違つて鞏固な自己の立脚地を有つてゐるから、頼朝の鎌倉を動かさなかつたと同様、江戸に根據を据ゑる必要もあつたであらう）。さうして其の政治組織もまた、豊臣時代に成り立つた封建制度を繼承したものであつて、たゞ大名の配置を改めたまでである。更に語を換へていふと、戦國時代の割據主義、武士本位主義から成り立つてゐた状態を其のまゝにして、それを動搖させないやうに、幕府の權力で固定させたの

である。

此の態度は當時に於いて已を得ざるものであつた。大名がそれらの領土を有つてゐることも、武士本位の政治組織も、長い間に自然に養はれて來たものであつて、容易に動かさないものであり、諸大名の上に君臨してゐる將軍自身の實力も、また大名と同様な状態であつてゐる其の領土と武士とが、基礎になつてゐる。特に諸大名の間には、一般に平和を望む念が漲つてはゐるものの、それは彼等が自己の領土とそれによつて有つてゐる勢力とから割り出したものであり、又た戦國的氣風もなほ遺つてゐて、動もすれば實力を以て争はうといふ考が全く取り除けられず、或は世が太平に歸して脾肉の歎をなすものも尠なく、武士の常として、亂を思ふ氣分は決して消滅しないので、何時割據の世が再現せられないとも限らないといふ場合であるから、將軍自身も諸大名も常に其の用意をしなくてはならず、従つて此の政治組織の上に根本的大變革を加へるなどは、頭から思ふよらぬことであつた。だから政權を握つたものは、此の状態を基礎として其の上に自分の權力を打ち立てる他は無く、さうしてその權力を鞏固にする方法は、たゞそれを固定させて、動搖の氣をなくすることである。戦國時代の根本精神であつた實力競争主義を打ち消して、寸分の動搖を許さない秩序を樹てることである。これは秀吉が諸大名を統一した時から自

然に生じて來た筈の爲政者の方針であるが、秀吉は其の旺盛な事功欲、飽くまでも進まうとする勇猛心、其の豪放な性質に於いて、むしろ戰國的精神の權化であつて、其の對外活動もまた、統一した國家を提げて外國に向つたところが、舞臺を大きくした戰國競争の態度といつてもよい。従つて秩序の維持は（民間の兵器を取り上げたり、大名の配置に注意したり、内政に於いても決して放漫では無いが、それよりも）寧ろ彼自身の偉大なる人格と其の威力と、今一つは時勢の趨向とに任せてゐた傾があつた。ところが細心で打算的で組織的な家康と、其の後を承けた徳川幕府の政治家とは、其の政策の根本を此の方針に定めて、全力を秩序の固定に盡したのである。

徳川氏の政治組織は、大體に於いて戰國時代の風習と精神とを其のまゝに繼承すると共に、それを適用して戰國的紛亂を防止するやうにした巧な仕組みである。さて其の根本は第一に封建制度であるが、其の諸大名の幕府に對する權力關係は皆な一樣であるものゝ、徳川氏に對する情誼には、所謂譜代と外様との間に大なる區別があつて、譜代は本來の主従であるのに、外様は寧ろ敵國である。だから幕府は其の配置に意を用ゐると共に、政略的結婚とか、妻子を人質として江戸に留置するとかいふやうな戰國的外交術を用ゐ、外様大名を拘束して事を起すことの出来ないやうな仕組にした（もつともこれは秀吉時代からの傳襲的政策である）。 武家法度に大名の居城

の新造を停止し、私に婚姻することを禁じてゐるなども、やはり戰國時代の國主が其の勢力を維持するため、家來に對して取つた用意であつて（長曾我部元親百ヶ條、朝倉敏景十七ヶ條参照）、徳川氏は廣くそれを天下の諸大名に適用したのであるが、これもまた、かの五百石以上の大船製造を禁じたと同様、諸大名の活動を拘束する方法である。これらは一國の主權者が國民に向つて取る政策といふよりも、寧ろ諸大名を敵國として見るところから生じたのであつて、徳川氏の平和政策其のものに戰國的精神があることを示すものである。（最初の武家法度に「自今以後、國人之外、不可交置他國者事」とあるのも、また前に述べて置いた如く、戰國の世に養はれた思想であるが、それを武家法度の一ヶ條としたのは、やはり此の戰國的精神を以て社會を固定させようとした爲であらう。「凡因國、其風是異、或以自國之密事、告他國、或以他國之密事、告自國、佞媚之萌也」といふのが、どれ程幕府の政策に關係があるか、やゝ不明の點もあつて、寛永の法度に此の條を削つたのは偶然で無からうが、兎も角も動亂時代の戰國思想によつて、却つて動亂を防がうといふ意志だけはこれでも認められる。不審のものに宿を貸すなといひ、身元出所のためしかなものに限つて郷中へ移住させてもよいといふ寛永十四年の法令なども、かの五人組の制度と共に、一種の警察的方法に過ぎないものはあるが、やはり小範圍に於ける同一精神の發現で



ある。)大名自身が一方で治平を望みながら、なほ戰國的制據主義を其の國政の基礎としてゐる世に於いては、これは當然のことである。

第二は、これも戰國時代其のまゝの武士本位の政治主義、武士中心の社會組織であるが、此の武士は主従關係と世襲的階級制度とによつて、緊密に結合せられ秩序づけられてゐる。さうして彼等は將軍及び諸大名の域下に集中してゐるのが原則であつて、其の生活は主人から給せられてゐる祖先傳來の知行俸祿によつて維持せられる。此の風習も戰國時代から平和の世に移るに従つて、ちのづから多少の變化があるので、戰國の世の主従關係は、譜代が根本になつてはゐるものの、間斷なき戰闘は武邊ものを要求することも多く、武人もまた戰場に我が働きを見せる機會が多いので、それがために新しい主人をもち、新しい家來を抱へる場合も多く、又た譜代の家來とでも、大體に於いて家格が定まつてはゐるものゝ、働次第で知行も身分も引き上げられる。ところが戰爭の久しく絶えた平和の世になると、自然にさういふことが尠なくなつて、主従の關係も家來の家格及び其の知行俸祿も段々固定する傾向が生ずる。徳川の初にはまだ戰國の餘風があつたのと、新しい大名が出來、また浪人が多かつたとのため、新に人を抱へ、抱へられる場合もあつたが、それでも家のつづれた大名などが多く、従つてそれから生じた浪人などは、ありつく場

所がないので社會の裏面に沈淪してゆくものが尠なくなつたらしい(中村座などの芝居ものゝうちには饑饉に迫つた浪人があつたといひ傳へられ、乞食に落ちぶれた浪人もあつたといふ。小説の七人比丘尼には浪人の娘が遊女になつた話がある)。さうして此の主従關係や家格の固定するものが(自然の趨勢ではあるが)ちのづから徳川幕府の固定政策と一致してゐるのである。(序にいふ。主従關係を生活の基礎としてゐる武士が、社會の中心となつてゐる時勢であるから、武士で無い町人でも百姓でも又は職人でも、雇主と被雇者、主人と僕婢、師匠と弟子等の間柄は、武士の主従と同様に見なされ、男のみならず女もさう考へられた。徳川時代の社會の紀綱は主としてそれによつて維持せられたのである。)

社會を固定させようとする徳川幕府にとつては、浪人といふものは大なる障礙である。社會からいふと、整頓しつゝある社會組織に編み込まれないあふれものであり、歴史的にいふと戰國時代の遺物であり、又た彼等自身に就いていふと、其の身を立てる機會を捉へる便宜上戰亂を好むものであり、或は平和な窮屈な社會組織に編み込まれるには、餘りに放埒な、餘りに自由を好むものであり、權勢に服従するにはあまりに意地張りであつて、一口にいふと戰國的精神を平和の世に代表してゐるものである。事實からいつても、大阪の役は半ば此の浪人の行動によつて起つ

たもので、社會的眼孔から見れば、此の役は徳川によつて代表せられてゐる治平的精神が、此の戰國的精神を折伏したものである。さうして戦後に其の浪人どもを救して、それ／＼に主人を求めてありつかせるやうにしたのが、此のあふれものを社會組織に編み込んでしまはうといふ幕府の巧妙な政策であつたのである。此の後も幕府は浪人に對する吟味と注意とを怠らないと共に、彼等の主人持になることを希望した様子がある(寛永十一年七月の法令参照)。もつとも割合に多く大名をつぶしたり、末後の養子を許さないの、子の無いために大名の家を斷絶させたりしたのは、一方に於いて斷えず浪人を作つてゆくのであつて、こゝに政策の矛盾があるやうであるが、これにはまたあつたのづから別個の政治的理由があつたので、それも、やはり徳川氏の政權を固める必要からであつたらしい。が、大名の淘汰も三代將軍ごろで大抵片がつき、また養子相續の條件も後には緩和せられて、此の點から大名の斷絶することも殆ど無くなつた。(序にいふ。治平的精神に反抗する戰國分子的浪人とは少しく趣が違ふが、かの異様な風をして亂暴をはたらく所謂かぶさもの、又は後の男だてと稱するものも、また權力と秩序とに反抗するあふれもの精神を現はしてゐる點に於いて、浪人と共通の點がある。江戸つ子の中に生まれた俠客氣質は、或る意味に於いては征服者たる三河武士とは反對な、被征服者たる關東ものゝ風尙を傳へてゐる

と見做すべき點もあるが、兎も角も幕府の權力的秩序主義に對する一種の反抗であることは明である。)

さて武士本位の政治、武士中心の社會を維持してゆくには、武士の地位と權力とを何處までも保護し、それと平民との間に明な區別をしなければならぬ。武士の階級を固定したものととして、平民から成り上がることが出来ないやうにする(戰國時代のやうに平民が武功を樹てる機會が無いから、これも自然に馴致せられる状態ではあるが)。町人には帶刀を禁ずる(慶安元年二月の令)、武士ならぬものに「いらざる武藝」を心がけることを禁ずる(正保四年六月の猿樂の役者に對する命令)。特に農民に對しては、戰國時代以來の風習を一層徹底させて、それをたゞ武士に生活の資を供する道具としてのみ認めるのであつた。本佐錄に「百姓は財の餘らぬやうに不足なきやうに治ること道なり」といひ、「一年の入用作食をつもらせ、其の餘を年貢に收むべし」といつてゐるのは、百姓の生産物から彼等の(最低度の)衣食に必要な部分だけを除けて、其の他は全部取り上げよといふので、其の取り上げるのが武士の生活の資とするためであることは勿論である。是は固より一種の政治論に過ぎないのであるが、寛永年間に屢々下された法令を見ると、百姓は雜穀を食つて米を食ふな、布木綿の外は衣るな、酒茶を買つて飲むなといひ、農民の生活

を最低限に据ゑて置かうと努め、さうして貢米を澁滞せぬやうにと深く戒めてゐる。實際其の通りに行はれたかどうかは別問題としても、爲政家の用意の茲にあつたことは明であつて、或程度までそれは實行せられたに違ない。家康も「難義にならぬほどにして氣儘をさせぬが百姓への慈悲なり」といつたといふ。武家政府の對農民政策は、農民自身を發達させるためでは無かつたのである。農民を大切にせよとは、武士に對しても常に教へられてゐるが、それは全く武士の生活を支へてゆくに必要なだからといふ意味に過ぎない。かういふ時代に於いて、政治上、社會上に農民の地位が低かつたことは當然であらう。(徳川幕府は外交上に於いても國民を保護するといふやうな考は少しも無く、日本に來る外國人の犯罪を彼等の長官の裁斷に任せたに拘はらず、外國に往つてゐる日本人については、それを一切其の土地の外國官憲に委ねてゐた。これは一つは國家的觀念の發達しなかつた故もあるが、一つは國民を眼中に置かなかつたためでもある。外國に對する我が國といふ觀念の内容が治者のみであるのは、人民を以て治者のための道具と思つてゐたからである。)

以上は徳川政治の二大綱領であるが、概括していふと、其の根本の主義は動搖してゐた戰國時代を固めようとするものである。さうして其の固めかたは戰國時代の狀態を其のまゝに動かさない

やうにするのであるから、丁度今まで山風に弄ばれてゐた池水の動搖をビタリとめて、急に零度以下の寒さにさらしたやうに、結晶した氷の表面には波の有様が其のまゝに遺つてゐるのである。たゞ戰國時代はすべてに自由の氣が充ちてゐて、勝手次第に我が儘の出來たのが、此の固定政策は一切それを抑壓して、あらゆる事物を動きの取れない窮屈な型にはめてしまはうとするのであるから、少しでも新しいこと異つたことは成り立たないやうにせられた。寛永の法度に「企新義、結徒黨、成誓約之儀、制禁之事」とあるのは勿論のこと、すべてに於いて新規新儀を禁じ、舊例、先例、先規を重んじ(慶長二十年の禁中並公家中御法度、諸山諸寺の法度等)、風俗の上ですら、屢々異様の行装、所謂「かぶき」たる風を禁じ、武士に對しては「がさつならぬ」様にと訓戒してゐる(是は前に述べた戰國時代の自由な放埒な異様の風體を好む氣風が一般に遺つてゐるのを見て、それを抑制し、風俗を一定の型にはめようとしたのである)。思想の上に於いても同様で、少し後のことではあるが山鹿素行の罰せられたのも、新義を唱へて人心を動搖させるといふところに一原因があるらしい(このことはなほ後編にいはう)。

少し様子は違ふが、幕府の皇室に對する態度も、又たかの基督教の禁止及び所謂鎖國令も、畢竟はやはり此の固定政策の發現に過ぎない。朝廷と政權とは足利の代から既に全く離れてゐて、

皇室は政治上に於いてたゞ間接に一種の道德的、精神的影響を與へられるのみであつた。信長や秀吉の朝命を戴いたのも、畢竟名義上のことに過ぎなかつたことはいふまでも無い。さうして朝廷の面目は古來の風習に従つて其の位置を示す儀式によつてのみ保たれ、應仁以後の所謂朝廷の式微も、此の朝儀の壞類をいふのであつたが、信長秀吉は御領を奉つて幾分かそれを復興するやうにしたのである。彼等の尊皇の意義も主としてそこにあり。皇室の彼等を嘉賞せられたのもまた之がためであつた。聚樂の行幸の折の管絃の聲は、此の點に於いて昔ながらの朝廷の遺音を傳へたものとして、泰平の響がそこから起つたやうに感ぜられたのであらう。當時の朝廷に、政治に關與しようといふ考が無かつたことはいふまでも無く、事實またそんなことが出来る筈も無かつた。だから信長、秀吉よりも一層多く御領を奉り、朝儀の回復を一層都合よくした徳川氏は、一層尊皇の實を擧げたのであつて、皇室もそれを嘉納せられたことは、後水尾院が其の年中行事の巻首に書かせられた一節を見ても判る。もつとも應仁の亂の前ほどにもならなかつた點に於いて、多少御不満足であつた御様子は拜せられるが、それはそれとして、承久や建武の昔を追想遊ばされたのではないことは明であらう。(秀吉や家康の奉つた御領はよし多くはなかつたにせよ、彼等の行動が國家をぬすみ、皇室の直轄せらるべき國土を私したと評すべき筋のもので無いこと

は勿論である。)

たゞ徳川氏が皇室を高く俗界の上に置いて、一切の政治との關係を無くし、諸大名との交通をも絶つたのは、それが大體に於いて足利時代からの風習を繼承したものであると共に、信長や秀吉のやうに皇室の精神的威力を利用し、直接に勅命を標榜して事を起すものゝ出ることを防止するには必要の手段であつて、政權の安固を計る上には止を得ないことであつたらう(幕末の状態は事實に於いてそれを證明してゐる)。要するにそれは世の動搖を誘致すべき何等の機會をも作るまいとする固定政策の一現象であつたのである。さうして結果から見れば、それは(徳川時代のやうな專制政治の状態、而も政治上ばかりで無く天體の運行から風雨水旱までの責任を皇帝に負はせる儒教思想が知識階級の間存在してゐた時に於いては)おのづから皇室の神聖を保持する好方便となつたので、之が爲に國民はすべての政治上の責任を幕府に負はせると共に、宮廷を塵界遠く離れた雲の上の神の宮居として仰ぎ視るやうになつた。(しかし斯うして養はれた習慣は、國民生活の状態が全く舊時とは違つてゐる現代にもなほ残つてゐるので、それがために不徹底な、また實際の國民生活に適合しない一種の固陋頑冥な思想が生じ、却つて皇室に對する國民の眞の愛情の發達を妨げてゐる。) たゞ其の宮廷の周圍にゐる公卿の輩は、或は衣食の必要から、

また或は權力あるものに阿附するが常であつた昔からの歴史的遺習から、多くは幕府に諂諛して些少の物質的利益を得ようと努めてゐたが、それも國民生活の上には大した交渉の無いこととして、概していふと彼等は畢竟一種の別世界の住民に過ぎなかつた。

次は所謂禁教の令と鎖國の問題とである。外國に對して戰國的又は倭寇的態度を一變して、本和的通商を盛にしようとした徳川幕府の政策は、今さらいふまでもなく、呂宋に對して西班牙の商船を浦賀に招致しようとした初には、秀吉に一旦追放せられて、後また間もなく現はれて來たらしい切支丹伴天連の保護をさへ約束してゐる（慶長十三年及び十四年の呂宋に對する往復文書）。ところが外國貿易をば何處までも發達させようとしながら、慶長十六七年から突然切支丹禁止の態度を取つた。それには僧侶で神道者である天海などが家康の帷幕に參してゐたといふ事情もあらうし、外國の事情に暗いがため、二三の報告によつて切支丹が國土侵略の方便であり先驅であるといふことを聞き、急に用心をしなくてはならぬと氣が付いたといふ理由もあらうし、又た或は其の教徒に關する何かの事實を探知した故もあらうが、要するに耶蘇教を以て徳川氏の政治的秩序を動搖させるものと認めただからに違ない。（切支丹が國土侵略の先驅となるといふ報告は、必しも全くの誤解ではない。徳川の禁教の動機にどれだけ確かな事實があつたかは明て無いが、

耶蘇會の伴天連に幾分の危険性が無かつたとはいはれない。が、それにしても斯ういふ説は、人を見れば敵と思つて直に身構へをする習の武士の耳には甚だ入り易かつた。幕末の人が黒船來と聞いて直に我が國を覬覦するものと思つたのも、これと同じ心理である。さうして其の禁教を徹底的に勵行するため、遂に所謂鎖國政策を取ることにさへなつたのである。それには三代將軍の政府當局者が、家康時代の政治家の意氣と、まだ幾分か大やうであつた當時の心持ちとを失つて、ひたすらに守成的にコセ／＼して來たこと、西國人とは違つて東國育ちの彼等に、海外に手を出す習慣が無く、また海外の知識の乏しかつたことなどの理由もあらうが、兎も角も其の目的は世の動搖を防がうとする固定政策から出た禁教のためであつた。

序にいつて置く。幕府の主要な目的が、外人の渡來を止めるよりは、寧ろ邦人の海外渡航を禁ずるにあつたことは、寛永十年と十三年と、一令は一令より嚴に、反覆意を致して仔細に制定した法令の上からも明てあつて、葡萄牙人來航の禁は島原の亂後（寛永十六年）に至つて發布した比較的輕いものである。幕府は外國貿易杜絶の大方針を定め其の除外例として明人蘭人のみ許す許を與へたといふよりも、たゞ葡萄牙人の來航のみを特殊の事情から禁止したといふ方が適切である（後になつて、外國通商禁止の大方針が此の時から立てられてゐたやうに考へら

れたのは、外國に對する思想の變化したゝめてである。事實からいつても、當時の世界の大勢は西洋諸國の商船を盛に東洋に派遣させることは出来なかつたので、西班牙船の來航は家康が切に求めたにも拘はらず永續しなかつたし、英船も蘭人との競争に敵せずして來なくなつてゐる。葡萄牙人の東洋貿易も全體から見れば既に衰運に向つてゐる。だから明船及び安南、東蒲塞、暹羅等の船は勿論、蘭船も「御忠節」の恩賞として依然來航を許されてゐる以上、所謂カレウタ船の禁止せられた位は、海外通商の大觀からいへばさしたる變動では無かつたのである。さうして、當時の貿易は要するに奢侈品の輸入が主であつて、我が國産を外國に輸出するのでは無かつたから、其の利益は我よりも寧ろ彼にあり、我が國では商人が利益を得るに止まつてゐたのであるから、此のカレウタ船禁止は、我が國の産業の上にも、國家經濟の上にも大した影響は無かつたに違ない（もつとも外國貿易が盛に行はれるやうになれば、自然に國産も輸出せられるやうになり、従つて産業の發達をも誘つたてはあらうが）。それよりも迥に重大な損失は、海外渡航の禁によつて邦人の意氣を銷沈させ、精神を萎縮させ、又た海外に關する知識を失はせ、後年歐人が大に東洋に手を出して來る時に至つて、海上の權を全く彼等の手に委ねてしまはねばならぬやうにさせたことである。鎖國の眞の意味は茲にあるので、それは窓を閉

して外から來るものを防いだよりも、門を杜ぢて内から出るものとめた點にある。

さて、世は斯かる徳川氏の幕府の下に平和になつた。平和にはなつたが、全體の社會の組織が戰國時代のまゝであるから、一般の文化にも急激な變化は無く、たゞ固定した社會、平和の狀態に應ずる新運動が、徐々に其の間から現はれて來るに過ぎない。政治上に於いて徳川氏の權力の全く固まり、幕府政治の整頓した寛永時代までは、文化の上にもまた概して戰國時代の引き續ぎといつてよからう。諸大名は各々其の領土に於いて、萬一の場合の準備をしなければならぬ。武器の用意を缺かしてはならぬ。城郭も堅固にして置く必要がある。従つてこれと同じ事情から發生した戰國時代の工藝は、やはり同じやうに需要がある。武士は依然として城下に集中してゐるから、それから生ずる經濟組織にも變化は無い。學問や文藝も戰國武士の間に行はれてゐたとほゞ同じ程度に行はれてゐる。身分の低い武士の急に大名になつたものが多く、これがために新しい武家貴族が出來ても、それはもはや足利時代の初め成り上りものとは餘程様子が變つてゐる。彼等もまた概して學問の上にと通りの素養はあつたので、木下長嘯はいふまでもなく、豊鑑の著者竹中重門があり、又た淺野幸長など、惺窩の門人となつたものがあるのでも、それが

推せられる。が、それと共に彼等が特別に文字あるものとせられてゐたので一般の様子はわかる。文筆の権もまだ概して、僧侶の手から脱しないので、幕府の文事秘書官が崇傳であり、顧問が天海であるのみならず、家康の企てた書物の出版や校正に従事したのもやはり五山僧である。儒者としての第一の先達であつた惺窩も禪僧の縮衣を脱いだものであり、道春もまた叢林の間から出て來た。勿論惺窩が縮衣を脱ぎ、道春が出家をせず、石川丈山が一度佛門に歸して後まもなくそこを出たのに、時勢の變化はあるが、彼等の儒學其のものが禪僧の學統を承けたものであることはいふまでも無い。後にいふやうに通俗文學の作者も僧侶、少くとも武士の佛門に歸したものが多く、連歌師もやはり遁世者の衣鉢を傳へてゐる。藝術も概していふと、所謂桃山式の引き續きであり、繪畫には土佐や狩野の系統さへ其のまゝに存在してゐる。能がなほ一般に賞翫せられたことは、勸進能があり、又た遊女などが能を興行し（慶長見聞集等）、操にも能を摸したもののあつたことと察せられる。幸若舞が武家の間に好まれたことはいふまでも無からう。

しかし其の間におのづから新傾向は生じつゝある。其の一は平和の續くにつれて、戰國的の豪放な精神、自由な氣象が漸次銷磨し去られ、其の代りに型にはまつたコセ／＼した風尙が徐々に現はれて來るのみならず、幕府の固定政策の直接の影響を受ける方面では、一層それが甚しかつ

たので、すべてが緻密な窮屈な傾向を帯びるやうになつたことである。日光廟の建築などは最もよくそれを示すものであつて、華麗を極めてはゐるが、毫も雄大な風はなく、堅牢でもあり、贅澤でもあるが、其の堂塔の配置にも構造や裝飾にも、一體に窮屈な風がある。これには或は城郭建築の影響もあるのでは無いかと思はれ、又た土地の狭い故もあるが、場所としてあの小さな竈底を撰んだことが（それに如何なる宗教上又は政治上の意義があつたかは別問題として）既に精神の萎縮した證據では無からうか。寛永十三年の其の祭禮が、三十年前の慶長十年に行はれた豊國神社の大祭の、花やかな豪壯な大規模な、特にそれが平民的であつて、京の市民が盡く熱狂して踊りつ舞ひつしたのとは違つて、甚だ嚴肅で且つ貴族的、官僚的であつたのも、また同一傾向の現はれたものであらう。

其の上に徳川幕府の爲政者は、家康によつて代表せられてゐる如き其の質實な三河武士の氣風を承けてゐる點から、又た全體の固定政策の上から、さうして又た後になつては生活程度の向上によつて一定の俸祿に不足を感じて來た旗下の武士の家計紊亂を防止する必要から、一種の（儒教思想とおのづから相通ずるところのある）功利的な實用主義を其の政治の上に行はうとして、文華な傾向を抑へようとした。だから、幕府の施設が外觀上甚だちみて、無趣味で、むしろ殺風

景であつたのは自然の勢でもあらう。武士の服装などを見ても、信長や秀吉時代の華やかな面影は、少くとも表て立つた場合には、もう何處にも遺つてゐないは無いか。もつとも武士の全體から見れば、一方に於いて長い戦國時代の生活程度の低い、困苦艱難を事ともしない習慣が維持せられ、またそれを尙ぶ傾向もあつたことは勿論であつて、家康などのぢみな考も、畢竟それを繼承したものはあるが、前にも述べた如く、戦國時代の他の一面には放縱な自由な豪快な氣風があつて、秀吉はむしろそれを代表してゐたのに、徳川氏の態度は前の方を獎めて後の方を抑へようといふ方針であつて、それがおのづから政治上の固定政策に伴つてゐたのであつた。

其の二は商業の發達とそれに伴ふ商人の勢力の増加とである。商業は戦國時代から既によほど盛になつて來てはゐたが、世の平和になつたのと、社會が固定して經濟組織が秩序立ち、生産者と消費者とが全く區別せられて、中央と地方との間に經濟上の聯絡を要するやうになつたために、一層其の活動の範圍が廣くなつたのと、一般に生活程度が高まつたのと、貨幣が多く行はれて金融が圓滑になつたのと、此等の種々の事情から、徳川の代になつては急速にそれが發達したので、大阪が政治上の勢力を失ふと共に、商業都市として新に勢力を得、堺に代つてそれよりも大なる活動をするやうになつて來たのは其の明證である。しかし、武士本位の社會に商人の勢力を得る

のは(其の實、武士本位の社會であることが商業の發達した一理由となつてゐるもの)、全體の社會組織からいふと一種の矛盾であり、また商業の進歩は益々物質的文化的發達を促がし、生活程度の昂進を誘ふものであるから、そこに徳川氏の實用政策との矛盾も生ずる。

其の三は今迄に無い新しい分子が文化の上に加はつて、それが平和の時勢に投合したことである。新來の三絃が民謡の伴奏樂器となり、又た淨瑠璃に結合し、それによつて新しい民間樂が起り、操と歌舞伎との民間藝術が進歩したことは其の最も目立つた一例である。(新しい藝術としてはなほ歐洲人から傳へられた油繪もあつて、是は趣味の上からは、濃厚な色彩を加へられた寫實的な風俗畫を喜んだ當時の人に、愛好せらるべきものであり、西洋畫の摸作としては、異國情調を傳へて邦人に喜ばれたに遠なく、従つて實用的にも屏風繪として賞翫せられたであらう。が、其の技巧を學び得たものも尠く、又たそれを學ぶのも本來宗教畫のためであるから、其の外のものは餘り多くは作られなかつたらう。しかし現存の泰西王族騎馬圖などは屏風畫である上に、技巧の上にも幾分の土佐繪的分子があるやうに見えるから、其の反對に何等かの影響を、主なる系統を土佐繪から引いてゐる浮世繪などの上に及ぼさなかつたともいはれまい。)

さて操や歌舞伎の新藝術の發達は、當時一般に盛になつて來た遊樂の風と密接の關係がある。



概していふと、平和の世に於いて遊樂の機關の發達するのは自然の傾向であるが、特に此の時代に於いては「馬上少年過、世平白髮多、殘軀天所赦、不樂亦如何」(伊達政宗)の感慨もあつて、益々それを強めた。政宗の眞意如何は別問題として、明けても暮れても味方を勝たせよう、敵を破らう、一番槍の功名を擧げよう、と太刀打ちものゝ吟味、兵法謀略の詮議にあらん限りの力を注いだものが、其の力の用ゐどころが無くなつた新しい太平の世には、それを別の方面に向けねばならず、さうして太平の世ながら社會組織は依然として戰國の儘であり、武士は何處までも武士として生活しなければならぬ世に於いては、彼等は新しい方面に新しい事業を起して、そこに新しい活動をする訣にはゆかないのであるから、それがどこかに遊樂の天地を開いて、官能的の快樂を求め、それに向つて有り餘る精力を注ぎ盡さうとするのは當然の成り行きである。さうして彼等の多數が、概して武術の外にはさしたる修養の無いものであるため、武人の地位としても企て得る眞面目の事業に手をつけるだけの能力が無いこと、また武士には自然の傾向として放縱な快樂を要求する風が戰國時代からあつたこと、並に商業が發達して奢侈品の供給が潤澤になつたことも其の趨勢を助ける。かの操や歌舞伎の新しい演藝は實に此の氣風に投合したのであつて、それが京にも江戸にも到る處にもはやされたのは無理では無く、法令の力でそれを制しようとする

しても出来ることでは無い。女歌舞伎が禁ぜられると若衆歌舞伎が起る。若衆歌舞伎が止められると野郎歌舞伎が生ずる。操は斷えず新しい淨瑠璃、新しい説經を迎へて益々繁昌する。實用主義の道學先生が如何にむづかしい顔をしてみても、それを抑へることは出来ない。そのみで無し。吉原といひ、新吉原といひ、六條といひ、鳥原といひ、所謂遊里の繁榮は徳川の世になつて急速に加はつて來たらしく、一寸先は闇、命は露のま、明日をも知らぬ浮世なるに、たゞあせあせとて、わざくれ橋を渡りゆくうかれ男が多かつた。大名さへも遊女を妻にしたものがあるといふ(當代記)。其の日常の生活が無趣味で殺風景であるだけ、遊樂の境を此の人生以外の人生、社會以外の社會に求めたのも怪しむに足らぬ。一種の實用主義と粗野なる戰國的武士生活の遺習とが、眞の上品な趣味を其の日常生活に養成させないで、却つて斯ういふ横みちに彼等を誘ひ入れるやうになつたのである。もつとも新演藝や遊里は武士ばかりのために繁昌したのでは無く、商人の力も大きかつたことはいふまでもない。(序にいふ。遊女は昔から斷えたことが無く、特に京では戰國時代にも足利の世から引き續いて相應に多かつたに違ないが、それが六條や後の鳥原のやうに、一定の場所に於いて一定の制度の下に行はれたのは、やはり平和の時代になつて社會全體が秩序立つて來てからのことではあるまいか。江戸の吉原のやうに、新に政府の特許を得

て開かれたものはいふまでもない。

戦争を本務として戦争の外に心得のない武士が、其の戦争の無くなつた世の中に於いて、用ゐどころの無くなつた力を横みちに向けてゆくのは、自然の勢であるが、それが長く續けばあつから本務には遠ざかつてゆく。大阪陣に於いてすら早く既に武士の氣風はゆるんでゐたらしく、三河物語の著者は随分激しい嘲罵をそれに浴せかけてゐる（もつとも是は、何時の世にもある昔氣質の老翁が、今の世にあきたらぬ不平の言として、多少の割引を以て聞く必要はあらうが、それに一面の眞理の含まれてゐることは疑がなからう。此の役は政治上に於いてこそ重大の意味があるが、戦争としては、戦國時代に生ひ立つて幾度か生死の間をさりぬけて來た古武士の眼には、兇賊ともまゝごとくも映じたであらう。それから二十餘年後の島原の役に至つては、將士の武事に疎かつたといふ話が後までも傳はつてゐる（常山紀談）。實戰の經驗のあるものが甚だ少なくなつてゐた頃であるのに、四十餘年の太平に慣れては、さうなるのが當然ではあるまいか。勿論、古老から武邊の物語は斷えず聞かされてゐたらう。劍道槍術、弓鐵砲の修業も一と通りは行はれてゐたであらう。家のをしへとしても社會の風尚としても、一種の武士氣質が養成せられ砥

礪せられないことは無かつたらう。けれども日常の實生活が戦争と縁遠くなつてゐる時、戦争によつて養はれて來た武士的精神が、緊張してゐないのはいふまでも無い。自分自身に閱歴して來たことでも、時が経てば其の折の昂奮した感情は遠い世の夢として仄に想ひ浮かべられるに過ぎないのが常である。況して自分の體驗したことが無い戰場のはたらきや、戦國の世の心構へなどは、如何にそれを古老から聞かされたとして、切實に胸に響き心に銘して我が情生活の基調がそれによつて定まるに至らないのは怪しむに足らぬ。

其上、其の武道の訓練も概して家庭と私の師範と各自の心がけとに任せてあつて、公の制度としては存せず、世襲的階級制度が段々固定して來て、自己の力量で自己の地位を作つてゆくことが出來なくなつた當時に於いて、訓練が行き届かず、自身に勵みも起らないのは怪しむに足らぬ。のみならず、戦闘的精神の根柢には、自我を大にしようといふ欲望と、一種の放奔な情熱とがあるのに、外部に現はれる秩序を重んずる幕府の固定政策、また太平の世の氣風は、全くそれを抑制しようといふのであるから、「肩衣にて目をつかせてありく」(三河物語)ものが多くなると共に、眞の武士的精神は年々に銷沈してゆくのである。さうして日々に盛になつて來るのは、爲すべき事業が無くして衣食だけはできる遊民には必ず伴つてゐる遊惰の習と享樂的氣風とであ

る。要するに、戦争の無い世に於いて戦國時代の習慣を其のまゝに保持してゐる社會組織は、社會の中心である武士其のものゝ生活を不健全に導き、武士的精神を失はせてゆく根本の原因だと見なければならぬ。こゝに徳川時代の社會組織の自家矛盾がある。

それからまた、武士の俸祿は一定してゐるのに、平和のつゞくと共に生活程度は断えず高まつてゆくから、彼等の家計は漸次窮乏を告げて来る。幕府直屬の將士は都會的生活をしてゐるだけに、それが特に著しく、三代將軍の時既に家計困難に陥つたものが非常に多く、幕府は其の救済法に苦しんだといふ。それがために切腹したもの(堀田上野介)さへある。大名の經濟も段々苦しくなつてゆく。さうして金融の權を握つてゐる商人がそれと共に益々勢力を得て来る。武士本位の世に、世を動かす實力を町人が有つてゐるのは矛盾であらう。また武士が困窮すれば自然に農民に對する徵求を酷にする。が、農民の疲弊は即てそれによつて養はれる武士の困窮を一層甚しくするものであつて、茲にもまた武士本位主義の自家矛盾が生ずる。

そればかりで無い。封建制度にもまた矛盾が伴つてゐる。大名を拘束して活動させないやうにするのが幕府の治安策であるのに、其の結果は一旦事あつて彼等のはたらきを要する日に當つて、彼等を束縛することになる。島原の亂の時、既に其の弊が現はれたので、幕府は其の前に諸大名

に對して、如何なる事變があつても兵を國外に動かすなと命令してあつたのを、戦後に至つて改めねばならなかつた(寛永十五年五月の法令)。戦争の場合に於いても、動もすれば征討軍の間に統一を缺くやうなことがあつたらしく見えるが、それも諸大名が各々其の手兵を有つてゐるからである。また幕府の内治策からいへば、大名の貧弱なのが寧ろ其の望むところである。参勤交代制も結果から見ると大名を衰弱させることになる(本來の主旨は必しもさうでは無かつたらうが)。ところが大名の貧弱は即ち全國の貧弱で、いひかへると幕府政治の根柢が薄弱であるといふことになる。これは諸大名を敵國と見なければならぬ戰國的思想から來た幕府の態度と、全國の政府として大名に臨むといふ幕府の地位との、矛盾した二精神が此の封建制度に含まれてゐるからである。

徳川政治の二大綱領である封建制度と武士本位主義の社會組織とは、斯ういふ根本的自家矛盾を有つてゐるのである。さうして皇室を高く政治の上に置くといふのも、外國との交通を遮断するといふのも、國家の歴史と人類の自然の状態とに矛盾する不自然の制度である。だから何時かは内部に潜んでゐる此の矛盾が、矛盾として明に表面に現はれる時が來なくてはならぬ。内政に於いては寛文元祿時代に既にそれが現はれて來て、種々の改革策、彌縫策、糊塗策が論議せられ

實行せられた。けれども年を経て其の彌縫や糊塗が段々きかなくなると共に、海の外からよせて来た大濤は其のうはぬりを洗ひ去つて、此の矛盾を暴露させ、幕府は遂にそれがために崩壊してしまつたのである。それまでには二百餘年の長い月日があるけれども、其の自家矛盾は幕政其のものが成り立つと同時に有つて生まれたものである。

しかしながら徳川の時代は、我が國民生活の發達の途中に於いて、一度は是非とも踏まねばならなかつた重要な階段であつたので、封建制度も武士主義も、國民文化の歴史から見ると、其の上にななる貢獻をしたものであることはいふまでも無い。それは長い間の戦亂が徳川氏の此の制度によつて鎮靜せられたばかりで無く、此の固定主義の社會に於いて初めて國民の實力が養はれ、古くからの文化上の種々の要素が融合統一せられ、さうして國民全體の文化が形成せられたからである。さうしてそれは寛文元祿時代から大に現はれるのではあるが、其の勢は既に戦國時代から徳川の初にかけて漸々に馴致せられて來てゐるのである。

戦國時代から徳川時代へかけての文化上の特色は、第一に、これより前には個々に分立してゐた諸要素が、本來の固有のものを中心とし基調として、綜合せられる傾向を生じて來たことであ

る。それは藝術に於いて最もよく現はれてゐるので、禪僧の傳へた宋元畫の技巧は國民藝術たる大和繪に融合せられて狩野永徳や山樂などの作となり、一轉して所謂浮世繪となつたことなどが其の一例である。東山時代の狩野元信は既に其の端緒を開いたものであつて、有名な清涼寺縁起繪卷の如き支那畫風の筆致で土佐繪まがひの繪卷物を作り、同時代の作者で其の姻戚でもある土佐光信も、また或る點に於いて支那畫の様式を應用した形跡があるが、彼等の作にはかういふものでも、一つの畫面に於いて兩つの要素がなほ互に遊離してゐる様子が見え、元信の如きは其の本職はどこまでも支那畫の摸倣であつた。混合してはゐるが融和はしてゐない。ところが永徳などになると、それがほゞ融和の域に達し、それよりやゝ後の所謂浮世又兵衛(荒木勝重)によつて代表せられる浮世繪に至つて、全く渾一したのである。永徳の時代に於いて題材を支那の傳説にとつたものは、前にも述べた如く、題材と土佐繪から脱化した技巧とが十分に調和してゐない嫌もあるが、浮世繪の基調と題材とは固有の土佐繪を繼承したものであつて、畢竟それと同様の風俗畫であるから、かういふ不調和が無い。浮世繪の本體は支那畫で無くて固有の大和繪であり、大和繪が支那畫の要素を吸収包和して、其の内容を豊富にしたのであつて、是が時代と共に繪畫の發達してゆく正系である。印刷術の行はれるやうになつてから世に弘まつた繪畫が、此の浮世

繪であることは勿論である。(支那畫家の系統に屬する山樂などもやはり、種々の風俗畫を作るやうになつた。) 所謂桃山式の藝術に於いて彫刻や繪畫が建築に結合したのも、或る意味に於いて同じ潮流を示すものであらう。本來無關係のものも長く接觸してゐると、その間におのづから一致點が見出され、時の經つに従つてそれが融合して來るのは自然の傾向ではあるが、戰國の混亂時代に於いて、人心が自由になつて因襲的繫縛が解かれる氣味のあるのと、新しく外國から入つて來る有力のものが無いのと、又次に述べるやうに一般文化が平民的國民的になり、従つてすべてが實生活と緊密に接觸して來たのが、特に其の趨勢を助けて、斯ういふ現象を生んだのであらう。

特色の第二は民間が文化の主要なる舞臺になつたことである。これは前々の時代から漸次馴致せられて來たことではあるが、社會上、政治上の活動の中心が民間に移り、下級の民が起つて上級のものを仆し、新しいものが榮えて古いものが亡びた戰國の世に於いて、それが著しく現はれ、此の戰國を承け繼いだ徳川の時代、特に世が平和になつて、商業などの發達して來た社會に於いて、その傾向が一層加はつたことは當然である。藝術に於いて宗鑑や守武によつて唱へられた平民的文學が起り、歌舞伎や操の平民的演藝が盛になり、印刷術が發達して、文學はもとよりのこ

と、浮世繪の如きも挿畫として、世に普く流布せられるやうになつたことなど、何れも其の徵證である。昔はすべての文化が公家貴族の保護の下に成立してゐたのであり、足利の盛時も其の公家貴族に代つた(將軍によつて代表せられてゐる)武家貴族が文化の中心であつたのが、二つとも勢力の衰へた戰國の世になつては、其の中心が崩れて文化が散漫になつたと共に、廣く世間に弘まり、徳川の時代になつても、それが其のまゝに續くと共に、朝廷は勿論幕府も特別に文化の保護者とはならなかつた(寧ろさういふ保護を要しなかつた)のである(書物の印刷などは其の例外であるが、それも一時のこと、すぐ止んでしまひ、あとは民間で自由に行はれるやうになつた)。こゝに我が國の文化の大に進歩すべき契機がある。徳川時代の文化(特に文藝)に貴族的と平民的との二潮流があつたやうに觀察する批評家もあるが、著者の見解はそれとは違ふ。所謂貴族的文藝即ち歌や連歌や能や又は摸倣的支那畫などはたゞ儀式的に保存せられた前代の遺物であつて、生命ある文藝では無い。さうして三絃樂でも歌舞伎でも又は俳諧でも物語草子の文學でも、或は浮世繪でも、すべての生きた文藝、前代の文藝から發達し又たそれを要素として取り入れてある新しい文藝は、平民と同様、貴族にも賞翫せられたのである。現に慶長の初には宮廷に於いてすら操などが演奏せられ、將軍や其の世嗣もまた歌舞伎や操を觀て喜んだ。後に宮廷や幕府でそれ

らを遠ざけたのは、或は徳川氏の政策の故であり、或はかの實用的な政治道德の見地からのこと  
で、趣味の上の問題では無い。大名などは勿論歌舞伎も操も見た。さうして浮世繪とか俳諧とか  
の新藝術は、貴族たる大名もまた平民と同様それを愛好したので、現に其の作品は大名の家に遺  
存し、或は武家貴族に其の作者があつた。又た工藝などに於いても、將軍家なり大名なりのみが、  
それに對して特殊の位置を有つてゐたので無く、富裕の商賈なども其の發達に大なる貢獻をして  
ゐる。だから、文藝に貴族と平民との二つの潮流があつたとは考へられぬ。寧ろ社會上の階級的  
區別がそれに存在しなかつたと見るのが妥當ではあるまいか。

第三は文化が地方に普及したことであつて、これも亦た政治上に地方的中心が生じた戰國時代  
と、それを繼承した徳川の封建制度とに伴ふ現象である。勿論、京なり大阪なり又は江戸なりが  
特に優越の地位を占めてはゐるが、名古屋とか金澤とかいふやうなところはいふまでも無く、其  
の他にも大名の城下は大抵それ／＼の地方的文化の中心となつてゐて、交通が便利になつたのと、  
參勤交代の制が行はれたのと、經濟的に全國が結合せられてゐたのと、地方の文化もさして大  
都會に劣らないやうになつたのである（もつとも此の地方的文化は大體地方的都會である大名の  
城下、もしくは一二特殊の商業地に限られてゐるといつてもよいが、それはすべてが大名の城下

を中心としてゐる社會組織の必然の結果である）。さうして其の都會文化も、武家の中心の江戸、  
商業の中心の大阪、また古代文化の系統をうけてゐて文學や工藝の上にはあのづから優越の位置  
を占めてゐる京都が、それ／＼に特殊の風尚を具へ特殊の色調を有つてゐて、昔のやうに凡てが  
中央政府の所在地に集中せられてゐないのが、此の時代になつて生じた現象であつて、やはり、  
文化の中央集權が崩れたことを示すものである。（これに比べると明治時代などはよほど中央集  
權的傾向が甚しい。それは新時代の文化には、外國から學ばれた要素が多く、さうして斷えず其  
の上／＼と新しいものを外國から採り入れなければならぬので、其の輸入せられた新要素が先づ  
中央に於いて結晶せられるからであらう。）もつとも文藝などに就いても、大に名を成すのは主  
として大都會の檜舞臺に上つてからのことであるけれども、其の役者には地方人があり、其の事  
業は廣く全國の觀客を相手にしてゐる。

第四は寺院が昔からの文化上の地位を失つたことである。所々の大寺院、特に南都北嶺は平安  
朝の貴族文明が衰微して後、其のあとを承けて文化の中心となつた觀があり、足利時代までは兎  
も角も其の地位を維持して來たが、戰國時代を経て徳川時代になつては、もうそんな有様が見え  
なくなつた。此の間に昔からの領地なども大部分無くなつたのであらう。さうして世が平和にな

つても徳川幕府の興へた、もしくは公認した領地では、とても昔からの勢力を支へ、若しくは回復することは出来ない。これは、一方に於いて文化が廣く世に弘まり、特殊の中心點の無い國民的のものとなつてゆく時勢にも、又た宗教其のものゝ勢力が減退してゆく思想上の趨向にも適合する。秀吉の大佛建立は(後にいふやうに)特殊の理由があり、徳川氏が寛永寺を建て、も、それに宗教よりは寧ろ政治的意味が重きを置かれてゐると共に、此の寺も其の僧侶も文化の上には何等のはたらきをもすることが出来なかつた。さうして寺の建立其のことすらも一向行はれず、建築にしても、昔權力を得たものが何よりも先づ寺を建てたのとは違つて、此の時代には城郭が主であつた。安土、大阪、桃山城を初として建築とそれに附隨する裝飾藝術とは、城郭を中心として大に發達したのである。徳川氏の一統以後に於いては勿論である。

以上は此の時代の文化の一般的觀察であつて、其の文化は概して前代から存在してゐる諸要素が、國民生活の状態の變化するにつれて、斯ういふ形式を取つて來たのであるが、此の時代に新しく外國から入つて來たものも、大抵はやはり同じ形式にはめ込まれる。三絃が入つてもすぐに民謡的の小唄や又は淨瑠璃に結びつき、平民的のものとなつて世に弘まる。朝鮮役の副産物である陶業なども地方的の工業となる。耶蘇教の如きに至つてはいふまでも無く、初から民間に行は

れ地方に行はれたので、佛教の渡來した時の状態とは全るて違ふのである。

しかしながら、此の時代になつても、斯ういふ新しい形式から遊離してゐるものが無いでは無い。古い文化の遺物は概してそれである。さうしてそれは特殊の遊戯又は儀式として、特殊の社會に特殊の状態で保存せられてゐる。例へば平安朝の貴族文化の名残である堂上の歌學、宮廷の雅樂であつて、是は生きてゐる國民文化と最も縁遠い京の寶庫にある。又た例へば足利時代に於いて武家貴族の力によつて發達した能や連歌や、禪院の間から現はれた支那畫であつて、是は幕府や大名の特殊の保護の下に生存してゐる。俳諧の行はれる世に連歌が殆ど柳營の儀式となり、操や歌舞伎のはやる時に能が所謂武家の式樂として取り扱はれ、實生活を寫す浮世繪の現はれるに至つて支那畫が世外の遊戯としてのみ存在するのは當然であるから、それが生きた社會から見棄てられると共に、斯ういふ状態に於いて保存せられるやうになつたのである。さうしてそれがために益々生氣を失つて愈々實生活に遠ざかり、現代離れのした古風な點、形式化せられ、又た、鏗のついた點に、一種の興味をひくだけのものになつてしまつたのも、亦た自然の勢である。連歌が俳諧となり、能が歌舞伎となり、宋元畫が土佐繪に吸收せられて浮世繪となつたやうに、新しい藝術の要素となつて其のうちに不朽の生命を有つてゐる傍に、此の藝術の正系の外に於いて、

古いまゝの形式を維持してゐる古い藝術の形骸が、尙ほ遺つてゐるのである。世間で貴族的文藝と稱せられてゐるのは畢竟これを指すのであるが、それはたゞ國民生活の變遷に伴つて藝術の進んでゆく大道の外に、落伍者となつて舊態を保持してゐるに過ぎない。いひかへると、此の時代の藝術に俳諧と連歌と、歌舞伎と能と、浮世繪と土佐繪及び支那畫との二流があつて、一は平民、一は貴族の間に行はれたのでは無く、俳諧と歌舞伎と浮世繪とが貴族をも平民をも齊しく潤してゐる文藝の本流であつて、たゞ其の本流に受け入れられないで所々に停滯してゐるたまり水、又は國民文藝に營養分を吸収せられた殘滓ともいふべき連歌や能や支那畫やが、貴族の保護の下にもとの姿で遺つてゐるといふだけである。かの禪僧の漢文學や宋儒の學が世間へ出、教僧と關係の深かつた國文學が俗人の手に移るやうになると、彼等の世間に於ける文化上の位置が失はれると共に、實社會とは交渉の少い寺院の裡に其の遺風が存してゐるのも是と同様の現象である。

### 第三章 文學の概観 上

#### 武士と文學、文學の舊典型

戰國の世は武士の活動の絶頂に達した時代、武士のはたらく戦争が、あらゆる社會と人心とを支配した時代である。だから此の時代に、時勢粧を描き時代の精神を現はした文學があるとすれば、それは武士の内生活を寫し出したものであり、従つて戦争とそれに關聯して生ずる人生の波瀾と葛藤とを、主題としたものでなくてはならぬ。ところが實際の状態を見ると、さういふものは殆ど存在しないといつてよい。勿論、軍記の類は澤山に作られた。けれどもそれは(前の時代に於いて述べた如く)たゞ戰亂の外面的經過を概括的に叙述したのみのものである。今日でいへば新聞の記事とほゞ同性質のものであつて、時として多少の道德的評語が加へられ、又は決まりきつた感傷的の文字の挿まれることはあるものゝ、概していふと單純な事實の記録に過ぎない。文學として取り扱はるべき資格の無いものであることはいふまでも無からう。其の作の動機は、主として戰亂の事實、もしくは其の間に起つた奇事異聞を傳へようとする點にあるので、所謂武



道の吟味、武邊の砥礪に役立たせようとするのか、又は一種の道德思想から来る教誡の意味か、幾分かそれに加はつてゐればゐるのである。

徳川時代になつてから現はれたものには、時のたつに従つて漸次此の教誡的色彩が濃くなつて來たらしいが、それは一つは、世が平和になつて武人が武を忘れる虞のあるのを見て、漸く薄れてゆかうとする古武士の面影を眼前に復活させ、それによつて新しい時代のもを教育しようとするのと、一つは幾度か生死の巷をかけぬけて來た老武者が、今泰平の時に逢うて、却つてありし昔を偲ぶの情に堪へないために、過ぎ去つた我が身の經歷をも、親しく見もし聞きもした其の頃の先輩や同輩のはたらきをも語り傳へて、變りゆく世の鑑にしようとするのと、又一つは此の時代から儒教的道義の觀念が文字ある社會に段々盛になつて來たためとであらう。老人雜話とか武功雜記とかいふ断片的のもの、現はれたのは、主として第一の理由であり、かの大久保彦左衛門が九代のお主様に對する祖先以來の御忠節を記して、我が子孫に三河武士の精神を傳へようとした三河物語などは、第二の主意から來た最も生彩のある文字である。さうして小瀬甫庵の太閤記や、著者未詳の豊内記(秀頼事記)の如く儒教的觀念が明白に現はれてゐるものは、いふまでもなく、第三の部分に屬する。其の他或は滅び去つた舊主の家の事蹟を後の代に傳へようといふ、

特殊の感慨の籠つてゐるらしい三浦淨心の慶長見聞集の或る部分(北條五代記)や、竹中重門の豊鑑のやうなもの、或は幾分か英雄崇拜の思想が加はつてゐる信長記や川角太閤記の類もあり、又は佛者の手に成つたらしい大内義隆記などのやうに、盛者必衰の倏忽なるために心の動かされたりしい形跡のあるものもある。或は又封建の世として、家々の由來や事蹟やを書き記さうといふ動機から作られたものもあらう。が、何れにしても文學の領分に入りかねるものであることは同様である。三河物語の如きは素朴な寧ろ幼稚な筆致に眞率の氣と熱烈な精神とが力強く現はれてゐて、此の點に於いては殆ど天下一品の武士の著作である。が、要するにそれだけのものである。道德的批評や教訓を目的としたものは、其の目的が達せらるればよいのであるから、武士の思想や情懷を寫すに重きを置かないことはいふまでも無い。

軍記の類が文學で無いことは勿論として、さて何故に武士の生活を寫した文學が現はれなかつたかといふことは、國文學史上の大切な問題である。前にも一寸このことに言及しては置いたが、斷えまなき戦亂の間に起る幾多の悲劇喜劇が絶好の題目、絶好の材料を供給してゐるに拘はらず、それが詩として文學として結晶しなかつたのは、戦國時代だけに特に注目に値する。戦國の世は平家物語や太平記の時代とは違つて、廣い世界の花やかな舞臺に於いて萬人の注目をひく大活劇

が行はれない代りに、一國一家の間に於いて深刻な葛藤が到るところに生じてゐる。家康が築山夫人や清康を自殺させたやうに、家を保ち國を保つ爲には最愛の妻子をも犠牲にしなければならぬ。其の家康の家來には宗教的信仰と主人への情誼との衝突に心を悩ましたものもある。それから戦國時代一般の習慣として人質のやりとりもあり、それから生ずる悲劇も少なくは無い。父を殺した敵の妻妾となつた女もある。かういふことに關して世に傳へられてゐる幾多の物語が、果して事實のまゝであつたかどうかは別問題として、兎も角もさう世に傳へられてゐたとすれば、それは皆なそれ／＼に立派な戯曲の題目である。勿論今日の人のするやうな心理解剖などを、當時の人に求めることの出来ないのは當り前であるが、しかし當時の人もそれを見聞して、武士の苦衷を知り、美人のあはれなる最後に同情し、或は彼等の壯烈な行を讚美したてはあらう。が、さういふ事實なり感慨なりが文學としては毫も現はれなかつた。此の時代になほ新作が試みられてゐたらしい謠曲は勿論、草子物語の類にも、斯ういふ武人の心情や行爲を主題としたものはあまり見あたらぬ。

それのみで無い。腕一本の力で天下を取り、微賤の草履取りから一躍して全日本の主人公となつた古今獨歩の英雄兒秀吉のやうな人物も、又は高麗明を征服し印度呂宋をも降伏させようとし

た其の絶大の事功欲も、或は聚樂や桃山や大阪の宏壯華美な邸宅や城郭も、其の間に於ける彼の豪華な生活も、又た其の慘ましい末路も、當時に於いて何の文學をも生まなかつたではないか。榮華を極めたといはれる昔の藤原氏や平家よりも、幾層か強烈な色彩を放ち、幾層か高調な旋律を奏し、さうして又たそれとは比べものにならぬ程、力の強い規模の大きい變化の激しい、此の英雄の全生涯其のものが、直に一篇の大史詩であるのみで無く、或は秀次の悲劇、或は淀君の艶話、或は此の老英雄の幼い秀頼に對する愛著、挿話としても、或は感傷的情調を誘ひ或は深刻なる心理的葛藤の結ばれてゐる幾多の事件、幾多の戯曲の場面が其れに附隨してゐるに拘はらず、昔の寫實小説たる源氏物語に比すべきものはいふまでも無く、事實を潤色した平家物語や太平記になぞらへられるほどのものすら、それを材料として作られなかつたては無いか。

これには種々の理由がある。概していふと、前々から文學には一定の型が出来、又たそれには現はれてゐる思想も情感も粗大になつてゐて、さういふ文學に目なれて來たものは現在の事實を精細に如實に觀察し描寫することが出来なくなつてゐるのに、落ち付きの無い戦國時代に於いては其の傾向が益々甚しくなつたのであらう。更に少しく考へて見ると、此の時代に入つてからも所謂戦國時代に於いては、文筆に長じてゐるものはやはり僧侶が多かつたらしい。公家は衰へて武人

は戦闘に忙しいといふ世の中に於いては、僧侶に代つて文筆を握るものがまだ出なかつたに違ない。ところが此の僧侶は前篇にも述べて置いたやうに、頭から一種の宗教的僻見を有つてゐて、それに固着してゐるので、如實に又た暖い同情を以て人生を観察することが出来ず、又た彼等の知識に特有な傾向として、文筆の上にも因襲を脱することが出来ないから、武士の心情を十分に理解することもそれを寫すことも出来ない。人間の欲望や愛著や、それから生ずる種々の葛藤や紛争や、心理の苦悶や歡喜や哀愁やは、彼等の思想から見れば全然無價値、無意味である。それは超脱すべきもの、抛下すべきものでこそあれ、事々しく取り立てゝいふべきものでは無いのである。さうしてそれに逢へば(平家物語などから後の文學に於いて常に繰り返へされてゐる如く)たゞ因果應報の觀念や無常の理を以て外面から手軽く、又た廉價な感傷的文字で、評し去るのみである。だから彼等の手によつて眞に武士の内生活を描寫した文學の作られないのは怪しむに足らぬ。其の上に戦亂が長く續いた時代のこととして、僧侶自身の學問も文筆の力も段々衰へて來たに違ないから、彼等にはもはや平家物語や太平記の作者のやうな詞藻を有つてゐたものすら、少なくなつてゐたのであらう。文筆に長じてゐたものは禪僧であるが、それはもとより(幾分か國文學に心がけては來たものゝ)漢文學の方面であつたから仕方が無い。

それならば武士自身はどうかといふに、前にも述べた如く、彼等は段々文筆に親しんでは來たが、しかしそれとても、定まつた様式と用語と材料とで簡單に作られる和歌連歌を翫ぶのか、さもなければ軍記もの等に於いて、自分の見聞した事實を外面的に記し得るだけの能力しか無いので、彼等みづから體驗したところ、或は他人に對して同情し理解し得たところを筆に寫すだけの手腕を有たなかつたであらう。又た斷え間の無い戦亂の世に働かねばならぬ彼等には、其の武士といふ身分の上からも、心靜かに想を練り筆を執る餘暇も無く、さういふ修養も出来なかつたのである。其の上彼等の觀察は、武士生活其のものに對しての外には、一體に粗大であつたから、此の點からも文學的著作をする資格は無かつた。のみならず彼等は彼等の武士的氣質から、情を抑へることを鍛鍊してゐる。實生活の上に於いて抑情を尙ぶ彼等が、文字の上に於いても其の情生活を委曲に描寫しようとし無いのは當然であらう。さうして同じ傾向が彼等の生活をして(少くとも外觀上)甚だ色彩の乏しいものにさせたので、それもまた戦國武士の生活を寫した文學を産み出させる大切の誘因を無くするものであつた(文學的作品の一要素として、或は少くとも其の裝飾として、無くてはならぬ戀愛物語などが、事實譚としても武士の間にはあまり聞えてゐないのてそれが知られよう。松隣夜話に見えてゐる上杉謙信の戀物語や、甫庵太閤記に出てゐる九州の

某武士の妻が高麗在陣の夫に贈つた書簡によつて、其の男の出征を免ぜられたといふ話などは、此の時代に於いては珍らしいものである。

しかし華やかな秀吉の一生、傷ましい豊臣氏の滅亡に至つては、單に其の外面だけを見ても甚だ光彩に富んでゐて、人々の興味をひくには十分である。此の天縦の英雄の心理を内面的に描寫し、此の大人物を中心として其の周圍に起つた幾多の葛藤を戯曲的に解説し、もしくは廣い天下を背景として動いてゐる此の偉人によつて、時代の精神と大勢の推移とを觀察するやうなことは、到底當時の人に望まれないことではあつたらうが、少くとも豊鑑や太閤記よりも、今少し文學的色彩のあるものが出来てもよさうなものであつた。ところがそれすらも作られなかつたのは、前にもいつた通り全體に文學が沈衰してゐたからではあるが、また別に多少の理由がある。外面的にいへば、徳川一統の世になつて幕府に憚つたといふこともあらう。豊國神社が荒廢に委せられた程の時勢である。地下の秀吉を文字の上に復活させるのは、徳川政府の好まなかつたところであらう。書物が筆寫によつて少數人の間のみ傳へられた時には、其の人心に及ぼす影響も少いから、昔は著作も言論も自由であつたが、印刷術が發達して著作が公に弘められる時代になると、爲政者の權力が其の上に加へられ、作者もまた其の壓迫を感じるやうになるのは自然の

傾向であらう。政府の權力の強い徳川時代に於いては尙ほ更である。それからまた外征の役の如きはそれが全く秀吉一人の事功欲から生まれたことであつて、國民はあまりそれに同情してゐなかつたのであるから、かういふ國民の心胸に共鳴しない事業が、詩によつて文學によつて讚美せられなかつたのは當然である。

しかし、それよりも一層内面的な理由は、平和を尊び無事を喜び、又た何事をも偏狭なコセコセした道徳的眼孔で評論し去らうとする儒教的思想が、文筆にたづさはるものゝ間に漸次勢を得て來た此の時代に於いて、戰國的精神の自由な豪放な一面を最もよく表象してゐる此の英雄が、彼等に了解せられなくなつた點にあるのでは無からうか。人生を合理的に解釋し、社會の統制を重んずる儒教思想に於いて、天縦の偉人が認められず、英雄が崇拜せられないのは當然である。甫庵の太閤記が秀吉の思想を如何に誤解もしくは曲解してゐるかを知らぬものは、此の觀察に少くとも一面の眞理のあることを認容するであらう(このことはなほ後にいはう)。勿論一般人は儒者のやうな偏見を有つてゐたのでは無く、秀吉を偉人として尊敬し、また其の豪快な風姿と其の下に世の榮えた昔とを追懷してはゐたであらう。けれどもさういふ思想は文字の上には多く現はれないのでは無からうか。さうして世が固定して人が動きのとれない社會組織に編み込まれ、一般

の傾向としては戦亂に倦んで平和を望み苦闘に厭いて安逸を求めらるやうになつた世人が、寧ろ喜んで此の趨勢に順應しようとする時となつては、其の英雄の面影も漸次薄れてゆくのでは無からうか。

秀吉を寫した文學は世に現はれなかつたが、しかし秀吉自身は文學によつて自己を千載に傳へようとした。一體當時の武士は文學によつて自己を現はす考が無かつた。武士は名を重んずるといふ。しかしそれは自己の行爲に對する道德的批判を恐れることであつて、自己の事業を後世に傳へ、それによつて名譽を得ようといふのでは無い。よしさういふ念が全く無いでは無かつたにせよ、彼等は目前の生活があまりに忙はしくあまりにあはたしいがため、其の外のことを考へる邊が無かつた。彼等は自己の行爲が後世に如何なる影響を及ぼすかをすら顧慮してはゐられなかつた。現在の世に於いても、平安朝人が自己を客觀的にながめて喜んだやうな遊戯的態度を取るには、餘りに彼等の仕事に命がけてあつた。ところが秀吉は違ふ。彼は何事をも思のまゝに成し遂げた。さうして天下の第一人となつた。晩年には証明の企圖が空しく失敗に終らうとしたが、其の前までは彼の志を妨げる何物も無かつた。此の上に彼の望むところは我を世界に現はし萬世に示すことである。彼はみづから証明の計畫の動機を説いて、佳名を三國に顯はし、聲譽を後代

に傳へるためだといつたといふ。これは寧ろ事功を遂げるといふ意味に解すべきものであらうが、兎も角も自己を後に遺すといふ考があつたに違ない。かの大佛の造營の如きも、宗教的信仰からでは無くして、大佛によつて秀吉自身の面影を永く衆人の間に認めさせるためであつたらう。死後神として祀られたのもまた同様で、これも彼みづからの希望から出たことらしい。此の時まではまだ英雄を神として祀つたことが無い（菅原道真を祀つたのは祟を恐れてのことである。人麻呂は和歌の神とせられたが、是は歌其のものが神祕的に考へられたからである）。此の破天荒の企は神道家などの頭から出たことでは無くして、其の眼の古今を曠しうする英雄の思想に違なく、さうして其の本意は、自己を不朽に傳へるためであつたらう（家康の東照宮は其の蹤をふんだものであるが、これは寧ろ政略上の思想が基になつてゐるらしい）。秀吉の考がこゝにあるとすれば、彼が大村由己に命じて自己の事業を謡曲に作させたのも不思議で無い。のみならず彼には天才に伴ふことの多い雅氣がある。と同時にまた自己を客觀的にながめる餘裕と満足とがある。だから彼は自己を詩中の人として眺め、自己みづから自己を主人公とした劇中の其の主人公に扮して楽しんだのみならず、それによつて自己と自己の事業とが、後世まで美しい文字に遺り、華やかな舞臺の上に復活せられることを豫期してゐたであらう。或は私に其の光景を想像して微笑し

てゐたかも知れぬ。此の天縱の英雄が、自己を廣い世界と長い歴史との真中に置いて、みづからも眺め人にも見させようとしたことはこれでも知られる。

秀吉は自分が文學によつて傳へられることを望んだのみならず、また文學の愛好者であつたらしい。勿論其の趣味は淺薄でもあり、其の知識は狹少でもあつたらう。けれども（幽齋は別としても）紹巴は其の文學を以て彼に用ゐられた。さうして彼が能を好み茶の湯を嗜み、あらゆる藝術を愛したことから考へると、彼の文學に對する態度も略々察せられる。彼は此の點に於いて戰國武將の趣味ある一面を代表してゐたのである。ところが、家康と其の後を承けた徳川歴代の將軍とは、全くこれと違ふ。彼等は學問を保護し獎勵したが、それは實用的のものに限られてゐたので、彼等の文道といふのも政治の學であつた。彼に用ゐられたものは、詩人や藝術家では無くして學者や宗教家であつた。彼等は連歌を單なる儀式として取り扱つた。秀忠は歌舞伎を觀ないのを誇としてゐた。彼等は政略と實利との外に何物をも願なかつたので、文藝をば寧ろ武道の邪魔ものと思つてゐた。専制政治の時代に一國の政權を握つてゐるものとして、徳川氏ほど文藝に縁遠かつたものは、古今東西に類があるまい（もつとも是は文藝の中心が國民にあつて、もはや政府者の保護を要しないまでになつて來た故もあるが）。彼等の態度が斯ういふ風であると共に、

彼等みづからもまた文藝に向つて何等の材料をも供給しなかつた。今日の眼光から見れば、彼等の行爲に幾多の詩材、特に戯曲の好材料がある。けれども、華やかな波瀾に富んだ叙事詩的光景や、美しい抒情詩の情趣をばそこに認めることが出來ないでは無いか。それは一つは、彼等が成功者であつて、感傷的情緒を誘ふ何物をも有たず、又た其の經歷に變化の少い故でもあるが、彼等と其の周圍とは如何にも殺風景であつた。要するに彼等は戰國武士の最も無趣味な一面を代表してゐるものである。

話は物語から抒情詩に移つて來たが、一般に考へても武士特有の情感の現はれた抒情詩は殆ど無いといつてもよい。武士も和歌を詠み連歌を好んだ。特に細川幽齋や木下長嘯の如きは或は學者として或は歌人として當時有數のものであつた。しかし前々から述べて來たやうに、歌連歌には特殊の風情、特殊の趣味があるので、作者が何人であるに拘はらず、一樣に其の典型を守るに過ぎなかつた。それが武士をして現實界を離れた一種の空想世界に身を遊ばせる方便にはなつたので、そこに斯ういふ文學の一面の價値はあるに違ないが、しかし、其の歌連歌が彼等の實生活とは縁遠い遊戯的性質を帯びてゐるものであつたことはいふまでも無い。例へば毛利元就の詠草といふものにも、細川幽齋の衆妙集などにも、そこに武士の歌らしい特色は見えない。蒲生氏郷

が「世の中に我は何をかなすの原なすことも無く年や経ぬべき」といつて、武士の事功欲をほめめかしたなどは珍しい例である。もつとも是には武士の抑情主義の影響もあるらしく、感情を有の儘に現はすことを女々しいとする氣風の武士に抒情詩の作られないのは無理は無い。上にも述べた如く、歌連歌其のことを排斥するほどの武士もあつた世の中である。たゞ武士の和歌に於いて一つの注意すべきものは辭世であつて、さすがに死に臨んでの詠であるだけに、普通の遊戯文字とは少しく趣が違ふ。が、それとても殆ど一種の習慣として、又た或る意味に於いては儀式として行はれたのであるから、其の思想には一定の型があつて、「命をも惜まざりけり梓弓末の代までの名を思ふ身は」(別所長治記、友之)のやうに、名のために身をすてるといふ武士的思想を述べたものか、「討つものも討たるゝものもかはらけよ碎けて後は元のつちつれ」(北條九代記、三浦道す。高橋紹運記に或人の道歌として「討つ人も討たるゝ人も諸共にたゞ一時の夢の戯れ」と見えてゐる)。「見よや立つ煙も雲も半天に誘ひし風の音も残らず」(大内義隆記、冷泉隆豊)。又は「五蘊もと空なりければ何ものか借りて來らん借りて返さん」(富樫記)のやうな禪語めいたものか、または「露の身の消え残りても何かせん南無阿彌陀佛にたすかりぞする」(信長記、荒木娘)のやうな極樂往生を期待する風のものか多い。もつとも多數の士卒を助けるために、城を

明け渡して自殺するといふやうな特別の場合には、「今は只恨もあらず諸人の命に代る我が身と思へば」(別所長治記、長治)のやうなのがある。又た女の辭世にはさすがに「消ゆる身は惜しむべきにも無きものを母の思ぞさはりとはなる」。「残し置く其のみどり子の心こそ思ひやられてかなしかりけり」(以上信長記、たし)といふ類のものも無いでは無いが、男の辭世には父母妻子を思ふ情をのべたやうなものすら殆ど見當らない。(辭世といふものは禪僧の間に行はれた臨終の偈とか遺偈とかいふものから轉じて來たのではあるまいか。もしさうとすれば、それに禪語めいたものゝあるのは自然の傾向でもある。臆説を附記して置く。)歌ばかりで無く古文で書いた従軍紀行ともいふべき長嘯の九州道の記、吾妻道の記、幽齋の筑紫紀行などを見ても、彼等が可なり古文辭の取り扱ひ方を知つてゐたことは判るが、武人らしい思想や行動は毫も寫されてゐない。長嘯の「さか衣」に秀吉の功業を讚美してゐるなどは珍しい方である。

俚謡のやうなものに於いてもまた、武士の生活と特殊の交渉のあるものは甚だ少い。此の時代の俚謡は割合に多く今日にも遺つてゐるが、武士に關係のあるものには、「織田の源五は人では無いよ」とか、「徳川様はよい人持ちよ」とかいふ風の事實の評判めいたものが目につくので、それに武士の思想は見えてゐるが、要するに一時的のもの、外面的のものに過ぎず、民謡として

の價値が甚だ低い。「城に笛ふくが麓に聞こゆる、それは推した、うらに來いと、の笛のね、裏道來いと、の笛の音」(日本歌謠類聚上卷所載)などは極めて珍しいもの、一つであらう。これは所謂少人の戀を題材としたものらしいが、一體に殺風景な戰國武士の生活に於いて、叢の裡に咲く菊の花の如く一點の色彩を添へる兒の姿も、あまり多くは俚謠の上にも現はれなかつたらう。

以上は文學と武士との特殊の關係を述べたのであるが、更に一般文學界の状態を観ると、戰國時代となつても大體は前代からの引續きであつて、和歌も連歌も行はれ、物語も作られ謠曲や狂言の新作もあつたらしい。もつとも戰亂の世に文事が抑へられるといふ一面の事實はある。又た幕政が壞頽すると共に、京の文化上の權威も次第に輕くなつてゆくの、それにつれて、何といつても京とは關係の深い文學が衰へて來たことは、争はれないことであつたらう。和歌や連歌のやうな何處でも行はれるものは格別、物語とか謠曲とかいふものは、やはり京人の作であつたらうから、それらの作は自然に少なくなつたに違ない。けれども朝廷と公家とこそはひどく衰へたれ、武人の首長たる將軍は(權力が弱くなり、又た其の地位が斷えず動搖はしてゐるもの)なほ存在してゐて、幕府を中心としての京都是、或る程度に於いての文化を有つてゐたのであるから、

文學もまた全く地に落ちてしまつたのでは無からう。作者も作の時代もわからないのが、物語や謠曲などの作品の例であるから、此の時代の作であることの明證せられるものは殆ど無いといつてよいが、一般の形勢から斯う推測せられる。しかし新作が出たにせよ、一體に文學の沈滞して來た時代であるから、何れの方面に於いても大抵は舊形式舊思想を踏襲するのみであつた。また徳川が天下を取つてからも世態が戰國の引きつゞきであると同様、文學の上にも急激な變化は固より起らない。たゞ世が平和になると共に、戰亂のために抑へられてゐた文學の復活する氣味があるのと、徐々に生ずる世態の變化と共に文學の新傾向が芽ざし初めて來ると、此の二つが其の間に看取せられるのである。

先づ物語草子の類をしらべて見るに、戰國時代の作として明證せられるものは殆ど見當らぬが、前篇に述べたもの、中に其實此の時代の作であるものがあるかも知れぬ。よし新作があつても、内容の上からそれを判定することの出來ないから、時代の特色が無いのである。文學が全體に沈衰して來たといふ趨勢の上から摸倣の行はれるのが自然であるばかりで無く、前にも述べたやうに、此の時代でも文筆にたゞさはるものは概して僧侶が多かつたとすれば、實社會の變遷は割合に彼等の思想に影響を及ぼさず、又た全國の形勢と地方の状態とは大なる變化があり、武士



の生活は様子が違つて來ても、京の有様はさまでに變らないとすれば、幾分か寫實的性質を有つてゐる物語に於いても、それに新しみが見えなひのは深く怪むに足らないことであらう。特に物語の主題は、前代に於いても宗教的信仰や因果應報の道德觀が基礎になつてゐるだけ、大抵は個人的のものであつて、神佛の加護によつて幸福を得るといふ話が多く、其の他には僧徒の間に行はれた兒の物語のやうなものであるから、京の様子が變つても、さういふ文學上の題材にはあまり關係が無いのである。

ところが世が徳川になつた慶長の頃から出た物語には、明にさうと知られるものがあつて、恨之介、薄雪物語、薄雲物語、七人比丘尼、四人比丘尼、二人比丘尼などがそれである。けれども此等の物語は、其の著想も題材も文章も、概して前代のものと同様である。恨之介の、觀音の利生も、身分の卑いものが貴族の姫を戀ふといふのも、すべて舊い型であり、男女の契は久遠劫からの約束であるといひ、死に臨んで一蓮托生を來世に期待するといふのも、或は又た美人といへば小町や楊貴妃を手本にし、宮殿といへば金銀珠玉を鏤ばめたやうに記すのも、凡てが前篇に述べたと同じ佛教的、古典崇拜的思想である。薄雪物語、四人比丘尼もまた恨之介と同様、貴族の女を相手の戀物語で、たゞ其の結末が出家に終つてゐるが、これも前代からの因襲的思想であり、

特に四人比丘尼の作者は男から思をかけられるのも前世の縁だとか、ふみの返しをしないと蛇身を受けるとかいふことを女に説かせ、又は「さゞなみのあはれはかなき世を知れと教へてかへる子は知識なり」と教へたといふ觀音の靈夢によつて、子の死を出離の縁として二人に感謝させてゐ、其の上地獄の有様を幻に見せたり、最後に比丘尼たちに往生の素懷を遂げさせたりしてゐる（此の書は題號が内容にあまりふさはしくないところから考へると七人比丘尼、二人比丘尼などの後に出來たものではあらうが、さういふどく後の作では無からう。また薄雪の、女が死んだのをきいて男が自害をしようとするのを、人にとめられて出家するといふのは、竹齋物語の一挿話に男色のこととして同じ筋がある。此の時代の人に好まれた話らしい。その出家で終るのが古いのである）。薄雲物語は薄雪とは男女を反對の地位に置いて同じ趣向を用ゐたもので、着想からも名稱からも、薄雪の摸倣であることが明である。さうして戀の成就と共に、女の父が大宮人を婿にして榮華に誇るといふのと、それが孝行の報だといふのと、又た全體を加茂の明神の利生で雜いてゐるのが、どこまでも室町式である。七人比丘尼の出家物語が、かの鈴木正三の二人比丘尼と同様、佛教のすゝめを目的として書かれたものであることはいふまでも無い（七人比丘尼の一人には前篇に述べた佐伯と同一題材を反對に取り扱つたものもある）。

大體の着想はこんな風であるが、しかし其の材料としては新時代の事物を採つたところもある。根之介に、三味線を弾かせたり、隆達節を歌はせたり、又た女主人公の姫を關白秀次の家來木村常陸の遺子とし、秀次の侍女どもが刑せられた時の有様を挿話としたりしたこと、四人比丘尼で業平式の優男が敵に逢ふと急に勇士になること、七人比丘尼の一人が公家の女でありながら男の髻をうつたことなどがそれである。さうして根之介の結末に、姫の死を見て、幼い時からそれを育てた軀や媒をした女が自刃したのは、出家に終らない點に於いて舊套を脱したものであつて、此の點に於いては確に戰國時代を經過した後の産物である。が、其の他は局部的に新材料を採つても、全體の結構はすべて前代の物語を摸倣してゐるに過ぎない。

文章に於いてもまた同様で、往々七五調を用ひ、故事古歌をうるさく引用し、何かといふと古今萬葉伊勢源氏を持ち出すところは、全く因襲的である。特に四人比丘尼の四季の庭の叙述などは前代の草子に多い例であり、姫君が嵯峨のわび住むは、いふまでもなく小督物語其のまゝである。又た作中の人物にも歌の贈答をさせたり、七五調の艶書を書かせたりしてゐるが、たゞ薄雪物語が二人の間の書簡の贈答で殆ど全部を成り立たせてゐるのは新趣向である。但し其の書の内容は女の「わが身神の木にて」と靡かぬ理由を述べるに對し、男が切なる戀を訴へるのであつて、

互の押問答に故事古歌を引證するところが、此の物語の興味を中心になつてゐる。此の「足引の山鳥の尾のしだり尾の長々しき御たとへをいつも」繰り返してゐるのが、前代からの因襲的古典趣味であるのみならず、當時に於いては實際あり得べからざる架空のことである。

空想の物語ばかりでは無い。隨筆または實録やうのものに於いても、其の筆致なり文體なりは大抵舊套を脱しないものであつて、それがために事實を寫すべき筈のものが、實際の觀察によつて書かれず、却つて無意味に成語を並べたに過ぎないといふやうなことさへある。慶長見聞集ですら、故事や古歌を多く引用してゐて、眞の見聞よりは、文字の上から來た知識の寧ろ多量に含まれてゐることが目につく。例へば待乳山へいつても角田川を見ても、たゞ昔ばなしや故事來歴の詮索ばかりしてゐる(卷五、七)。さうして中には、歌を詠んだのが優しいとて繩をゆるされた(卷五)といふやうな一種の因襲的觀念をもとにして結構した物語もある(此の集の物語に假托のものゝあることはいふまでもあるまい)。勿論實際の見聞も無いでは無いが、歌舞伎踊などを書いてすら、女といへば必ず楊貴妃李夫人を持ちきつてゐるのでも、大抵作者の筆致が知られよう。徳永種久の筑紫から京に上り江戸に下つた紀行といふものや、吾妻めぐり(色音論)を見ても、全體がほゞ道ゆき風の七五調で成り立つてゐること、又た例へば神田明神から眺めた四方の景色

を入景に見たてたり、愛宕山を叙して「宇田川橋にさしかゝり、ゆんてを見れば愛宕山、岸高ければ峯深く、一片の雲に相同じ」といつたやうに、毫も寫實的用意の見えない點に於いて、全く前代の文學の摸擬であることがわかる。江戸城の叙述なども室町時代の小説其のまゝの筆つきである（種久の此の作は紀行では無く、紀行風に綴つた戯作であらう。後の名所記の淵源でありながら、眞の名所記になつてゐないところに注意しなければならぬ）。

それから實録めいたものゝ例をいふと、甫庵太閤記の伏見城の眺望や聚樂邸の結構を記したところにも、一向實際の有様が現はれてゐない。信長の安土城は乾燥無味な筆つきながら信長記に簡單な記述があるので、それによつて略々大體を想像する事が出来るが、天下の富と力とを以てあらゆる當代工藝の粹を蒐め、第一流の藝術家と工人とをして、其の妙技妙腕を思ふまゝにふるはせた天下の偉觀、文化上の位置からいふと、昔ならば道長の法成寺に比較すべき此等の大建築も、殆ど當時の人の筆に上つてゐない。其の法成寺を「ことの數にもあらず」といつて大阪城の宏壯を讚美した木下長嘯も、「さか衣」に於いて極めて典型的の文字をつらねてゐるのみである。小瀬甫庵の如きは僅々二三行を以て、「瑤閣星をかざ」れる聚樂の邸と、「遠浦の歸帆、漁村の夕照」をながめやる伏見の城とを、記すのみであつた（此の聚樂の記述は聚樂第行幸記から來た

ものらしいが、此の行幸記其のものゝ筆致が、既に成語の配列であつて實狀を寫したもので無い。榮華物語にとられた「玉の臺」の作者のやうなのが此の時代になかつたのである）。

實社會の事物が文學の題材として重んぜられなかつたことは、珍しい南蠻人も、其の黒船も其の宗教も、又は半商半寇掠的の海外渡航者も、其の船の經めぐつて來た異國の風土も人物も、さては支那船、南蠻船、和蘭船の入り亂れ行きちがふ海洋の壯觀も、其の上の生活も、殆ど當時の文學に現はれてゐないので知られる。もつとも禁教の後には南蠻や異教に關する文字の憚かられたことは勿論であるから、多少の著作も亡びてしまつたといふ事情もあらうし、又た商賈や舟のりの徒が、文學とは極めて縁遠いものであつたといふ理由もあらうが、それにしても「昔より今に渡り來る黒舟、縁がつくれれば鱧の餌となる、さんたまりや」（三絃曲、端手組長崎）の俚謠、又は「黒船はえげれす舟のあひ近み。俄に風のかはる洋中」。「枕上の時鷄に夢を覺されて。南蠻人の月を見るさま」（正章千句）の俳諧ぐらゐが、せめてもの其の名残であり、初めて來朝した南蠻人を「人間の形にて、さながら天狗とも、見こし入道とも名のつけられぬもの」といひ、「鼻の高きこと榮螺殼の疣の無さをすいつけたるに似たり、目のおぼきなる事は眼がねを二つ並べたるが如し、まなこのうち黄なり、かうべ小さく足手の爪ながく、せいの高さ七尺餘りありて、色

黒く鼻赤く齒は馬の齒より長く、あたまの毛鼠色にして額の上におかへさかづきを伏せたる程の月代を剃り、物いふ事かつて聞えず、聲は鼻のなくに似たり」(寛永十六年著吉利支丹物語)といふ類が、文字の上に描かれた南蠻人の殆ど唯一の面影であるとするれば、約百年の間國民生活の上に少なからぬ影響を及ぼした海外交通の文學に對する關係は、あまりに輕微では無からうか。當時の文學が貧弱で空疎で、國民の内生活の表現としては甚だ物足らぬものであつたことは、これでも判る(今遺つてゐるものでも南蠻人來朝の圖といふやうな屏風繪もあり、歌舞伎草紙や豊國神社祭禮の圖などにも西洋人は畫かれ、又た神社などに奉納せられた御朱印船の圖などもあつて、繪畫の上には當時の外國交通の有様が寫されてゐるのに、文學の上には一向それが見えないのは、土佐繪の系統を引いてゐる繪畫が寫實的であるのに、文學にはなほ擬古的傾向が勝つてゐたためであらう)。

要するに此の時代の文學的述作は、何の方面に於いても概して舊型に提はれてゐる。其の敘述は文字の上から學ばれたもので、自己の觀察から來たものでは無く、従つて寫實的分子は殆ど無いといつてよい。だから前代の文學の繼續または復活であつて、新しい文學の生まれたのでは無いのである。たゞ其の間に、兎も角も市井の狀態や日常の瑣事を寫し、或る程度まで見聞の儘を

記さうとした慶長見聞集のやうなものがあることは、新時代の文學に向つて一つの出發點を與へたものではある。

讀みものとしての物語のみでなく、謠曲なども同様である。能が依然として翫賞せられてゐると共に、謠曲の作も斷えはしないので、戰國の世でも可なりに新作が舞臺に上つたであらう。秀吉が自己の事蹟を作らせたのでも、當時なほ新曲の作られてゐたことが想像せられる。徳川の世に入つても其の風習はなほ續けられたらしく、かの貞享、元祿、正徳に百番づゝ印行せられたものうちには、此の時代になつてからの作が少なくなからうと思はれる。勿論、貞享の百番中にある戀重荷、元祿のに入つてゐる綾鼓は、世阿彌の昔に既に行はれてゐたことが明に知られてゐるし、箱崎、空也、などの名も申樂談義の中に見えてゐるほどであるから(多少の文字の改作ぐらゐはあつたかも知れぬが)此等の三百番のうち古い作のあることはいふまでもない。しかし、近頃佐々木信綱氏によつて世に出された新謠曲百番の中には、明に徳川の世に入つてからの作があり、中には、寛永以後に出來た明證のある黒池龍神、筑紫箏の蔭組の唄を取つた柏木なども見えるから、それから類推しても、此の時代になつて新作の現はれたことは確であらう(薄雪は薄

雪物語の出た後のものであるから、早くとも寛永ごろであらう。歌舞伎も名古屋山三の傳説が、國に結びつけられてからのものであるから、其のお國の生きてゐた慶長ころの作ではあるまい。けれども徳川時代、特に寛永以後の作は、それが能として演奏するために作られたものか、どうか、頗る疑はしいので、其の大部分は寧ろ好事家の消閑の作ではあるまいかと思はれる。もつとも新社會の組織が十分に整頓せず、すべての點に於いて世態が戰國時代と同様であつた慶長元和ころには、前々から引きつゞいてゐる謡曲の作者もあつたであらうし、彼等と能役者との聯絡も保たれてゐたであらう。しかし寛永時代となつて世が大抵固まると共に、能も武家の式樂とせられ、能役者が概して幕府や諸大名に抱へられ、さうして第二章に述べたやうに、何事をも固定させようとするのが、斯ういふ武家の大方針であつたことを思ふと、此の時代では一般公衆を相手に、絶えず新作を舞臺に上げせてゐた昔とは違つて、演奏の上から新作は要求せられなかつたらう。藝術に對して新しさを求めるのは當り前であるが、新しく起つた歌舞伎や操が恰もそれに應ずるものであつて、それこそ不斷に新作を演じ、さうしてそれによつて不斷に發達していつた。こゝに新時代の民衆の血の通つてゐる生きた藝術がある。此のころの能はもはや新しい作を求めただけの生氣を失つた古代藝術の形骸である。のみならず、長い戰亂の間に武士の服飾や言語な

ども變化し、さうして徳川の世になつて三十年も經つた寛永時代では、それに新しい形がきまつて來てゐるから、さういふ人が能の演奏を見ると、室町時代の人よりも一層現代ばなれのした感じが生ずる。斯ういふ現代ばなれのしたものは、古い色彩、古い形、寧ろ古い作品其のものに特殊の興味があるので、新作は却つてそれを打ちこはす傾があるから、此の點から見ても新作は能として行はれ難かつたであらう。たゞ此等の作に節附けが加へられてゐるのを見ると、全く文字の上の仕事ばかりでは無かつたらしいけれども、謡曲としても世にどれ丈け行はれたか、甚だ覺束なう。

室町時代から行はれてゐた他の演藝を見るに、幸若舞が戰國の世は勿論徳川時代の初までも、多くの武士に愛好せられてゐたことは明であるが、舞曲に新作の多く出た様子は無い。「新曲」といふものは何時の作かわからぬが、もつとも是は、後になると酒宴の席などの餘興として玩ばれたといふことで、能のやうに獨立した劇として特殊の方式を以て、何時までも演ぜられたのは無いらしいから、少し性質は違ふかも知れぬ。それから能のつきものになつてゐた狂言は、戰國の世のものも多く傳つてゐるらしく、枕物狂に鐵砲があるなど、早くとも天文以後の作である證據の見えるものもある。が、徳川時代に入つては慶長頃の作(又は改作)らしい昆布賣(淨瑠璃

に三味線を用ゐることがある)などの例もあるけれど、新作の多く出たのはやはり慶長元和頃までにはあるまいか。狂言は室町時代でこそ平民的寫實的なものであつたが、徳川の世のやゝ固定して來た時分の觀客には、それに對する感じが昔とはよほど變つて來て、新しい寫實劇は別に歌舞伎に屬する狂言として起つてゐる。だから舊い型の狂言に新作は餘り出來なかつたらう。さすれば狂言の新作の出來ないと同様、それと同じ舞臺に上せる能の新作も現はれなかつたのではあるまいか。さうして能として演ぜられないのに、謡曲(寧ろ其の詞章)の新作が出來たのは、それに一種の文學的遊戯として取り扱はれる性質があつたからで、そこに狂言との相違があるのでは無からうか。さうして斯ういふ型にはまつた謡曲の詞章に興味を有つて、それを摸作するものが出たところに、此の時代の文學がまだ前代の因襲を脱しなかつた一例が見える。

さて戰國の世に出來た新曲が何々であるかはまるで判らないが、これも物語と同様、時代の特色の無い程凡てが前代の作の踏襲であつたからに違ない。舊いものゝ改作もあつたであらう。前篇に述べたやうな類似の結構、同一の詞章を用ゐたものゝ中には此の時代の作もあらう。もともと演奏の上に型が定まつてゐて、其の古い型にあてはめての作であるから、新作があつてもそれに新しみの加はらないのは當然である。次に徳川時代のものはどうかと、大部分が此の頃のもの

と思はれる新謡曲百番を見渡したところ、其の題材の多數が前代の文學または世に行はれてゐる傳説から來たものであることは固よりであつて、現代の事實を取つたものはあまり無さうである。古典文學や戰記ものに典據のあるものはいふまでも無いが、信田が幸若舞曲から取られ、花丸が前篇に名を擧げて置いた幻夢物語の一半、足引がやはり其の「あしびき」から來たものであり、又た上に述べた薄雪物語を少し作りかへて薄雪が出來てゐるなどは、近い時代の文學に淵源のある二三の例である。甘樂大夫、瀬良田、戀妻などの纏まつた脚色のある物語も、必ず出所があるに違ない。(此の百番中、戰記文學から材料をとつたものは佐々木氏の序文に列擧してあるが、そこに述べてないもので太平記卷三三から來てゐる思出川がある。)

又た着想の上にも新しい傾向は少しも見えない。現在ものが割合に多く、特に道成寺、實盛、籠などを現在ものに翻案したことは、思想の變化を示すものゝやうにも見えるが、幽霊ものも依然として存在し、さうで無くても佛敎的情調の一般に漂つてゐることが、前代の謡曲と何の違も無いのを見ると、これはたゞ趣向を改めたまでのことであらう。さうしてどこまでも古い作に拘泥してゐるところに作者の態度が覗はれる。たゞ神事に關するものが少いのは、神社に特殊の關係のあつた猿樂の歴史が忘れられ、事實上能の演奏が寺社から遠ざかつた此の時代に於いては當

然のことであつて、こゝに時代の一影響が認められる。それから詞章の點に於いても、全く舊い型を守つてゐるのであるが、正徳の百番などになると、詞藻の花やかさが薄れて、頗る平板なものが多くなつてゐるやうに見うける。文學上の遊戯としても、古文學を涉獵し補綴する努力と興味とが、減じて來たのではあるまいか。

たゞ此の間に於いて、たつた一つ異彩を放つてゐるのは、お國歌舞伎を題材にした「歌舞伎」であつて、巧に其の踊り歌を取つて、うまくそれを維ぎ合はせ、「命あん身もあられうかの」と老若貴賤の心を浮き立たせた「見れども飽かぬお國が姿」を眼前に躍り出させてゐる。單に詞章としても斯ういふ俚謠めいたものを其のまゝに採つたのが極めて珍しい。が、これは果して能として演ずることの出来るものであらうか。能は本來華やかな浮き／＼した舞容を中心として作られたものではあるが、文學としての謡曲はどこまでも古典的情調が基礎になつてゐるのみならず、能としての舞もまた此の時代になつては、それを亂さないほどに形式化せられてゐる。お國歌舞伎は華やかな點に於いてはそれに適するが、斯ういふ古典趣味とは迥に違つた現代的な、又た強烈な表情のある其の躍りと躍り歌とは、少くとも此の時代の能には不調和である。能は武家の式樂となつて、益々形式化せられ愈々さびがつくと共に、其の抑へられたやうな淡い表情と、形式

化せられた技藝とに、別様の興趣が生じて來てゐるからである。だから歌舞伎の興味はやはり歌舞伎其のものにあるので、能にそれを採り入れることはむづかしい。さうして斯ういふ實際舞臺に上せ難いものゝ作られたことも、また此等の作が單に文學的遊戯であつた一證ではあるまいか。

歌舞伎が現はれて談が自然に新しい民間演藝に關係して來たが、其の歌舞伎踊りは且らく別問題として、物語や謡曲が古い時代の摸倣であると同様、此の新演藝に於いても詞章を要するものはやはり前代からの型を離れることが出来なかつた。操の臺本となつた淨瑠璃が即ちそれである。かの十二段草子の淨瑠璃姫物語が、享祿天文の頃既に座頭の語りものに用ゐられてゐた前代の草子(もしくは其の詞章を幾分か改作したもの)であることはいふまでもあるまい。のみならず、慶長頃に此の十二段と同じく操にかけられた「阿彌陀の胸割」なども、よしそれが操のために新作せられたものだとしても、其の構想なり詞章なりは、全く前代の物語の典型に従つたものである。が、もう一步進んで臆測するならば、これもまた前からあつた物語を語りものとして都合のよいやうに改作したのでは無いかとさへ考へられる。それは此の物語が阿彌陀の信仰を勧めるといふ特殊の宗教的意義を有つてゐるもので、操の詞曲としてはふさはしくないやうに感ぜられるのと、

それが前篇に述べたやうな種々の宗教的物語と同種類に屬すべきものであるのと、今一つはこれと同時に語られたといふ鎌田が舞の本のそれであつたらうと思はれるので、凡て此の頃の語りものには、古くからある草子詞曲の類を多少改作して用ゐたものが多いやうに見えるとの故である。さすればかの「牛玉の姫」などについても、やはり同じやうに考へられはしまいか。操がまだ淨瑠璃物語を用ゐない前は勿論、其の後とても能を演じたといふが、此の場合には謠曲が謠はれ、もしくは多少曲節をかへて語られたであらう。操の初期に於いて用ゐられた詞章が古いものであることはこれからも類推せられる。元和乃至寛永の初ころにゐたといふ京の女淨瑠璃語り六字南無右衛門が、十二段も厭いたとて幸若舞曲の八島、高館、曾我などを語つたといふ話もあり、同じころに流行つた江戸の薩摩淨雲もやはり舞の本を演じたらしい。勿論、其の曲節なり演出の法なりは、迥に趣の違つたものであつたらうが、詞章は概して前代の遺物であつたのではあるまいか。もつとも淨瑠璃が流行するにつれて、新曲も漸次作られてゆくやうにはなつたらしく、近ごろ水谷不倒氏が、繪入淨瑠璃史に於いて紹介せられた安口、村松などは、此の部類に屬するものであらうが、それとても趣向は前代の草子の摸倣である。さすれば新しく起つた平民演藝に於いても、其の文學的分子は一體に舊型を脱することが出来なかつたのである。かの女歌舞伎でさへ

も能を演じたことがあるでは無いか。(女歌舞伎の能の失敗した話が慶長見聞集に見えてゐるが、これは能役者で無い歌舞伎役者が能其のものを演じたために、看客の豫期してゐる能としての氣分が現はれなかつたことをいふのである。操で能を演じ、淨瑠璃で舞曲を語つたのは、たゞ其の詞章を取つただけで、初から別種のものとして演出するのであるから、看客は全く別の豫期を以てそれに對する。一つが失敗し一つが長く世に行はれてゐたのは是がためである。)

少しわき路に入るが、便宜上こゝで淨瑠璃と操との由來と發達の有様とを一言して置きたい。此のことについては既に多くの考證も世に現はれてゐるが、文學と關係の深いことであるから、簡単に私案を述べてみるのも必しも無益ではあるまい。さて座頭の語つた淨瑠璃は、ほんの座敷藝で、其の曲節なども平家まがひの低調な陰氣なものであつたらう。前にもいつた山科言繼卿の記によると、京の盆踊の場合にも演ぜられてゐるが、戶外で語るものとしては不相應であつたに違ない(此の時には種々のものまねも演ぜられたが、淨瑠璃はそれとは別のものであり、勿論踊と結合せられたのではあるまい)。ところが此の淨瑠璃は慶長ころになつて、扇拍子の代りに三味線を使ふやうになり、又た例の操に應用せられることになつた。傀儡師は(平安朝末の新猿樂記時代から聯絡のあるものかどうかは判らないが)室町時代には既にあつたもので、



庭訓往來や一体の狂雲集などにその名が見えてゐる。たゞそれは民間の、むしろ兒童の遊戯に供せられたぐらゐで、士人の間に認められる程のものではなかつたらしいが、戦國の末、遊樂の風の大に起り、平民的娛樂が盛に行はれるやうになると共に、それが世に現はれたのであらう。さうしてそれは最初は簡單な物まねを演じたゞけてあり、少し進歩してからは能のまねを（多分狂言のまねをも）したのであつた。能を人形で演ずるのは、本歌をもぢつて狂歌をよみ、伊勢物語をまねて仁勢物語を作るやうなもので、まねをするところ、特に人形が生きた役者のまねをするところに、一種滑稽的の興味が生ずる。が、それだけではおもしろくない。そこで能のやうな型のある、又た科の單調なものでなく、もつと人形を自由にはたらかせる臺本を求めて、淨瑠璃にそれを得たのである。慶長のころの目貫屋長三郎とか京の次郎兵衛とかに始まつたといはれてゐるのがそれである。こゝで淨瑠璃が、盲人の演じた室内的音曲から一轉して普通人の大夫が公衆の前で奏するものになつたのと、人形の動作の方からも影響をうけたので、其の曲節も演出法も少しづつ變化していつたに違ない。さうしてそれと共に他の詞曲も加へられて、淨瑠璃が此の新しい語りもの全體の名稱となつた。

さて淨瑠璃の伴奏樂器として用ゐられた三味線にはそれに特有な音色があるが、時のたつに

従つて其の奏法の發達と共に、此の特色も次第に發揮せられたであらうし、臺本として舞の本が用ゐられるやうになると、其の男性的の武ばつた情趣も添へられ、又た叙事の間に對話の挿まれた此の詞章によつて、語り方が一層發達したてもあらう（舞の本を用ゐたのは單に十二段などに厭いたばかりで無く、其の詞章に對話があり動作が活き／＼と寫されてゐて、人形をはたらかせるに恰好であつたのが主なる理由であらう）。其の上に元和から寛永の初にかけては、京に南無右衛門などの女大夫が現はれ、江戸には杉山丹後椽や薩摩淨雲があり、それによつて幾分かづゝの個人的特色と地方的趣味とが加へられたであらう。此等の事情によつて所謂淨瑠璃節は、其の間に種々の流派の生ずる傾向があると共に、全體として段々發達してゆく。此の勝手次第に新しい分子を加へ、個人的に新しい風體を創めてゆくところに、典型を固守する舊藝術とは違つた、生命ある民間演藝の特色がある。たゞ此の時代のは、十二段とか舞の本とかいふ語りもの乃至叙事的の謠ひものを其のまゝにとつて（もしくは改作して）、たゞその演出法を現代化したに過ぎないものが多かつたらしいから、其の興味は幸若舞を見るのとほゞ同性質、同程度のものであつたらうが、しかし兎に角これによつて新しい叙事的音曲の基礎が据ゑられたのである。操と淨瑠璃とは相依り相俟つて、此の後段々發達し、次第に劇的になつてゆくけ

れども、此の時代にはまだそれが幼稚であつたのみならず、如何に發達しても淨瑠璃は敘事的性質を失はなかつた。戯曲的要素の勝つてゐる能の影響は、淨瑠璃節が謡の曲節をとり、又は式三番を演ずるとか、或は狂言操をすとかいふやうな方面にはあつたが、能其のものを人形で演ずることは、何時のまにか廢れてしまつた。能は舞曲などは違つて、其の演出を現代化することがむづかしく、また人形のはたきには適しないからであらう。(操や淨瑠璃の初期の有様、また其の發達の徑路などについてはなほ疑問が多い。例へば淨瑠璃に三味線の用ゐられたのは、それが操に結合せられた前か後かといふやうなことも其の一つであり、又た淨瑠璃語りの系統傳承などについても種々の問題がある。が、茲では細かい點について一々考證する必要が無いから、これらのことについての卑見は別に述べることにする。)

操と結合した語りものには、淨瑠璃の外に説經があるが、これは多分淨瑠璃を摸ねたものであらう。説經語りといふものが古くからあつて、普通に本地ものと稱せられてゐる草子類が其の語りものであつたらうとか、それが淨瑠璃の淵源だとかいふ説もあるらしいが、説經にさゝらするなど幾分か演藝的分子が加はり、又た多少遊戯的傾向を帯びたものは、前代からあつたに違ないけれども、一定の詞章を具へたものを語つたかどうか疑はしく、また本地ものは讀むための物

語として見るに何の不都合も無いから、所謂説經語りはそれが公然演藝として現はれた徳川時代に始まつたものと見るのが穩當ではあるまいか。さうして(其の歴史的由來は古くからの説經にあるであらうし、又た最初の大夫は或は説經者の系統をうけたものであつたかも知れぬが)演藝としての説經は初から宗教的意味を有つてゐたのでは無からう。たゞ斯ういふ由來があり、又た説經と名のつてゐるだけに、操にかけても三味線を用ゐても、多少感傷的な悲哀な氣分が、其の曲節と荳荳とか三莊大夫とかいふ其の臺本とに、具はつてゐたらしく、そこに淨瑠璃とは違つた特色があつたので、此の二つが並んで行はれたのである。さうして、さういふものを喜んで聴きもし觀もしたのは、七人比丘尼などの物語を讀むのと同じの心持であつたらう。荳荳や三莊大夫の構想や詞章が前代から行はれてゐた物語を摸したものであることはいふまでも無い。或はこれも讀みものとして行はれてゐた物語の改作では無からうかとさへ思はれる。

次に古典文學の系統に屬するものはどうかといふに、戰國の世にも歌連歌は依然として一般に行はれてゐたが、それにも宗祇時代の活氣はもう無くなつた。宵柏の春夢草などには意味の通じかねるやうな歌が随分あるが、それも古語の知識が淺薄になつたためであらう。かの古今傳授な

どが重んぜられたのも、古文學に心を潜めてゐるものが少いために、さういふ人々が尊ばれるのと、一體に古文學の知識が無くなつて來たために、妄誕を觀破することが出來ないとの故であつて、やはり戰亂の結果である。だから前代に於いてやゝ開け初めた自由の態度は却つて抑へられ、其の頃幾分か衰へかけた氣味のあつた二條派系統の思想が再び勢を得て來た（後にいふやうに、外部から古典の權威を壞さうといふものは現はれたが、それと共に内部では益々偏狹に固まらうとするやうになつたのである）。さて歌連歌の宗匠は武人の保護によつて生活する一種の職業であつたが、堂上の家で其の道に長じてゐたものは、さすがに古典文學の本来本元らしく世間から仰がれてもゐ、彼等みづからも此の點に於いて其の地位を維持しようとしてもゐたらしく、逍遙院以後の三條西家が歴代伊勢源氏の解釋に従事して、諸種の抄物を作つたのも此の故であらうか。しかし文祿慶長の頃には、古典文學の權威が武人たる細川幽齋の手に移つた觀がある。彼は單に歌連歌に長じてゐたのみならず、其の道の學者でもあり、また廣く古典にも通じてゐて、それに關する著書もあり、源氏の註釋を大成しようといふ素志さへもあつたといふ（岷江入楚序）。武人の勢力の絶頂に達した時に、古典文學の權威が武人に歸したのは、偶然ながら面白い現象である。が、其の思想には勿論何の新しきも無い。

ところが世が平和になり京都が秩序だち、公家の地位が安固になるに従つて、長い戰亂の間に纒に維がれてゐた公家の古文學研究が、また少しく活氣を生ずるやうになつた様子があり、それと共に、昔の貴族文學に對する親しみが一般に加はつて來たらしい。當時の社會でも公家といへばすぐ古文學が聯想せられたので、恨之介にも、戀人の返書を得ながら謎のやうな歌や詩の意味が判らないので困つてゐる此の主人公が、幽齋の弟子の宗庵といふ男にそれを質問して「か程のことを知らずして、雲の上人を戀ひまゐらせしことの恥かしさよ」といつたとある。雲の上人と詩歌とは離れられないものであつた。これには因襲的觀念もあるが、事實幽齋の企てた源氏の註釋も、中院通勝の岷江入楚によつて遂げられた程で、兎に角多少の古典的知識が公家の間に保存はせられてゐたのである。しかし彼等の古文學の知識は、たゞ在り來りのものを承け繼いだに過ぎないのであつて、舊來の諸説を集成した岷江入楚がよく其の傾向を代表してゐる。従つて其の間から新しい何ものも生まれて來ない。彼等の生活に實社會と交渉するところが少かつたやうに、彼等の文學的知識もまた實生活と交渉の無い死語の配列に過ぎなかつた。だから彼等が此の知識をもとにして歌を作り文を作つても、それはたゞ死語の配列に過ぎなかつた。それにも拘はらず彼等がそれを玩んだのは、古典崇拜の因襲的思想と、屢々述べたやうに現實の生活から離れた別世界に

心を遊ばせようといふ要求と、又た一種の技巧上の興味とから來てゐるので、これは前篇に既に述べて置いた通である。物語草子の類が、構想に於いても又た文章に於いても、概して前代のを摸倣してゐるのも、一つの原因は茲にあるので、人物を大宮人らしくし、歌の贈答をさせ、其の敘述に於いて典型的な七五調を繰り返へしてゐるのは、現代らしくない古典的色彩を強いてつけ加へ、それによつて一種の興味を喚び起さうとする意味もある。四人比丘尼に古歌を其のまゝ取つて物語中の人物の作としてあるなどは、一つは作者に創作の力の無い故もあらうが。一つは斯ういふ思想からも來てゐるらしい。

漢文學に對してもまた同じ觀察をしなければならぬ。徳川時代になつては、實社會に多少の關係の生じて來た儒教の流行に伴つて、今までは禪僧の遊戯であつた漢文學が士人の手に渡つた。惺窩や道春のやうな儒者が漢詩漢文を作つたのみならず、學者で無い石川丈山なども其の仲間に入つた。しかしこれはまた、古語よりも一層實生活とは縁遠い異國の語、而も其の語の生氣のぬけた文字のみを學ぶのであるから、それは全く禪僧によつて取り扱はれたと同様、初から遊戯性を帯びてゐる。少くとも支那文學の知識によつて養はれた特殊の思想を寫す特殊の技術であつて、文學としては、やはり一種の異國趣味と知識上の支那崇拜とから來たものに過ぎない。勿論漢字

を取り扱ふことに熟して來れば、それによつて或る程度まで思想をも感情をも寫すことは出来るが、しかし、それとても興味の大半は、其の漢字を使ひこなす技倆（特に詩に於いては一定の律格にあてはめて漢字を組み立てる手腕）と（丁度歌を詠む場合に、其の詞と形式とに存する一種の古典的情調で自己の情感を包むところに、特殊の趣味のあるやうに）漢文漢詩の用語と文字と形式とに存する支那的氣分の裡に自己を投入するところにある。

## 第四章 文學の概観 下

### 文學の新氣運

前章に述べたやうに、此の時代の文學はまだ概して舊型が其のまゝに維持せられてゐた。けれども時代の思想は文學の上にも何等かの影響を與へないでは置かぬ。大體に於いては舊様の摸倣が各方面に行はれながら、下級のものが起つて上流のものを仆し、新しい勢力が現はれて舊い勢力を打ち破つてゆくといふ戰國的精神は、文學の上にも見えてゐる。其の第一は俚謠が文字に記載せられ、もしくは俚謠を作るものが現はれたことである。俚謠は何時の世にも無いことは無いが、それが知識階級のものに顧られない場合には、文字の上には現はれない。それが文字に寫され、又は其の作者として名のるものが出來たのは、俚謠が知識階級の注意を惹いたからのもので、それだけ平民の勢力が認められ、平民的要素が文學の上に加はつたのである。さうしてそれは、平民を材料とした狂言が武人の間にも盛にもてはやされ、又は第一章に述べたやうに平民の踊が貴族の輩からも、喝采せられたと同じ時勢の現象である。事實、俚謠は狂言に多く採られてゐて

「花子」などには特に數多く見え、又た盆踊とか、此の時代に有名であつた北嵯峨の踊とかいふやうな場合にも歌はれたに違ない。

さて此の俚謠の最初に集められたのは、永正戊寅(十五年)の日附けのある閑吟集である。もつとも閑吟集は俚謠を集めるのが主意では無く、當時の知識階級の間に行はれてゐた種々の短い謠ひものを、何でも書きとめようとしたのであるから、海道下りや放下僧や、或は「花見の御幸と聞えしは保安第五のささらぎ」といふ類の宴曲、謠曲、又は其の他の謠ひもの、或は其の一節を採つたものなどがあり、「春風細軟なり西施の美」とか、「ふたりぬるとも憂かるべし、月斜窓に入曉寺の鐘」とかいふ詩の句らしいものさへある(此の詩の句は主として禪僧の間から出たものらしい。詩を直譯して朗吟することは、昔貴族の間に行はれた朗詠に先蹤はあるが、此の時代のはそれから系統をひいてゐるとは思はれぬ。平生漢詩を玩ぶものに斯ういふ遊戯の生ずるのは自然であつて、放縦な禪僧の娛樂としては適當なものである。徳川時代の漢學書生の間に詩吟の行はれたことが思ひ合はされる)。閑吟集編纂の主旨が茲にあるから、其のうちに取られた俚謠もまたさういふ知識社會に用ゐられてゐたものに限つて掲載してあるらしい。それから文祿頃の人だといふ堺の隆達の名を負うてゐる隆達節の唱歌集(日本歌謠類聚上巻所收)があり、それによ

つて戦國末の(少くも畿内地方に於ける)俚謡を知ることが出来る。(隆達節の集中には閑吟集に出ているものがあり、「豊後や薩摩の殿たちに」といふやうな、遊女の間に行はれてゐたらしいものもあり、又た小説の恨之介には隆達節で「君が代は千代に八千代に」の歌を歌つたとある。所謂隆達節の詞章には此の人の作も尠なくないであらうが、前々から謡はれてゐたものも含まれてゐることはこれで判る。隆達は寧ろ作曲家であつたらしい。しかし、所謂隆達節のすべてが彼の作曲になつたものかどうか。一定の樂器の伴奏でも無ければ、古くから行はれてゐる俚謡を改作して世に行はせることはむづかしからうが、隆達節にさういふ樂器が用ゐられたかどうか。恨之介を見ても三味線などはなかつたらしいから、此の點に疑問がある。) 又たかのお國歌舞伎に用ゐられたもの、三絃曲の本手組破手組などに採られたものも、此の時代から行はれてゐた俚謡が多からう。

但し閑吟集の俚謡はそれを悉く純粹の民謡としては取り扱ひ難い(こゝに民謡といはずして故らに俚謡といつたのは之がためである)。それは民間にこそ行はれてゐても、其の内容に古典的要素の多いものがあるからである。例へば「葛城山に咲く花候よ、あれをよと、よそに思ふた念ばかり」といふやうな、有名な古歌を改作したものがあり、又た必しも古歌を其のまゝに取らな

らでも「花故に顯はれたよなう、あらうの花や卯の花や」といふやうに、貴族文學の因襲的思想乃至修辭法によつたものが見える。此等は多分京都あたりに行はれた俚謡であつて、其の作者も古文學の知識を有つてゐたものらしい。山科言繼卿の記に、此の人が踊の歌を作つたことが見えるが、同じやうなことは前から行はれたであらう。(閑吟集の編者は富士の眺められる田舎にすんでゐた世すて人だといふが、それは老後の話で、こんな謡ひものを玩んだのは若いをりに都にゐてのことであつたらう。だから茲に集めてある俚謡は都に行はれてゐたものと思はれる。) 隆達節の集中にも「待つは慰むものなるに鳥はものかはと誰かいひけん」。「杜子美山谷李太白にも酒を飲むなと詩の候ふか」といふ類があるのみならず、全體に詞章の上に俚語が少く、却つて古典的要素が多いやうに見えるのは、やはり(隆達であるかどうかは判らないが)知識階級の人の作がそれに多いからであらう(俚謡を作るにも古典の知識を借りるのは、俳諧に古歌をもぢるのと似てゐる)。

さて純粹の民謡は、概していふとあまり時代的色彩を帯びてゐないのが常であつて、特に其の題材などは何時の世にも大抵同じやうなものであり、また流行り廢りは勿論あるものと、随分長い間いひ傳へられ謡ひ傳へられるものである。けれども知識階級の作者の手に成つたもの、又は、

都會に行はれ、都人士の遊戯に供せられたものは、流行り廢りが割合に激しく、従つて時代的特色も農民の間に行はれるものよりは濃厚である。だからこゝで此等の俚謠に一瞥を興へて置くのも無用ではあるまい。(茲ては閑吟集中の俚謠らしいものと隆達節とを一所にして考へる。隆達節として傳へられてゐるものでも、其の詞章が彼の作で無いものは閑吟集中のものと同じに取り扱はるべき筈であり、又た彼の作でも其の目的が俚謠として世に行はせるにあるからである。實際どれだけが彼の作であるか全くわからぬ。)

先づ題材から見ると、其の殆ど全部は戀であつて、自然界についても「うしろ影を見んとすれば、霧が、なう朝霧が」といふやうに、大抵は戀の道具に利用せられてゐる(「木幡山路にゆき暮れて月を伏見の草枕」とかいふやうなものにはあるが、これは其の詞藻の上に古典的要素が多いことから考へると、知識階級の作者の作であらう。或は謠曲などから取つたものかも知れぬ)。さうして其の戀には「獨ねになき候ふよ千鳥も」とか、「いつも曉なく鹿は逢はでなくねか逢うて別を鳴くねか」といふやうな、萬葉の昔を聯想させるものさへある。次に其の表現法は、前に引いた「うしろ影」や、「それを誰が問へばなう、よしなの間はず語りや」。「あまり言葉のかけたさに、あれ見さいなう、空ゆく雲の早さよ」。「たゞ置いて霜にうたせよ、科はの、夜ふけて

來たが憎いほどに」。「鐘もなる夜もふける、あぢさなの我が身や獨ねをする」。「夜ふけておりやるを今思ひ合せた、いとほしの君や身がまゝならぬ」。などの直截な單純なものがあつて、それがおもしろくもあり、又た民謠としてふさはしくもある。多分斯ういふものが眞の民謠であつたらう。

次に修辭上の工夫では「ふりよき君の情の無いは、ひえゆく月にかゝる村雲」。「梅は匂ひよ木立はいらぬ、人は心よ姿はいらぬ」のやうな譬喩が最も目に立ち、中には「身は破れ笠よなう、きもせてかけておかるゝ」(或は「身は破れ笠、きもせてすげなの君やかけて置く」)。「人はよいもの兎に角に破れ車よわがわるい」のやうに、一語を兩義に用ゐて其の譬喩を説明したものが尠くない。是も昔から邦人に好まれてゐるもので、譬喩は記紀時代の歌から既に見え、一語を兩義に用ゐる言語上の遊戯は徳川時代以後の俚謠にも甚だ多い。けれども和歌に多く用ゐられてゐる「いひかけ」などは「君は月思ひ明石のうらみねば須磨の浦浪須磨の海」などの、古典的臭味を帯びたものゝ外にはあまり見うけず、縁語といふやうなものもない。これは斯ういふ修辭法が、筆に書くものに於いては因襲的になつてゐるけれども、耳にきくものとしては興味が無いからである、本來貴族文學たる和歌に於いて發達した人工的のものであるから、俚謠としてはふさは

しくない故でもあらう。和歌に於いて斯ういふ修辭法の盛に用ゐられた平安朝に於いても、神樂歌や催馬樂中の民謡から取つたらしいものには、それがあまり見えなかつたことが思ひ合はされる。だから純粹の民謡は固より、俚謡として作る場合には、古典的知識を有つてゐる作者もそれを避けたのはあるまいか。それから閑吟集には入つてゐず隆達節にもないが、狂言の中に見えるものでは「十七八は竿に乾いた細布、とりよりやいとし、たぐりよりやいとし……」(棒しぼり)とか、「太刀佩いたも憎いか、小太刀佩いたも憎いか、弓かけたも憎いか……」(節分)とかいふ疊語法があつて、これは前の巻に述べて置いたやうに、上代の民謡にも行はれたものであり、中古でも神樂や催馬樂に採られた民謡(閑野、磯等、早歌、老鼠)にも見えてゐる。此の時代の俚謡にもかういふ古今を一貫した國民的趣味は現はれてゐる。但し閑吟集や隆達節唱歌集には都會的趣味と古典的知識とのために、こんな風のもの餘り採られず、また作られなかつたらしい。

ところが、此の古典的知識の俚謡に及ぼした影響は他の方面にもある。それは詩形の上の問題であるが、本來民謡は上代から形式の定まつてゐないのが普通であつた。此の時代でも眞の民謡らしく此の點で興味を饒なものは、矢張り同様であつて、上に引いた四五の例、又は「とがも無い尺八を、枕にかゝりと投げあてゝも、さびしや獨寝」。「帯をやりたれば、しならしの帯とて非

難をさしやる、帯がしならしならば」云々といふものなどのやうに、閑吟集や隆達節の中にも其の例は多く、また狂言や國歌舞伎や或は三絃曲の本手組などに採られてあるものを見てもそれは判る。ところが、閑吟集中にも既に「磯すましさなさに見る／＼戀となるものを」。「君來ずばこむらさき、我がもとゆひに霜は置くとも」。「よしやつらかれなか／＼に、人の情は身の仇よ(なう)」。「思ひ染めずば紫の、濃くも薄くも物は思はじ」。「庭の夏草茂れば茂れ、道あればとて訪ふ人もなし」のやうに、五五七五、五五七七、七五七五、七五七七、又は七七七七といふ形を取り一句の音數が七か五かに定まつてゐるものがあつて、隆達節には同じ類が多いのみならず、「夢になりとも情はよいが、人のつらさを聞くもいや」。「ねてもさめても忘れぬ君を、焦れ死なぬは異なものぢや」などの七七七五といふ後世の都々一調がある。一曲の句數を定め、また七音か五音かに一句の音數を定めようとする形跡が見えるのである。全體に形式の定まらないものが(此の時代の後までも)立派に行はれてゐるのに、一方に斯ういふものが生じたのを見ると、これは俚謡としての自然の要求から出たのでは無く、作者の古典的知識から來たことが推察せられる。其上茲に擧げた例でも知られるやうに、かういふ形式の定まつたものは詞藻の上に於いても古典的要素が多いのと、「縁さへあらば又もめぐり逢はうが、命に定め無い程に」。「月夜鳥はほれ



てなく、我も鳥か、そなたにほれてなく。「逢ふは稀よひとりねは繁し、あの君故にあらぬ名の立つ」。「獨ちよらばまゐらうずものを、とすに雨ふり眞の闇なり」となどのやうに、一字か二字の添削を加へると何の雑作もなく何れかの型にはめることが出来るものを、然うしないで置いてあるのを見ると、益々此の臆測の誤らないことが知られよう。なほ閑吟集には「めぐる外山に啼く鹿は、逢うた別かあはぬ恨か」と七五七七の形であるものが、隆達節ではそれが崩れて前に引いた「いつも曉」のやうに七五七七四となつてゐるのを見ても、實際歌ふ上には斯ういふ七音五音の定型がさして必要のないものであることが判る。つまり古典的知識を有つてゐる作者が、何となく七音とか五音とかに耳なれてゐて、詞章を綴る時に(節づけをして歌ふ場合でなく)知らず識らず此の型にあてはめるやうになつたので、それは丁度七五調散文の作られたと同様であらう。或は宴曲や謡曲のやうな謡ひものに斯ういふ七五調などのあるところから自然に馴致せられたのかも知れぬ。「生まるゝも育ちも知らぬ人の子をいとほしいは何の因果ぞ(の)」「といふやうなもの、又は三絃曲の「我が戀は千本小松の枯るゝほど鯛が水ひてほこり立つほど」(本手鳥組)。「山がらが籠の内での恨みごと籠が小籠でもんどり打たれぬ」(裏組錦木)のやうな俗語調和歌ともいふべきものが出来たのも、其の由來は同じであらう(これに就いては前巻第一篇第二章

に述べたところを参照せられたい)。だから純粹の民謡らしいものにはこんな形式が無い。

斯う考へて來ると、此等の俚謡には古典的分子が多いため、民謡としての價値が割合に乏しいやうであるが、しかし平安朝末の今様、鎌倉時代、室町時代にかけて一般に士人の間に賞翫せられてゐた謡ひもの、即ち宴曲や白拍子、曲舞の詞章などは、何れも概して叙事的、説明的のもの、又は無意味に故事などを列べたに過ぎないものであつたのに、此の頃から、斯ういふ抒情的のものが行はれるやうになつたといふことは大なる變化である。閑吟集にはなほ海道下りや放下の謡や文字づくしのやうなものがあるが、それと同時に直截に戀を歌つた俚謡が數多く取られてゐる。隆達節に至つては、よし其れに古典的分子が含まれてゐるにせよ、一として抒情詩で無いものは無く、詩形もまた緊張した刹那の感情を歌ふにふさはしい短いものゝみであつて、中には眞率な素朴な、さうして此の時代の人の特殊の氣分をよく現はれてゐるものが尠くない。勿論、民謡としては何時の世にも斯ういふ種類のもものがあつたに違なく、狂言などには既にそれが取られてゐる。「花子」の「雨のふる夜に」、「此處は山かげ」、「秀句大名」の「雨のふるに」などは甚だ面白いものであるが、普通に士人の間に賞翫せられたものは、やはり舊くからの宴曲やうのものであつたことは、八十一番職人歌合などにも曲舞、白拍子、早歌うたひ、琵琶法師等が擧げられ、

應仁略記に宴曲(早歌)のことが出てゐるのでも知られる。それが此の時代になつて漸次變つて來たのである。語数の多いやゝ叙事的傾向を帯びてゐるものでも「暇乞には來たれども、碁盤おもてゝ目がしげしげれば、まづお待ちあれ、柴の編み戸も押せば鳴る、あはれ謡がはらほろと降れかな、其のまに、あゝ笑止や立つ名や、笑止と立つ名や、忍びの踊はあもしろや」(三絃曲、本手忍組)といふやうな清新なものがある。貴族文學として行はれた昔からの長歌で、こんな面白いものは滅多に無い。舊來の謡ひ物によつて抑へられてゐた純眞の感情が、茲に至つて其の桎梏を脱するやうになつたのである。これは文化の大勢の上からいふと平民的の俚謡が重んぜられて來たことを示すものであるが、思想の上からいふと、やはり自由に自己を表現しようといふ精神の茲に現はれたものであらう。舊くからの型のある舞とは違ふ自由な原始的な平民的な踊りの流行したのも同じ時勢の趨向であり、また實際それは俚謡の發達に大なる關係がある。さうして此の俚謡は、後の文學の上にこそさしたる直接の影響を與へないが、歌舞伎の主なる要素となり又た三味線と結合して、新しい演藝、新しい音楽を作るやうになるので、劇史と音楽史の上には一大變動を與へたものである(三味線の用ゐられない時分でも俚謡の旋律は舊來の謡ひものとは違つてゐたであらう)。鼓を主なる樂器とした白拍子曲舞の叙事的樂曲から、抒情的の三絃曲に移つ

てゆくのが、恰も之と相伴つてゐる(三絃曲は別に叙事的のものも出來たが、こゝでは此の一面についていふのである)。但し同じく平民的のものでも、次に述べようと思ふ俳諧が客觀的に事物を取り扱つて滑稽を主としてゐるに反し、俚謡は抒情詩であるだけに、飽くまでも眞面目であると共に往々感傷的の氣分が伴ふ(同じく古歌古典を用ゐても、俳諧ではそれを茶化してゐるが、俚謡ではまじめに取つてゐる)。これは、戀を主題としたものが多いからではあるが、また古文學の因襲を脱しきれない都人士によつて作られ、主として都人士の間に玩ばれたものだからであらう。

さて此の小唄は徳川時代になつて三味線に上るやうになつた。三味線が物ずきに弄ばれたことは、天正ごろから既にあつたといふが、それによつて一定の曲が作られたのは、やはり慶長頃であつたらしい。それは即ち小唄の伴奏として此の新樂器を用ゐるのであるが、琵琶になれた盲法師の作であるために、其の出來上つた三絃曲には俚謡固有の放奔な情趣が損はれて、力の弱い多少陰氣なものになり、同じ小唄でもお國歌舞伎で歌はれたのとは、其の効果が餘程違つてゐたに違ない。しかし兎も角も此の新音樂は、小唄特有の抒情的性質をば失はなかつたらう。が、本手組や破手組の所謂組ものが定められ、聯絡も關係も無い數首の小唄が一つの組に結びつけられ、

或は(腰組の第六、忍組の第五、早船の第二、八幡の第一などの如く)別々の歌が一首として維がれるやうになつたのは、其の抒情的性質が輕んぜられて來た證據であつて、即て後の長歌(例へば松の葉第二卷に見えるもの)などを喚び起す機縁になる。長歌は用語と、音樂としての曲節と、それに現はれてゐる氣分とこそ違へ、詞章として見れば、其の古典的要素を含んでゐる點に於いても、敘述的、説明的で、一貫した思想も力強い情熱もない點に於いても、殆ど昔の宴曲や種々の謠ひものと同じ性質のものであつて、折角抒情詩を基礎として發達した新音樂が茲で逆轉するやうになつたのである。さうしてそれと同時に、獨立した小唄、即ち單純な短い抒情詩として行はれるものに於いても、其の詩形が後の所謂都々一調に固まらうとする傾向を示して來た。

此の俚謠の形式については一言して置く必要がある。種々の踊り歌や地方唄が採られてゐる三絃曲の組みものに於いては、七七七五の形式のものも少しは交つてゐるが、概して詩形は定まつてゐない。「吉原小唄總まくり」に出てゐる小唄には、斯ういふ地方唄などは少く、又た一句の音数が七か五かに定まつてゐるものが多くなつてゐるが、それでも其の句數や七音の句と五音の句との配置はさまざまである。ところが異本洞房語園に出てゐる弄齋節といふやうなものは全然此の都々一調である(閑吟集中の歌を此の形式にあてはめて改作したものも見える)。さうして

此の形式が上に述べた如く、古文學の知識から出て來たものだとすれば、これはかの長歌の作られるやうになつたことと共に、民間から起つた自由な抒情的な俚謠が、規則化せられ、知識化せられてゆくことを示すものであつて、(後にいふやうに)宗鑑に始まつた放縱な俳諧が、貞徳によつて規則立てられ上品らしくせられたと、同様の現象ではあるまいか。(都々一の語の組み立ては、三四、四三、三四、五であるが、これは七七七五といふ詩形に伴ふ要約でも、樂として歌ふ上から來た要求でもなからう。現に今様の七五調には、三四、五で成り立つてゐるものが昔から多くあり、閑吟集中の俚謠にも七七の形が、三四、四三で構造せられてゐるものが尠なくない。と同時に、同じ詩形または類似のもので、例へば初句の七音の句が四三であるやうに、變つた組み立てになつてゐるものが後までもある。また小唄を三味線にのせることが行はれてからも、随分久しい間種々の他の詩形が用ゐられてゐたと共に、一節切にあはせたものが此の組み立てに類似してゐるものもあるから、これは三味線と特殊の關係があるとも思はれぬ。後には純粹の民謠にも此の構造が一般に行はれるやうになつたので、それには詩形と共に曲節も一定せられる便利があつたからであらうが、さりとて、それにはまらない殆ど無形式のものも甚だ多い。要するに俚謠の形式の一定せられるやうになるのは、文化の普及と共に古典的知識の影響が民間と地方

とに及んでゆくことを示すものであらう。

筑紫箏の組みものは三絃曲のを摸倣して作られたに違ない。たゞ樂器其のものが雅樂の箏から來たものであるだけに、それを高雅めかさうとして詞章にも古語を用いたのである。従つてそれは無意味な古語の配列になつてしまひ、文學として何等の價值もなく、また初から抒情的のものでは無い。が、民間樂たる此の樂曲が斯ういふものに變化して來たのは、やはり野趣を厭ふやうになつて來た徳川時代の一面の思想が現はれたものであらう。(筑紫箏の歌曲がもとに俚謠を取つたものであることは、糸竹初心集などによつても知られる。雲井弄齋の如きも明に俚謠である。古めかしい詞章を作つてあてはめたのは後のことに違ない。)

ところが此の小唄を別の方面に用ゐて、其の自由な放蕩な情趣を十分に發揮させたものがある。それは即ち歌舞伎である。歌舞伎は慶長八年ごろからお國の始めたものだといふが、それは一人か二人か三人かの女が當時の俚謠であつた小唄を歌ひながら踊るのであつて、能の囃子めいた伴奏がついてゐるが、踊の前後には一寸した科白もあつたらしい(歌舞伎草紙)。小唄が主として戀の歌であるから、其の科白、即ち物まねの分子もそれにふさはしいもので、お國が男装をして茶屋の

女に戯れるやうなことを演じたといふのも、それを放蕩な當時の風俗に投ずるやうにしたのであらう。お國歌舞伎には、斯ういふ踊と物まねとの二要素があるが、其の名を踊といふところから考へると、物まねの方は後になつて附け加へたもので、またそれが附け加へられた後も、本體はやはり踊であつたに違ない。さて此の踊の由來は何かといふに、それが小唄を歌ふこと、舞といはずに踊といひ、地謠なしに踊り子自身が歌ふことを見ると、前代から演藝として行はれた白拍子や曲舞や其の他の舞から系統を引いたものでは無く、民間の踊から來たものであることが想像せられる。第一章に述べたやうに、戰國時代から京都附近には盆踊がひどく盛になつたが、それにつれて種々の地方的の踊も其の踊り歌も、もてはやされたであらうから、お國はそれを一層官能的な花やかなものとして演じ、それによつて喝采を博したらしい。勿論其の小唄にも踊にも新作があつたらうが、其の趣味は從來行はれてゐたものと同じであつたに違ない。笛や鼓の囃子はたゞ踊を調子づけるために、當時の演藝に付きものであつた樂器を應用したのみである。或は前から民間の踊に於いても、用ゐられてゐたかも知れぬ。ところで此の踊と小唄とは本來抒情的のものであるから、俚謠が今様以來の敘事的な謠ひものと全く異つた新要素を歌曲の上に加へたと同じく、またそれにつれて、舞踊の上に新しい天地を開いたものであつて、長い間舞容の形式美

のみに目を奪はれてゐた公衆が、茲に至つて始めて、血がめぐり脈が躍る活きた踊を演藝として観ることを得たのである。其の上に、それが女の艶かな肉聲、嬌かな姿態となつて現はれ、又た（同じものでも能とは違つて）浮き立つやうな鼓の音が添へられるので、猶更に官能的、刺戟的の度を加へ、後には又たそれと共に例の挑發的な物まねを演じたので、遊樂の氣の漲つてゐる當時の都人士は益々それを歡び「夢の浮世にたゞ狂へ」と熱狂してそれに趨つたのである。（猿若の物まねが古國時代からあつたものならば、此の低級な滑稽は却つて觀客の氣分を一層浮き立たせたのであらう。）要するに古國歌舞伎は放縱な戰國的氣風の間から生まれたものである。

古國と其の歌舞伎とに就いては種々の傳説があるが、多くは信じ難いもので、例の名古屋山三の話なども其の類である。また歌舞伎事始の記載の如きは、一見してすぐに妄誕であることが判る。これは歌舞伎の起原を勿體らしくしようとするため、捏造説が多いからである。なほ古國歌舞伎と民間の踊及び俚謡との關係は、歌舞伎草紙の小唄に忍び踊の名があつて、それが三絃曲の本手忍組に採られた俚謡と同じであることなどを見ても判る。此の草紙には又た因幡踊の名も見えるが、これも狂言の靉猿、三絃曲の本手飛驒組に出てゐる飛驒踊と同じやうに、やはり民間のものであらう（後にも柴垣とか岡崎とか踊の歌曲がもてはやされた例がある。そ

れらは歌ばかりになつたのであるが、此の時の踊其のものを學んだらしい。大日本史料に引いてある次嶺經や、東海道名所記などに、古國の演じたと傳へられてゐるやゝ子踊は、どんなものか判らないが、それと共に躍つたといふ大原木は其の唄が明に俚謡であることを考へると、やはり俗間の踊をまねたものらしい。林道春の徒然草野槌などによると、僧衣を着て念佛踊をしたこともあるらしいが、これも宗教的の意味のあるものでは無く、娛樂として民間に行はれてゐた念佛踊をまねて、其の他の踊と同様に演じたものであらう。念佛踊の遠い起源を考へれば、念佛鼓吹の方便として始められたものではあらうが、後には全くの娛樂になつてしまつたので、一乗寺の念佛踊のことを記した山科言繼卿記の一節を見ても當時の有様がわかる。かの有名な北嵯峨の踊なども、或は嵯峨の大念佛と關係があるものでは無からうか。何れにしても、念佛踊が民間の踊の一種であつたことは疑があるまい。但し此の歌舞伎にも、古い演藝から傳はつた分子が添加せられてゐないでは無い。東海道名所記には「絲より」を演じたとあるが、それが果して延年舞の同じ名のもと關係があるかどうかは覺束なく思はれる。けれども猿若がもし古國時代からあつたものならば、それは能の狂言から來たものであるのみならず、物まね其のことが狂言から脱化したものに違ない。けれどもそれは本文にも述べた如

く、つけたりのものである。なほ附言して置くが、「かぶさ」の名義についても「かぶさるもの」とか、「かぶきたる風」とかいふ例と同じ意義だといふ説があるが、此の意味での「かぶさ」は形容詞又は副詞には使はれたが、名詞として用ゐた例は無いやうであるし、踊の形容詞として此の詞をつけるのも變であるから、これはやはり歌舞伎の文字のまゝにとつた方が穩當であらう。

お國歌舞伎が何時まで行はれたか確には判らぬが、慶長の末にはそれを學んだらしい遊女の歌舞伎が現はれ、寛永の初まで續いた。慶長見聞集によると、それには多人數の踊があつたらしいが、これは盆踊などから系統をひいたものらしく、三味線が樂器に加はつて、小唄の抒情詩的効果が強められたことと共に、お國によつて創められた新演藝の精神を一層發揮したものである。それから(新猿樂記の昔を想起させるやうな)猿若の物まねもやゝ發達して、幾分か踊と離れて獨立する傾向があつたらしい(女歌舞伎で能を演じたなどはほんの餘興に過ぎなかつたらう)。此の女歌舞伎にやゝ後れて現はれたのが、元和寛永を通じて行はれた若衆歌舞伎であるが、これは遊女の歌舞伎に對して(男色の意味のある)若衆が向ふを張つたものらしい。其の演藝も女歌舞伎と大差がなく、やはり小唄を歌つて踊つたのであるが、多人數の踊も(少くとも上方に於いては)あ

つたらうと思はれる(これは明證は無いが、後の歌舞伎時代になつて一座の大踊とか脇踊とかいふことのあるのは、此の時代から傳承せられたものでは無からうか)。但し茲に注意すべきことは、物まね即ち狂言の方が、これから段々進歩もし勢力をも得て、新發知大鼓といふ類のものが、演ぜられるやうになることである。これは主として、能の狂言を現代化することによつて現はれて來たのであるが、其の狂言の結末が囃や小舞になつてゐるものもあるところから、かういふ新狂言にも踊が結合せられたらしい。ところが其の踊は、狂言其のものが能のを學んだところから來る自然の趨向と、又た從來の踊があまり單純であつたので、それに新工夫を加へる必要があることゝから、古い舞の分子を加味することになつた。そこで一種の技巧を具へた新しい踊が出來、従つて音曲も、抒情的な小唄とは趣の違ふ叙事的分子の加はつたものになり、特に江戸では所謂江戸長唄が發生し、又たそれによつて所作事の端緒が開かれるやうになる。かうなると、踊り手はもはや自分で歌はないやうになつて、地謡がそれに代つて現はれる。さうして小唄とそれにつれての踊とは漸次舞臺から消えてゆき、踊のみは所謂大踊などに纔に面影をとゞめる位になつてしまふ。こゝでお國に始まつて遊女の歌舞伎に傳はつた歌舞伎の精神は一轉し、全體からいふと抒情的性質は漸次失はれてゆくやうになつたのである。此の傾向は上に小唄について述べたとこ

ろと同様である。

斯ういふ事情で、抒情的の小唄とそれに伴ふ踊とから起り、當時の遊樂の風に乗じて行はれ、又た大に其れをそゝつた歌舞伎は、却つて其の附屬物であつた滑稽的の物まねから發達した新しい狂言に勢を奪はれたのである。が、若衆其のものが既に遊樂の一對象であるのみならず、後には所謂傾城買又は島原狂言となつて新しく發達してゆく寫實的の演劇其のものゝ内容に此の遊樂の風は現はれるやうになる。又た踊と滑稽との分子も決して無くなつたのでは無く、踊は上に述べた如く性質を變へて存在し、滑稽も劇中に組み込まれるのである。同じく劇として發達するにしても、小唄と狂言の對話とが(能に前蹤のあるやうに)曲と白とになつて結びつき、まとまつた歌劇風のを組織することができさうなものであつたのに、さうならなかつたのは、一つは昔の世阿彌のやうな天才が出なかつた故もあらうが、一つは時勢の故もあらう。昔の猿樂の發達の有様に比べて見るに、猿樂はもと寫實的の物まねが主であつて、歌舞は物まねの一種として纔に存在してゐたのであるが、後には其の方の分子が多くなり、さうして其の歌が古典的となり、其の題材が歴史的のものとなつた。然るに歌舞伎はむしろ反對の方向をとつて、本來の唄と踊とは段々勢を失ひ、寫實劇の分子が加はつてゆくのである。猿樂は社會の下層から生まれてそれが地

平線上に出ると共に、當時の社會に漲つてゐた古典崇拜の空氣に包まれ、在來の種々の演藝に結びついたのであるが、歌舞伎は古いものが古いとして尊崇せられながら、それが現實の生活から離れたものとして特別に取り扱はれ、又は儀式的に用ゐられるやうになつた時勢だけに、現實生活を其のまゝに現はす寫實劇が要求せられる氣運に際會したのである。歌舞伎が俚謠と民間の踊とから出立したのも、其の物まねが能では無くして狂言を繼承したのも、やはり此の時勢を示すものであつて、これもまた戰國の世を經過したゝめに生じた變化である。歌舞伎の純粹の踊が前代の舞と結合しても、猿樂の歌舞が古典化せられたとは違つて、むしろそれを現代化してゐる。しかし兎も角も歌舞伎が古い舞や謠ひものと結合しなくてはならなくなつたのが、此の時代の一般の風潮に應ずるものであつて、上に述べた如く三絃曲に於いても同じ傾向を示してゐる。

俚謠や民間の踊が世に現はれ、平民的要素が文藝の上に勢力を得て來ると共に、古典文學を現代化し、高雅とせられてゐたものを単俗化する運動もまた行はれたが、これも舊來の秩序を破壊してゆく戰國的精神の一發現である。さうしてそれが、最も守舊的な歌連歌の世界に於いて生じたのは偶然で無い。歌連歌といふ高い天上の別世界に心を遊ばせて、物騒がしい殺風景な現實生

活の外から一脈の優しみと温かみとを掬しようとするものがあると同時に、それを自分等の生活してゐる現實世界に引き下ろさうとするものが生ずるのは無理の無いことであらう。しかし其のもとになつた歌連歌が、本來實生活から懸離れた遊戯的のものであるから、よしそれを手近いところに引きよせたにせよ、此の遊戯的態度を變へるまでにはならなかつた。否むしろ（思想の上から見ると）一層遊戯的に實生活を取り扱ふ様にさへなつたのである。

此の新しい歌連歌は所謂俳諧體である。和歌に、言語上の滑稽を目的ともし明らさまに見せてもゐる俳諧の一體が、昔からあつたことはいふまでも無く、連歌の發生も實は茲に胚胎してゐるといつてもよいのであるが、其の連歌が後には却つて俳諧の域を脱して來たことは前篇に述べて置いた。古今集の俳諧歌は、全體に言語上の滑稽を弄ぶ傾のある此の時代の普通の和歌と比べて、効果の上にはさほどの差異も無いやうに我々には感ぜられるが、それは一つは用語が何れも當時の口語で、今人の耳には同様に縁遠くひびく故もあるのだ、俳諧歌は故らに滑稽にいひなさうとする作者の態度と滑稽の程度とに於いて、普通の歌と幾分の違はあるらしい。ところが口語の變遷した後世になつて、上代の口語であつた歌詞と日用語との間に區別が生じ、又た歌に詠むべきことが一定して來ると、歌の形式に歌詞ならぬ日用語をあてはめ、歌らしくない事柄を材料とする

行爲なりを傍觀的態度で茶化してゐる。永正五年の日附のある狂歌合に其の好標本が見えるので、これは「世にそむける貧客どもの」戯に擬して作られてあるだけに、「今朝照らす日なたばかりに貧乏の神代の春や立ち返るらん」といひ、「今は世にめたと酔ひたる我なれど酒が無ければ斷酒をぞする」といふやうな風のものである。

さて和歌界の一隅に斯ういふ現象があるとすれば、所謂室町時代以後、歌と同様高尙なもの幽玄なものと考へられ、其の詞も概して歌詞を用ゐるやうになつて來た連歌界に於いても、また同じ要求から同じ遊戯が生ずるのは自然である。特にすべての事物に對して傍觀的態度を取り、客觀的にそれを叙述する傾向のある連歌は、思想上からも斯うなるには好都合のものである。連歌の流行が盛になつて來た時代に、歌人、わけでも連歌師の間に俳諧の歌や連句が弄ばれるやうになつたことについては、歴史上から考へると先づ斯ういふ事情がある。（俳諧の名は此の頃では歌にも連句にも用ゐられた。歌の方には別に狂歌の稱もあつたが、俳諧が連句ばかりのことになつたのは、もつと後の話である。）

此の傾向の大なる代表者は宗祇の門人の宗長であらう。宗長手記や宗長日記の到るところにそれが見える。「いづくも木柴炭たえ茶湯たえ味噌鹽しらぬ雨のつれづれ」などは、故らに言語



遊戯が、自然に行はれるやうになると共に、さういふものは（よし其の思想や用語自身に於いては、別に滑稽の分子の無いものでも）、一般に型にはまつた歌詞を用ゐるべきもの、因襲的な花鳥風月と神祇釋教戀無常とが詠まれるものと豫想せられてゐるところに、突然日常語を聞かされ、歌らしくない事が見せられるため、形式と内容との矛盾を感じてそれが滑稽に聞こえる（所謂道歌めいたものなども此の意味で寧ろ滑稽の感がある）。その上に言語上の駄洒落などを用ゐれば、滑稽の感は一層強くなる。所謂鎌倉時代の頃から、一方では歌が幽玄なもの、實生活から離れた別世界の高尚な道とせられて來たと共に、（よし其の修辭法に昔ながらの言語上の滑稽が襲用せられても、その詞が既に耳遠くなつてゐるものであるために、事實上滑稽とは感ぜられなくなつてゐるから）、一方では斯ういふ滑稽の歌が歌人の遊戯として作られたので、落首なども其の一例である。職人歌合とか調度歌合とかに見えるものも、やはり此の部類に入れてよからう。それによつて好笑的趣味が満足せられ、また實生活に關係のある、歌にはよめない、思想を歌の形式によつて表現することが出来るのである。が、おも正しいものとせられてゐる歌を滑稽化し遊戯化する此の態度は、ちのづから其の取り扱ふ事物其のものをも、滑稽視し遊戯視するに適するるので、此の頃から後の狂歌とか俳諧歌とかいふものには、大抵社會上の出來事なり自己自身の

上の滑稽を弄したのでは無いが、我と我が身を嘲つたやうな傍觀的態度があることゝ、俗語を用ゐる歌にはよまぬ日常生活を詠じたことゝによつて滑稽の感が生ずる。長歌風のものに「めしああし、にごり九こんも稀れ〜に」とか、「夕顔白き垣つゞき、小家がちなるあたりにて、市女あき人さりあへず、菜候いも候なすび候、白瓜候と聲々に」とかいふものも、やはり同様である。其他「福は内へいり豆の今夜もてなしを拾ひ〜や鬼は出づらん」などは鬼の豆を拾つてゆくといふ滑稽的觀察の外に「いり」のいひかけによつて言語の上にも滑稽が見える。これは歌に於いて常に用ゐる修辭法ながら、俗語だけに歌ではさまでに聞こえない滑稽が強く耳に響くのである。なほ「すゞか山ふりすてぬ身の悲しきは老かゞまれる腰をかゝれて」。「鏡山いさ立よりて見てゆかじ年經ぬる身はちしはかるなり」など、古歌をもぢつた滑稽も多いが、是は前にいつた狂歌合にも例のあることで「狂歌には態此風を用侍る也」といつてゐるし、後世の狂歌には殆ど無くてはならぬ必要の手段とせられたものである。古歌を思ひ浮べてそれから生ずる一種の氣分を豫想してゐるところへ、突如として異様のものが現はれて、意外の方角へそれを外らしてゆく點に滑稽がある。それから連句としても、宗長手記に「爐邊六七人集て田樂の鹽噌の次で」に戲作した俳諧があつて、其の材料には兒も若衆も乞食も高野聖も茶屋坊主も、さては後家のなつた浮

かれ君も密夫もあり、さうして馬に乗つた人丸にも金覆輪の源九郎にも、歌聖や英雄の面影は消え失せ、梅が枝にも菊の花にも古典の色や香は無くなつてゐる。これは恰も狂言の取り扱ひ方と同様であるので、其の滑替は「不動も戀にこがらす身か」と恐ろしい不動明王から宗教的威嚴を剥ぎ取つて戀にうき身をやつさせると共に、それに言語上の駄洒落を結びつけ、又た或は茲に引用しかねるやうな卑陋な事柄を露骨にいつて低級な笑を求めたりする點にある。

ところで斯ういふ俳諧には、歌のでも、連句のでも、其の材料に主として人事が採られる。自然界の現象を捉へても大抵は人事を配合する。本來滑替は人間界のことだからである。自然界の現象其のものに滑替は無いから、それを滑替に観察し又はいひなすには、單純なる言語上の滑替による外は無い。「夏の夜の破れかや堂立ち出で、」(宗長手記)の類が俳諧とせられたのは「破れかや堂」の語の耳新しいのが主なる理由であらう(前句との關係から来る其の見方にもあるが)。が、かういふ俚語は用ゐなれば滑替には聞えなくなる。ところで短い歌や連句に於いて人事を材料とし、さうしてそれを滑替的に取り扱はうとすれば、よほど高い趣味と深い思想とを有つてゐるものでなくては、そこに理智の働きの多く加はつて来る。特に連句に於いては、付け方が所謂「心づけ」で無く、言語の縁による傾向を生ずる。題材其のものに對する態度は連歌固有の性

實として傍觀的敘事的であるが、其の取り扱ひ方、結びつけ方が主觀的、理智的になる。前篇に述べたやうに客觀的敘述の方向に進んで來た連歌が茲で逆轉するやうになつた。さうしてそれが、言語上の滑替から發達して却つて其の境地を脱し去つた連歌其のものが、此の俳諧體によつて再びもとの滑替に立ち戻つたのと相伴つてゐる。宗鑑の犬筑波集を見るとそれがよく判る。

犬筑波集には宗鑑と同時代の連歌師の作も交つてはゐるらしく、兼載宗碩などの句として知られてゐるものもあり(守武千句跋文参照)、又た筑波集を摸倣したらしい名稱からもさう推測せられるが、故らに付けにくい前句を撰んだ形跡のあるのと、前に引いた宗長手記にある俳諧と同じ前句のあるのを見ると、其の大部分は宗鑑の作であつて、編纂の主旨は前句に對する付け方の技倆を示す爲であつたらう。さて其の付け方を見るに、先づ目に立つのは純粹に自然界の現象を材料としたもの、殆ど無いことである。「山郭公穴になく聲」に「夏の夜の空を狐に化されて」とつけ、「すい〜風の萩に吹く聲」といふに「啼く蟲もむかばやぬけて弱るらん」とつけたなどは、まづそれに近い方であるが、それでも狐に化されたり、蟲の齒がぬけたり、それが人間らしくなつてゐて、作者の著想は全く此の點に生ずる可笑しみにある。「蜻蛉に似たる蟲飛ぶ須磨の浦」も「問ふ人あらば蛇と答へよ」といはれる。「大長刀に春風ぞふく」は既に人事的要素が

加はつてゐるが、「辨慶も今日や火花を散らすらん」とつけると、もはや春風どころで無い。「雲の腹にもつくる膏藥」に「月星は皆はれ物の類にて」といふに至つては月も星も雲も下界に引き下ろされて汚い腫物やみにせられてしまつたのである。一句としても「花にぬる蝴蝶は夢にたゝかれて」、「花を風ちりやたらりと吹き立て」、「田子の浦にうち出て見れば茶屋も無し」の類、何れも人間化せられ人事を交へてゐる。四季の部に句数が少くて雑の部が非常に多いのでも、斯ういふ俳諧作者の趣味が知られよう（雑の部にも季のあるものが少しはあるが）。

ところで啼く蟲を齒ぬけにし、雨に蝴蝶をたゝかせ、雲に膏藥をはらせるのは、此等のものを作者と交渉の無い遠いところに置いて、それを眺めてゐるのであるが、決して自然を其の儘に觀察するのでは無く、勝手な姿をこちらで作つてやるのであり、さうして其の作り方は甚だ理智的のものであつて、例へばすい／＼風が吹くには齒をぬかねばならぬからのことである。さて斯ういふやうに自然の風情を見ずして理智を以て取り扱ふことになると、句のつけ方も従つて所謂心づけては無くなる。「武さしをさして飛んでこそゆけ」に「辨慶がつぶりも蜂や知らざらん」とつけるやうに言語にたよつたもの、又は「淋しくもあり淋しくも無し」に「世を厭ふ柴の庵に錢もちて」といふやうな理窟によるものが多くなる。宗長が自分の付け句を宗鑑のと比べて「心付

け」の點に於いて優つてゐるといつたのも此の故であらう。これは發句としても「なべて世にたたくはあすのくひなかな」といふやうな駄洒落や「白山の神の本地や雪佛」のやうな理窟を好んだ此の作者として當然であらう。また「無念ながらも嬉しかりけり」に「去りかねる老い妻を人に盗まれて」とつけ、「斬りたくもあり斬りたくも無し」に「盗人を捕へて見れば我が子なり」としたやうに、人情の一面に觸れてゐるとさへいはれさうな句もあるが、それも實は理窟から割り出した考であつて、實際の觀察から得たものでは無く、寧ろ虚偽である。此の點に於いて犬筑波は昔の三代集時代の歌や、後世の所謂月並調の俳句を聯想させる（俳諧の系統に於いては貞徳などが此の一面から發達したものらしい）。

しかし、我々が犬筑波集を通覽して興味を感ずるのは、同じく言語上の縁にすがるにしても、「八幡の山を拜む尼御前」に「今こそあれ我も昔は男して」とつけるやうに、突如として意外のところを轉換させることであつて、これなどは、付け句其のものが既にさうである。一句としても「高き屋に上りて見ればやけにけり」。「大般若はらみ女の祈禱して」。「あのくたら三百餘騎を引具して」。「人間萬事詐はれる中」などはやはり同じ態度である（後の談林調に此の一面を極端に發展させてゐる）。前句の思想をかけ離れた方面に轉換することは、連歌に於いて自然

に養はれて来たことでもあり、また一首の歌としても所謂いひかけの技巧によつて常に行はれてゐることであつて、そこに輕快の感があり、場合によつて滑稽にも聞こえるので、發句に於いて「佛壇にほんかけたかほととぎす」といふやうなものを作つてゐるのは此の趣味である。が茲に擧げた俳諧では、その轉換があまりに方角違ひであつて、特に内容の上に於いては莊重なものが突如として輕いものになり、高い位置のものが低いところに落されるので滑稽の感が一層強い。さて此のまじめなものを茶化するのが、思想の側から見た俳諧の特色であつて、言語上の滑稽は無くても「來迎の阿彌陀は雲を踏みはづし」といひ、「彩色の佛の箔はみな元げて」といひ、又は「乾瓢になる夕貌のやど」といふなど皆な其の例である。「足洗ふ手洗の水に月さして」なども、作者の考では月の光の新しい風情を見つけたよりは、寧ろ清らかな月かけをきたないところになさせ、天上の月さへも茶化したのであらう。戀を茶化してゐることは勿論である。

犬筑波は單に一句づゝの付合を集めたものに過ぎないが、一卷の連歌としてもそれは行はれてゐたらしく、普通には俳諧の連歌の始といはれてゐる荒木田守武の獨吟千句の跋によつてさう考へられる。守武のは後に遺つてゐるものゝ最初であらう。さてこれは纏まつた一卷をなしてゐるだけに種々の分子があるが、大體の傾向は犬筑波と同様であつて、甚しく卑陋な句の甚いのがそ

れと違ふぐらゐるものである。「花さく山に喉はかはかじ。み吉野の茶のむの雁や歸るらん。すきの間なれど春のふる里」。「曉の秋の嵐のうちあて」。露心得ぬながめするなり。「ひつこめと川風寒み日は暮れて。頭巾大きに千鳥なく聲」などで、自然を人事化し、高雅とせられたものを卑俗化し、古句を茶化し、駄洒落を多く用ゐ、風情よりも言語によつて付け、また理智のはたらいてゐる有様がほどわからう。「小町戀ふ四位の少將狸にて」。「枕よりあとよりこひと餅と來て」。「久方の天つ乙女の鼻のさき」の如く、戀も美人も滑稽化せられてゐることはいふまでもない。

さて此の萬事を茶化す態度は(後にいふやうに)此の時代の思想の一面をよく現はしたものであつて、徳川の世に入つても益々流行して來るが、如何に高雅と思はれてゐるものをも、勝手次第に卑近のところに引き下ろすといふことも、また戰國的精神の一發現である。犬筑波の戀の部に甚しき猥雜の文字を無遠慮に並べてゐるのも、矢張り同じ思想から來てゐるとも見られる(但しそれてゐて挑發的で無く肉の匂のないのは、取り扱ひ方が遊戯的、滑稽的で、全體の態度が傍觀的だからである)。伊勢源氏を本尊にしてゐる連歌には探られない辨慶や曾我や其の他の武士を自由に連れ出し、眼前の事物を何でも材料にするのが、因襲的權威に對する戰國的破壊思想、貴

族文學に對する武士的平民的態度であることはいふまでも無い。俳諧其のものによつて一篇の句集が出来、一巻の連歌が作られるといふことが、既に高雅な事も正しい歌連歌を卑近にし茶化し遊戯化するものであつて、それが即ちかういふ時勢の反映でもある。しかし一方ではこんな態度を取りながら、なほ古歌古句をもどり、源氏や伊勢を棄てかねる點に於いて、やはり實社會には自由な我儘な空氣が全體に溢れてゐながら、思想の世界ではなほ古いものに拘束せられねばならないほどに、内容が貧弱であつた此の時代の面影が見られる。文學を平民化しながら、それを眞面目のものとはしないで、どこまでも遊戯的滑稽的に取り扱つてゐるのも、また本來實生活とは縁遠い歌連歌の遊戯文學の因襲を脱することが出来ないからであつて、前にも述べた俳諧發生の歴史から來る必然の趨勢である。

以上(文學としてはさしたる價值のない)此の時代の俳諧に就いて言を費し過ぎた嫌はあるが、これは和歌連歌から一轉して斯ういふものゝ作られたのが、時代の氣風の現はれたものとして興味があるのと、今一つは後世になつて特殊の文學として大に發達した俳句の淵源が茲にあるのとためである。さて宗鑑や守武を繼ぐものは暫く現はれなかつたが、これは文學を翫ぶものゝ間に古典崇拜の思想が容易にぬけないので、連歌が尊ばれた故であらうか。それを徳川時代になつ

て復興したのが貞徳である。文藝が漸次平民化せられてゆく趨向と、太平の民が消閑の遊戯を求めて來た時勢とに投じたのであらう。だから同じく俳諧を標榜しても、それに對する態度は宗鑑などとは違つてゐる。宗鑑には根柢に於いて世上の萬事を滑稽視する態度があつた。貞徳はたゞ遊戯文字を弄するのみである。宗鑑には古典を現代化し、高雅なものを卑俗化しようとする破壊的態度があつた。貞徳は初から卑俗の地にあつて、寧ろそれに勿體をつけようとする。宗鑑が一種の隱遁者であつたのと貞徳が俳諧を職業としてゐるのと、戰國時代と太平の世との相違がこゝにある。さうして貞徳が宗鑑のあまりに放縱な態度を攻撃し、また御傘を著し、連歌に擬して俳諧の式目を定めたことが(一つのもつた技藝とするに必然な要求ではあるものゝ)、こゝのづから社會の固定してゆく時勢に適合するのであつて、前に述べた小唄や歌舞伎の變遷と相伴つてゐる。彼の門人の徳元の書いた俳諧初學抄に卑俗を避けることを力説してゐるのでも、彼等の態度が知られよう(其實彼等の作には宗鑑に譲らない野卑なものがあるのみならず、宗鑑の如く放逸で無いだけに、却つて醜陋の感を深くする傾がある)。

貞徳の作については多言を費す必要が無からう。其の目的は俚語を用ひて言語上に理智的の可笑しみを求めようとするところにあるので、所謂諷言がそれである。發句についていふと、其の

をかしみを求める修辭的技巧は、多く縁語を用ひ、一語を兩義に使ひ、又は音の類似などを利用するところに生ずる言語上の洒落であつて、「霞さへまだらに立つや虎の年」。「木だちには過ぎたぞ花の大つばき」。「雲霧や芋明月の衣かつぎ」。「つとりさせとち／＼なくやされ／＼す」(以上犬子集)といふやうなものである。いひかけなども用ゐるけれど、「先づかつく頭はかななづきんかな」(同上初冬)といふやうに、いひかけ其のものをしやれとして、そこに興味焦點を置いてゐる。(此の頃に行はれてゐた狂歌の趣味もほとと之と似たものであるが、それには本歌をもぢるといふことが尠くないので、此の點だけが違ふ。) 連句の方でも其のつけ方は理窟的説明的で、やはり多くは言語上の縁を求めてゐる。「碁盤の上に春は來にけり」に「宵のとしての舞は三番能二番」、又は「歌合せ十首過ぐれば四方拜」(油かす)とつける類がそれである。要するにすべてが理智的のもので、其の姿は重くるしい、所謂「ねちみやく」(俳諧水滸傳の成語)の句である。宗鑑の後を追つて多く人事を材料にするが、世に對し事物に對して彼の如き滑稽的態度が無く、彼の如き放奔の趣が無い。随分卑陋な材料をも使ふ癖に、故事古語を盛に利用して、往往講釋を聽かなければわからない謎のやうな句を作り、つけかたをする。連句のうちには自然界を賦することもあるが、新しい觀察も情味も見えない。觀相と趣致とよりは理智のはたらきが主

になつてゐる。此の點に於いて彼の風體は周阿時代の連歌、古今時代の和歌と趣を同じうしてゐる。たゞ何物に對しても傍觀的態度でそれを取り扱ふことは連歌以來の特質で、和歌の多く主觀的なのと違ふ點である。要するに彼の作は文學としては一向價値が無いが、たゞ民間文學として俳諧を世に弘めたこと、平民的ながらに、をかしみが主でありながらに、それをおも正しいものとしたのは彼の功績であつて、宗鑑のやうに放縱な茶化したやうな趣が無いだけ、まじめな文學として發達すべき素地がそこに出來たのである。其の材料にあらゆる人事を遺すところ無く取り入れ、古文學についても伊勢源氏の古典を用ゐると共に、謠曲幸若狂言小唄等を自由に使つてゐるのも、宗鑑守武以來のことではあるが、文學の材料の範圍を擴げた點に於いて(後にいふ尤の草子や東海道名所記など、同様)平民文學の發達の上に大なる貢獻をしたものである。だから貞門の諸子に至つては、大體は師風を守つてゐながら、其の個人的特色と時勢の趨向とによつて、幾分かづ、新しい方面に進んでいつた。特に貞室の如きは「御手洗や浪間の月に茶を賣りて。躍のかへさ松崎あたり。初秋のばら／＼雨は岡つゞき。一度に渡る小鳥大鳥」(正章獨吟千句)などの例でも知られるやうに、其の情趣と句法と自然界の觀察とに於いて、後の蕉風の先驅ともいふべきものを作るやうになつた。自然界に於いても新しい材料をみつめてゐる。これは

貞徳のまじめな一面から出立して、理智と言語上の洒落とから遠ざかつて来たのである（もつとも強いて卑陋な事物を花にも月にも配合して、低級な滑稽を求めたものもあるが、それでも貞徳よりはいくらか進んでゐる）。また慶友の如きは（別に狂歌を好んだ関係もあらうが）、滑稽の方面を發達させてやゝ輕快の句を作り、次いで起るべき談林調に近づいた。「朝倉や木の丸つぶそ青山椒」。「繪言の汗をあふぐや大うちち」(犬子集)などは、忽然として意外の觀念に轉じてゆくところが宗因得意の手法に似てゐて、即てまた宗鑑の遺風である。同じいひかけを用ゐても、それによつて無關係な觀念を卒爾として維ぎ合はせるのが貞徳などは違ふ點である。立圃句集にも二三これに似たやうな句が見える。實際、談林の建立は貞徳の理窟と平凡との厭かれたに乗じて、一たび宗鑑の昔に返ると共に、更に別様の新旗幟を翻したものであつて、それには寛文時代の時勢の影響もあり、従つてまたあのづから一種の處世觀が伴つてゐる。が、それは寧ろ次の時代の新しい現象として説くべきものであらう。

さて貞徳によつて唱へられた俳諧の一體は、平民文學として廣く世に行はれるやうになつたらしく、犬子集が國々所々から到來の句を以て編纂せられたのでも、それが知られる（狂歌の流行も之と同じ現象である）。發句が獨立のものとして見られるやうになつたのも、此の時代からの

ことらしく、犬子集には連句よりも發句を先にしてゐるほどであるが、それは連歌に於いて、又たそれから轉じて来た俳諧の連句に於いて、發句が自然に獨立するやうな形になつて来たからであるものゝ、また俳諧が平民文藝として廣く地方にも行はれるやうになつたのが其の一原因であらう。離群索居してゐるものには、百韻などは容易に興行せられない（獨吟は別として）。それには發句だけを作るのが便宜である。さうして古典的の歌を作るだけの知識の無いものには、其の代りとしてもこれが歓迎せられたであらう。

以上は戰國の破壊時代、自由な放縱な時代に於いて、平民の間から起り、若しくは平民化せられた文藝が、徳川の固定時代になつて、却つて舊要素を加へて来た有様を述べたのである。ところが其の徳川時代に入つてから、一方では古典文學が現代化せられ、古いものから新しい文學が生まれかけて来た。それは物語草紙の方面であつて、伊勢物語を狂歌風にもぢつた仁勢物語が出来、枕の草子に擬した尤の草子が作られ、又は徒然草を學んだ如備子の可笑記（形式は今昔物語をも摸したらしい點がある）、山岡元隣の誰が身の上などの現はれたのが其の一例である。可笑記には「神無月十日あまりの暮つかた柳原を通りて」の一段（卷四）、江戸日本橋で馬の上に眠つ

てゐるものを見ての感想(同上)など、徒然草中の物語を殆ど其のまゝに取つたところがあり、誰が身の上の四季の推移を書いた一節(第二)も同様「をりふしの移り變る」段の現代化である。思想や筆致の上の摸倣も所々に散見する。竹齋物語もまた伊勢物語から脱化してゐることは、京では身すぎが出来ぬから田舎へ下らうといふ藪醫者の竹齋坊が「京にありわびて」東に下つた業平の滑稽化せられたものであることから、中に伊勢の文章を殆ど其のまゝに取つたところのあることから推察せられる。なほ此の系統は此の竹齋の子か孫らしい樂阿彌を捉へた淺井了意の東海道名所記にまでも及んでゐて、それには所々に明白な伊勢物語の摸倣が見える。同じ作者の浮世物語さへ一節毎に「今は昔」で筆を起してゐる。さうして後にいふやうに此の名所記などにこそ次の時代に至つて大に現はれる新文學の曙光がほのめいてゐるのである。此等の作よりも早く世に出た慶長見聞集なども其の體裁は今昔物語をまねたものである。さて斯ういふ古文學の擬作は、其の一半の意味に於いては、宗鑑や守武が連歌から俳諧の連句を作り出したのと同じであるが、俳諧の方が前に行はれたのは、古い俳諧の歴史があるのと作り易いとの故であらう。

ところで此等古文學の擬作は、其の主旨が昔行はれたのとは全く反對である。昔の源氏を摸倣したものは、凡てに於いて粉本と同じ様に見せようとした。即ち此の擬作によつて、古物語の世

界と情調とを讀者の胸裡に再現させようとしたのであつた。前代に出来た「十番の物争ひ」などまで、やはりさうであつた。ところが此の時代のは、狂歌やそれと同じ態度を以て書かれた仁勢物語などはいふまでもなく、さういふ滑稽化し茶化さうとする考のないものでも、枕なり徒然草なりの結構や體裁を摸して、それとは全く違つた新しい世界を作り、新しい氣分を出すのであつて、古いものを現代化し、貴族的のものを平民化し、高雅と思はれてゐるものを通俗化するとともに作者の興味的一半がある。古典を古典として崇拜することは、昔と變らないけれども、其の古典の世界はあまりに現代と懸隔してゐるので、もはや其の間に自己を投入することが出来なくなつた。これが戰國の破壊期を經過して來た此の時代の新傾向である。さうしてそれほど現代はなれがしてゐるために、其の古典は現代人の思想を拘束する力が無い。だからそれを擬作して、全く別のものに出ることが出来るのである。室町時代の社會は、現代の生活から日々に遠ざかつてゆくけれども、なほ其の間に多少の脈絡がある。特に文學上の知識に於いては間隔なき傳承があるので、前代の文學はなほ現代人を拘束する力を有つてゐる。だから其の踏襲が怪しまれずに行はれるのである。けれどもそれは、現代の文學として現代の思想の表現としては、どうしても不満足である。ところで其の缺點を補ふものが、却つてずつと古い文學の擬作にあるのは、不



議なやうて實は不思議で無い。古典は自由にそれを現代化することが出来るからである。

さて斯ういふ古典の擬作が、結構のある物語に就いて行はれず、伊勢とか枕とか徒然草とかいふ、纏まつた組織の無いものゝみを手本としたのは、それが最も現代化し易いからである。目睹耳聴のまゝに思ひ出すまゝに断片的の文字を並べると、枕や徒然草の摸作はすぐに出来る（寫實其のことも、平安朝文學の寫實主義から幾分の感化を受けたのかも知れぬ）。けれども何んな事柄にせよ、人生の或る葛藤と其の解決とを叙述しなければならぬ物語を作るには、作者に一通りの構想力と其の中心になる觀念とが要る。が、さうなると幼稚な頭では何かにたよるところが欲しくなり、従つて世に行はれてゐる物語を粉本にすることになる。前章に述べた物語類がそれであつて、比較的自分等の時代に親しい前代の文學が其の手本に使はれ、従つてかういふ作は舊型の踏襲に陥るのである。古典の物語はそれとは違つて、あまりに現代と縁遠いから、それを摸作するのは畢竟新しいものを創作するのと何等の差異がない。その出来ないのが此の時代の状態であるから、最も神聖視せられてゐる源氏などには、却つて擬作が出来なかつたのである。

かう考へて來れば、断片的に見聞のまゝを書きつゞるところに、かういふ擬作の寫實的意義があり、従つてそこに新文學の端緒の開かれる契機があるのは怪しむに足らぬ。寫實をすれば典型

と因襲との繫縛を脱することができからである（自叙傳もしくは自叙傳を物語風にしたものが、新文學の先驅をなすことのある理由も一つはこゝにある。ありのまゝに自己を表出するところに、換言すれば自己の寫實をするところに真率と自由とがある。但し反省と自覺との無い此の時代には、さういふものは出来ないから、寫實の眼は主として外界に向けられる）。慶長見聞集は既に其の先驅をなしてゐるので、可笑記もやはり其の亞流であるが、なほ書物から得て來た知識の分子が多かつたり、動もすれば抽象的な理智に陥つたりして、寫實的態度が徹底せず、讀んだ上の興味も乏しい。尤の草子も此の點に於いては同程度のものである。が、竹齋物語ではそれがよほど變つて來、もう一步進むと東海道名所記になるのであるが、此等の作が伊勢から脱化した遊歴の物語になつてゐることは無意味で無い。異郷の山川に接し、所かはれば品かはる風物のさまざまと、折にふれ事に當つて現はれる世態人情とを、見聞のまゝ感じのまゝに書きとめるのは、寫實の方法として最も容易でもあり、興味もあることだからである。もつとも斯ういふ紀行や名所記の作られたのは、實際からいふと、地方人の江戸に往復することが多くなり、田舎ものゝ京詣でや江戸見物が流行した故であり、文學上の歴史からいふと、舊くからの紀行類の先蹤もあるが、それが實際の見聞を細かに寫さうとするに至つて、始めて新文學としての價値を生ずるのである。

同じ名所記の類にしても、前代の草子の系統を受けて典型的の文字を並べてゐる徳永種久の色香論などは全く違つて、寫實的なところに東海道名所記の文學史上の地位がある（東海道名所記は固より机上の作で、慶長見聞集や京童から取つたところもあるが、其の根幹は作者自身の觀察から成り立つてゐる。故事來歴の説明は因襲的でもあるが、案内記として實用上の目的もあつたらう）。

さて事實を寫さうとすれば、文體もおのづから新しくならねばならぬ。東海道名所記の女歌舞伎に心を奪はれてゐるものゝ有様、吉原の遊女、原の比丘尼、懸川の田舎女、見付の座頭、京の大原女などの描寫が、雅文脈ながらに俗語俚言を自由に使ひこなして、生き／＼とした面影を紙上に現はしてゐるのを見るがよい。美人には相かはらずの芙蓉のかほばせ柳の眉で濟ましてゐるところもあるが、風俗身なりなどに至つては頗る精細な寫實を試み、方言なども其のまゝに寫してゐる。浮世物語などもほゞこれと同様で、西鶴の筆致は全くこゝから出てゐるといつてよい。了意が新文學開拓に最も功績あるものであることは是がためである。しかし此の作者は實際の觀察と描寫とだけはするけれども、まだ結構のある、まとまつたものを作るには至らなかつた。浮世物語などが其の前半をなしてゐる「浮きにういて瓢金なる法師」の經歷を叙したところと、後

半のまじめくさつた説法との間には、一向聯絡が無さう。

古典文學は新文學の發生にこれほど特殊の關係があつた。けれども漢文學は思想の上には多少の影響を及ぼしてゐるが、文學其のものには直接の關係が無い。あり來りの詩文は何等の新しい刺戟をも國文學に與へないからである。たゞ剪燈新話から了意のお伽婢子が出たやうなことはあるが、それは所謂漢文學として考へるべきものには無い。また葡萄牙人の翻譯したインツプの類も、さしたる影響を文界に與へなかつたのではあるまいか。教訓的の假名草紙は必しもインツプを俟つて現はれるものでは無からう。近頃新村出氏によつて世に紹介せられた文祿舊譯のインツプは（宗教上の書物に例のあるやうに）口語を以て書かれてゐるが、一般の文學界にとつては文體の上になさういふものゝ感化があつたらしくは見えぬ。歐洲人との交通が依然として瀕繁に行はれて來たならば、斯ういふもの、特に口語體の文章も段々作られたであらうし、従つて其の影響も種々の方面に生じたであらうに、惜しいことをしたものである。

以上が此の時代の文學の鳥目觀である。概括して考へるに、文界の半面には前代の舊型を守つてゐるものがあると同時に、他の半面には新運動が起つて來た。さうして其の新運動は、文學を

平民化し通俗化し、もしくは平民の間から新しいものを創造することであつて、小唄歌舞伎俳諧に於いてそれが現はれてゐるが、これはちのづから戦國の破壊時代とそれを經過して來た徳川初期との時勢に適合してゐる。しかし平民化したもの平民の間から起つたものは、自由であり清新であり活氣が横溢してゐると共に、内容が貧しく形式が整はず品位が乏しい憾がある。それを補ふには、舊い文藝の分子を取り入れ、又は其の形を整へてゆかねばならぬ。だから徳川の社會が整頓すると共に、此等の新文藝もまた打ち揃つて斯ういふ方針を探るやうになつたが、それがまた自然に時代の思潮と相應してゐる。たゞ最後に現はれた寫實文學は一方に古典文學から來た要素がそれに具はつてゐると共に、他方では實社會を描寫することによつて、それみづから内容を充たしてゆくことが出来る。さうしてそれは、丁度歌舞伎の踊が古い舞と結合しても、狂言は益々寫實的になつてゆくと同様、又たそれと共に、次の時代の新文學新演劇に發達してゆくのである。

これは豈に發達の順序を見たのであるが、それを横に見れば此の時代の特色は、あらゆる文學の要素を混和し融合することであつて、古典的、貴族的、武士的文學の要素は盡く新に起らうとする平民文學に結合せられ包容せられる。さうして孤立して新文學の外に遺つてゐる舊文學は、

連歌でも謡でもたゞ儀式として保持せられることになる。是もまた第一章に述べて置いた文化の大勢に適合するのである。多少趣はちがふが、やはり同じ傾向を示すものとして今一ついふべきことは、從來互に縁違かつた禪僧及びそれによつて鼓吹せられた支那趣味と國文學とが幾分か近づいて來たことである。禪僧も和歌を詠むやうになつた。惺窩歌集には相國寺丹首座の歌が見えてゐる(惺窩自身は冷泉家の人であるから別として)。幽齋の衆妙集には東福寺で詩歌の會があつたとある(これは詩歌興行とあるから禪僧は詩ばかり作つてゐたのかも知れないが、少くとも彼等が歌と親しんで來たことはこれでも知られる)。狂歌に例の雄長老の出たのも斯ういふ時勢だからであらう。秀次が五山僧に謠曲を註釋させたのは、文字の知識のあるものが彼等に限られてゐるやうに思はれたからであらうが、兎も角も禪僧が國文學に手を染めた一事例である(當代記)。禪僧の詩に日本の事物を材料にし、歌人が支那の事物を詠むやうになつて來たことは、既に前篇にも述べて置いたことであるから、惺窩が其の庭に桃花源とか枕流洞とかいふ支那風の名をつけながら、それに一々歌を詠んでゐるなどは、さして新しい現象ともいはれなからうが、それにして支那趣味と國文學との融合が段々行はれて來た一體である。

以上は文學上の新傾向について外形の點から見た話であるが、次に其の内容に入つて觀察する

と、第一にはそれは遊樂の氣の滿ちてゐるのが目につく。小唄や歌舞伎は其のものが既に遊樂の道具であるのみならず、其の材料としても遊女などが用ゐられ、俳諧にも(傍觀的態度ながら)傾城や若衆を材料にしたものが尠なく、名所記の如きもさういふ點に特殊の光彩がある。これは恰も浮世繪に子女遊樂とか傾國遊翫とかいふものが多いと同様であつて、畢竟第二章に述べたやうな時勢の反映に過ぎない。それから遍歴遊覽が新文學の大切な題材であることは、前にもいつた通りであるが、これもまた此の氣風とちのづから相通するところがある。中村座の有名な狂言「猿若」にも此の二つの結合せられてゐる有様が見える。さて第二には滑稽的態度であつて、多かれ少かれ其の分子が含まれてゐないものは無い。俳諧でも擬似物語でも又は歌舞伎の狂言でも、貴族的なものを平民化するところに既に滑稽が生ずるのみならず、平民文藝の創始時代に滑稽が其の主なる要素であることは、何時でもまた何處でも普通の現象である(これにはなほ思想上の理由もあるが、それは後に述べよう)。さて此の二つの性質は、徳川時代の文學が後になつても遊戯的傾向を免れることが出来ず、従つて不まじめな、士人の手にすべからざるものゝ様と思はれた一由來をなすものであるが、それは當時の知識階級が偏狹な儒學の感化を受けて、正面から仁義忠孝の説法をしたもので無くては書物として尊重しないやうになり、又た従つて彼等が

外部から文字によつて與へられた道德的規範を人事に加へることにのみ力を注いで、人生其のものを内部的に如實に觀察することが出来なかつたゝめに、文學の立派に發達する途が塞がれたからでもある。此の時代の斯ういふ性質を有つてゐるものに於いてすら多少の道德的傾向は含まれてゐるので、これが第三に注意すべきことである。徒然草を摸倣した如備子や元隣の作は固より、了意の東海道名所記などにも、時々はさういふ態度がほの見えてゐるし、浮世物語の後半は全くそれを目的としてゐる。貞徳ですら宗鑑の句を評する時に、俳諧を教訓の意味のあるべきものと説いてゐる(淀川)。しかしこれは儒教思想の影響ばかりでは無く、世の平和に歸して、亂雜であつた戰國時代の氣風を一轉させ、社會を秩序づけようとする時代には自然に生ずべきことであり、かの遊樂の風の大に行はれたのもそれを促す一動機となつたのであらう(純粹の教訓草子が現はれて來るのも同じ理由からであらうが、それは且らく別問題とする)。たゞ斯ういふ道德的傾向も、人生を眞面目に觀察して其の裡に道德的意義を發見したのでは無く、多くは既に定まつた信條を説くに止まるのであつて、其の説き方も世相の描寫とは別々に遊離してゐるのが常である。さて文學上の此等の傾向は、何れも社會と人事とに興味の中心を置いてゐることを示すものであるが、それがまたちのづから第四の特色をなすものであつて、自然界に對する趣味は此の時代

に於いて大に閑却せられてゐる。俳諧も人事を主とする。名所記の類にも自然の風光を寫してゐるところは殆ど無い。新しく生まれかけた國民藝術たる浮世繪が、土佐繪の系統をうけて人事を主としてゐるのも、之と同様の現象である。自然界に新しい情趣を見出すことが困難であるのと、平民文學の初期に於いてそこに手の届かぬのは當然であるのと、故てもあらうが、人みなが我が力を揮ひ我が勢を張らうとする外に餘念のない戰國的武士氣質の餘風も、社會を整頓させようとする徳川時代の主なる要求もまたそれを助けてゐる。要するに人心が現在の生活に集中せられてゐたのである。

最後に一言して置くべきことは作者であるが、俳諧の宗鑑、貞徳、其の門下の徳元、談林の開山宗因、草紙の如備子、みな武士である。丁意は僧であるが元の身分は浪人であつたかも知れぬ（列傳體小説史參照）。それから舊文學の系統に屬すべきものではあるが、あだ物語の作者三浦爲春や、二人比丘尼、因果物語などの著者鈴木正三は、武士または武士の出家したものである。なほ守武は神主であり、其の餘風をうけたものか、伊勢には俳諧を好むものが多かつた。又元隣や貞門の立圖は商人出身である。僧徒でないもの特に武士が漸次文界に頭を出して來ることがこれ知られよう。平和の世になつて武士に文事に親しむ餘裕があるやうになつたこと、また浪人

といふ特殊の境界にゐるものが、閑暇の多いのと、書籍の印刷が行はれるやうになつた結果として、作者が幾分の報酬を得ることが出來たらしいのと、理由から、おのづから著述に従事する傾向の生じたことも其の一理由であらう。しかし彼等の著作には前にも述べたやうに、武士の特殊の思想を精細に描寫したものが無い。だから武士特有の思想を考へるには、却つて粗笨な軍記ものなどによる外は無いのである。次に其の方面に移らう。

## 第五章 武士の思想

武士の精神は武士が其の力を揮ふことの最も大なる時に於いて、最も明に發揮せられ、武士の思想は武士の活動の最も激しい世に於いて、最もよく成熟する。所謂源平時代の昔に既にほゞ形をなしてゐた武士特有の氣象は、武士生活の根柢に依然として存在しつゝも、其の後の三百年の世態の推移に伴つて、其の間に多少の弛張もあり變遷もあつたが、晝にも夜にも斷えまのない戦争が行はれ、西も東も武士ならでは世に立つことが出来ない戦國時代の大動亂によつて、再びそれが緊張すると共に、新しい時勢につれて特殊の色相を帯びて來た。これが我が國の武士の最盛期であつて、武士の美點が最も著しく現はれると共に、其の缺點もまた赤裸々に暴露せられた時である。

戦國時代は武力競争の世である。此の競争世界に於いては、人を倒さねば人に倒される。我が生存を維持するためには、進んで隣人を打ち負かさねばならぬ。戦は力の餘りに行はれる遊戯ては無くして、死ぬか生きるかの問題である。文字のまゝの命がけの仕事である。渾身の力を以てあらん限りの勢をふるつて、我がすることをしなければならぬ。こゝに戦國武士の熾烈な情熱がある。

ある。勿論人の欲望は限が無い。隣人と争つて勝てば、更に其のささの隣人を打ち破らうとする。勢を得れば更に其の勢を大きくしようとする。こゝに武士が其の生活を擴大しようとする飽くことなき要求と、それを遂行しようとする鞏固な意志とがある。或はまた我が力を揮つて我が事をなすところに大なる愉快がある。必しも物質的の欲望があるので無くとも、力次第運次第の世の中に躍り出して、思ふまゝに飛びまはり暴れまはり、力だめし運だめしをしようとする。功名富貴手に唾して取るを得べしといふ事功欲が、武士の心をそゝることのあるのも勿論である。さういふ武士の欲望と欲望と、意氣と意氣とが、衝突し紛糾し混亂し、其の間に生ずる思や讐や恨みや情けや、相手となれば激して起る敵愾心や、邪魔するものがあれば押しつけてゆかうとする勇猛心がそれを煽つて、全國を兵亂の熾火裡に投じ去つたのが、所謂戦國時代の百年間である。

だから戦國の武士氣質の根柢は此の情熱、此の事功欲、我が力によつて我が事をしようとする此の努力にある。榮華はもとより欲するところであるが、前代の如く神佛の力にすがつてそこに攀ぢ上らうとするのでは無い。力を揮つて敵を破ることは勿論好むところであるが、辨慶の如く無難作にやす／＼とするのでは無くして、奮闘によつてそれを遂げようとするのである。武士の思想を知るには此の武士生活の根本義を了解しなければならぬ。武士の思想は道學者の説法から

生まれたものでも無ければ、冷な文字上の知識から來たのでも無く、彼等の現實生活から長い間の體驗によつて精練せられたもの、現實生活其のものゝ結晶であり精粹であるからである。

此の武士の争は、一定の國土の上に立つ主従の團結を單位として行はれる。前々から繰り返して述べたやうに、武士の生活は其の起源からして既に、主従の結合によつて成り立つてゐるのであるが、此の時代には諸大名の領土がほゞ一小國家に固まつて、其の間に競争が行はれるのであるから、國主たる大名と其の家來との關係が昔よりも緊密になり、國際間の競争が激しくなればなるほど、またそれが長く續けば續くほど、其の度が加はつて來たのである。たゞ昔は此の主従關係が、源氏に養はれた坂東武士の間に於いて、特に著しく發達したけれども、南北朝時代以後、兵亂が全國に擴がつて漸次に戰國の形勢が馴致せられたために、此の關係もまた同じやうに全國の諸大名の下に成り立ち、従つてそれから生まれた武士の氣風もまた、ほゞ同じやうに各地方に於いて發達したのである。だから坂東は（よしそこに多少の特色があつたにせよ）もはや武士の本場では無くなつた。さうして武士の氣風の消長弛張は、土地の状態よりは寧ろ其の國の國情であつた。

此の主従關係の物質的基礎が、主人から家來に與へる生活の資本、即ち知行俸祿にあることは勿論である。これは源氏時代の昔と變りはないが、たゞ其の與へるものが財産として取り扱はれず、俸祿として知行として考へられたことが違つてゐる。昔は財産であつたから、其の相續も分配もすべてが私法的關係であつて、事のあつた場合にも本領安堵が原則になつてゐた。ところが此の時代にはそれが俸祿であるから、與奪の權は全く主人にある。それだけ主人の家來を支配する權力が強くなつてゐる。しかし事實に於いては、習慣上概して其の俸祿が世襲になつてゐるので、それを父子相傳へてゆくと、主従の關係が所謂譜代となつて益々緊密の度を加へ、其の間的情誼は一層濃厚になる。腕に覺えのある武士を要することの多い時代、従つてまた功名を顯はし利祿を得ることの容易な時代であるから、新參ものも斷えず抱へられ、渡り士といふものも出來、又たたまには一言の知遇に感じて永く主従の約束をするものもあり、さうして彼等とても必しも浮薄なものゝみて無いは勿論であるが、情誼は親しみの深うなると共に厚うなり、親しみは年と共に加はるのが普通の例だとすれば、「新座ものは其の身のいせいの時は奉公仕ものに候、自然手前悪しき時は其の身のかたつきを本とし、結句表裏を致すものに候」（武家事記所載、利家遺訓）といはれたのも、概していふと事實であつたらう。だから一國の勢力の中心たり根幹たる

ものは、どうしても譜代ものであつて、家中の作法としても制度としても、譜代ものをば特に尊重するのが一般のならばしてあつた。祖先以來の君恩によつて家を立て身を立てゝゐるものに於いて、初めて心からの家來となることが出来る。武士の家族制度と祖先崇拜とが、これにつれて完成せられたことはいふまでも無からう。

武士の主人に對する情誼と祖先に對する崇敬心との、結合せられる契機は全くこゝにある。此の時代から、儒教の忠孝といふ語をかりて、武士の道念をいひ現はすことが行はれてゐるが、其の意義は即ち是である。井伊直孝の訓誡として傳はつてゐるものに「人間一生の勤は忠孝の道なり、……忠孝を勤めんと思はば、主君并に先祖の恩を常に忘るべからず、……人間の苦は飢寒より甚しきは無し、百姓町人の晝夜となく骨を折る、飢寒を防がんためなり、……然るに武士は生まれながらの飢寒無し、みなく父母妻子兄弟を養ひ家來を使ひ安樂に暮らすは、これ主君并に先祖父母の恩徳にあらずや、此の恩を常に忘れずば忠孝の道忘るべきやうなし、古老の物語等に、毎日食に向ひ衣服を着る時、主君并に先祖父母の恩徳を思ふべきとなり」とあるのは、世が治平に歸した後の思想であるだけ、戦國時代の強烈な精神はそれに見えないが、武士が忠孝といふ語によつて示さうとした意義だけは明に判り、さうしてそれは戦國時代から繼承せられて來た思想

であることに疑は無からう。主君と先祖との恩に報いるのが忠であり孝である。其の恩とは何かといふと、自分等の生活の資として俸祿が與へられ知行が傳へられたことである。平らたくいふと、主君と先祖との恩蔭で自分たちは食つてゆかれるといふことに過ぎない。さうして其の知行俸祿は、先祖が主君から拜領したものであるから、其の本源は先祖よりは寧ろ主君にあり、其の自然の結果として孝よりは忠が重んぜられるものゝ、畢竟は忠孝が一に歸する。

かういふと所謂忠も孝も畢竟物質上の問題、利害の打算、勞働と報酬との關係になつてしまふやうであるが、生きるといふことが人生の根本義であり、生きるためには是非とも食はなければならぬのが、生物としての必然の要求である以上、食ふものを與へられるのは、即ち生命を與へられるのであり、人としての存在を與へられるのであるから、そこに人の生命の根本から自然に發生する情愛が成り立つのは當然である。物質的の關係は茲に精神化せられ、淨化せられ、靈化せられ、終にはそれが却つて物質を抛ち、衣食を抛ち、肉體の生存を抛つ、強烈な犠牲的精神となつて現はれるのである。忠孝といふ支那の文字をかりて現はされた戦國武士の思想は即ち是である。此の思想が儒教でいふ忠孝の意義に適合するかどうかは、後に述べようと思ふが、兎も角も戦國時代から引き續いてゐる封建制度、及び武士の世襲制度と家族制度とによつて、成り立つ



てゐた徳川時代の社會では、後までもこれが其のまゝに傳はつてゐたので、現に著者自身が幼時の庭訓に於いて全く是と同じ思想を注入せられたのである。封建の社會が壞れてから十幾年の後、知行をあてがはれ俸祿を與へられた主君といふものが、どこにも無い時代に於いて、消え去つた過去の歴史から、知識の力によつて思想の上に、それを復活させることが出来なかつた幼童の著者は、其の時まるで殿様の御恩といひ、殿様への御忠義といふ意味がわからなかつた。其の意味がわかつた後の著者は、今の世に忠君の語を口にする人たちが此の語の由來を知つてゐるのかどうかと疑はざるを得なかつた。世祿によつて衣食してゐた武士的家族制時代の、因襲的觀念に於いての孝行が、現代の國民生活に其のまゝ適用せられないことは勿論である。

けれども井伊直孝の言は、戰國武士の思想を説明したものととしては頗る物足りない。彼等はただ食ふことが出来るといふので落ち付いてはゐなかつたからである。功名の成し易き世に生まれ逢つた彼等には、其の功名を求むる心が火のやうに燃えてゐた。力次第で名を擧げることも出来る。働き次第で知行も加増せられる。其の上、赤手を揮つて立ちながら、大名となり國主となつたものさへもある。機に乗ればどんな幸運を掴めないものでもない。かゝる世に我が名を成し我が利を得んと望まぬものは少かつたらう。よしやかゝる欲望を有たないまでも、戰になれては

戰其のことに興味が生ずる。冒險の快感、敵を破るおもしろさがある。我が力をふるつて我が事をなすのは、いふまでも無く愉快である。武士がじつとしてゐられる世では無い。しかし武士が武士のはたらきをするには、主君を戴かねばならぬ。譜代のものは固よりのこと、さうして無いものは新に主人を求めなければならぬ。其の主人に我が力の認められ、我が働きの報いられる時は、即ち我が欲望の漸く實現せられる時であり、又た主人の恩情を感謝する時である。さうして其の主人の下に多數の武士が一つの團結をなす時、味方同志には自然に親しみが深くなり、敵に對しては敵愾心が起り、主家を大きくし主人の名を擧げさせようとする更に大なる欲望も煽られ、自分自身の事功欲もそれにつれてまた昂進する。戰國武士の主従關係は斯ういふ風にして成り立ち、主人に對する家來の情誼は斯うして發達したのであつて、それは要するに戰鬪其のことゝ戰國的形勢との賜である。

しかし戰國武士の精神を鞏固にして主従の間柄を美しくする最も直接の原因は、主君の人格であつて、國としての團結があり、また斷えまなき戰爭の行はれる結果として、主従の間が密接になつてゐるだけに、此の人格が家來を動かす力は昔よりも迥に大きかつた。主君の一言一行は直に家來の身の上に影響するのみならず、延いては家臣全體の向背と國勢の消長とに關し、さうし

てこれがまた忽ち彼等の身の上に反映するのである。従つて家臣の間に武士的精神の緊張するものも、弛廢するものも、主君の人格と家臣に對する態度の如何とによることが多い。だから一國一城の主たるものは、如何にして其の家來に臨むべきかに考慮を費すやうになつて、此の時代の名將の言行を書きとめたものとか、又はそれを批評したものとかに於いては、屢々此の問題に觸れてゐる。さうしてそれには往々人心を收攬する法とか、人材を鑑別することゝか、又は家來の取り扱ひ方とかいふ、意識しての用意に涉ることもあるが、それも畢竟は主君自身の人格の修養と家來を愛することゝに歸着するのであつて、それがまた此の問題の當然の解決でもある。

世に傳へてゐる東照宮遺訓といふものなどは、其の全體の主旨が全く茲にあるので、主君たるものは、其の身を正しくし武道を研いて家來に情をかけよといふことを、反覆縷説したものに外ならぬ。蒲生氏郷の書といふものにも、「第一家中者に情を深く、知行下さるべく候、……知行と情とを車の兩輪、鳥の兩翼の如くに候はねば不叶事に候」とある。知行は勿論のこと、それと共に家來を愛してこそ家來も其の愛に報いるのである。「大切なるものはなさせ深き主君、命を輕んずる臣下（尤の草子）であるが、其の臣あるは此の君あるが故である。さうして此の如き君は「めぐみある主を拜みて後のこと神も佛も第二第三」（尤の草子）、人を動かすことは神佛より

も強い。武士の強烈なる犠牲的精神は全く此の愛情から生ずる。だからそれに背く主君は必ず家來に見はなされる。大内義隆や大友宗麟や武田勝頼やを論じて、彼等の奢侈な生活、放縱な振舞、諂佞を近け忠直を遠ざけたことを擧げ、家臣の離叛し國家の衰亡した原因を茲に歸するのは、此の頃の武士の批判として屢々物に見えてゐるが、此の考には成敗の跡によつて人を論じ事を評する傾があつて、必しも一々首肯することは出来ないけれども、其の間に一面の眞理が含まれてゐることは明である。主従の關係は情誼によつて維がれてゐるのであるから、主人の人格如何によつてそれが濃くもなり薄くもなり、固くも脆くもなるのは當りまへであり、此の主従關係によつて成り立つてゐる國家の勢力が、またそれによつて消長するものも不思議では無い。

家運の傾く場合には此の關係が最もよく事實に現はれる。國亂れて現はるゝ忠臣のあることもうそでは無いが、多數の家來にそれを要望することの出来ないのも、また事實であるのみならず、情愛は普通の場合に於いて相互的のものであるから、主君の家來を愛しなくなつた時、家來もまた主君を愛しなくなるのに無理はなからう。主君の態度によつて、我が生活の基本であり此の情誼の淵源である知行俸祿の維持が不安心になる場合、賞罰が不公平で、我がはたらき我が力の認められない場合に、其の主君を有りがたがらなくなるのは當然である。のみならず、名將の下に

弱卒の無いのと同様、主君が立派で家運の興隆する場合には、家中全體の意氣が揚り精神もひきしまつて、平凡な武士も自然それに感化せられてゆくが、其の反對に家運の傾きかゝつた時には、全體の元氣が沮喪して、強くなるべきものも弱くなり、はたらくべきものも働かなくなるので、兩々相助けて遂に其の家を亡ぼすやうになる。さうして其の主なる原因は君主の人物にあるのである。ところが主君も人である以上、従つてまた常に其の英明を期し難い以上、かういふ場合が生じ勝ちである。君臣主従の情誼といふやうな對人關係を骨子としてゐる政治的勢力の根本的缺陷が茲にある。亡國の場合に其の最後までふみとゞまつて主君に殉するものも、必しも愛情から出た犠牲的精神ばかりでは無く、或は名を恥づる考、或は一種の意氣地、或はまた郷國に對する自負心といふやうな、他の分子がそれに加はつてゐることが多からう。

更に一步進んで考へると、主従關係其のものが本來永久的性質を有つてゐないのである。國自慢の情が此の時代になつて武士の思想に現はれて來たといふことは前に述べて置いたが、それはまだ愛郷心とまでも發達しない幼稚の程度のものであつて、武士の思想の根柢となるには至らなかつた。だから國としての勢力が一定の國土の上に立つてゐるに拘はらず、其の基礎はどこまでも武士の主従關係であつたのである。ところが前に述べたやうに、主君の人格が家來を心服させ

ることの出来ない場合に國が亡びて主従が離散するのは勿論のこと、たとひ主君に過が無いとて、列國競争の結果として小よく大に勝つことが出來ず、「時節到來」國破れ家亡びる悲惨の運命に遭遇しなければならぬことがある。其の時必しも心から君に背くのでは無いけれども、主家が滅亡すれば知行俸祿もあつたから無くなつて、我が身を支へることが出來なくなるので、どこまでも主家に殉して身を殺す特殊のものは別として、多數の家來は皆な分散しなければならぬ。落城となれば「たゞ一命の助からんことばかり願ひ、親をすて子をすて、我さきにと落ちゆく有様あさましかりける次第なり」(北條五代記)といはれねばならぬ。だから如何に武士の精神が訓練せられてゐても、結局主従の關係は主家の存在する間のことである。換言すれば主家が知行俸祿を與へ得る間のことである。更に他の言葉でいふと、家來が家來らしい働きをして武士の精神を發揮することが出来るのは、主人が幸運を開き得る場合に於いてのことである。武士の思想の根柢が愛國心でなくして忠君の情である間は、どこまでも主従の關係が本位であるが、此の關係は斷絶することが多い。列國競争の主體が、國民の團結で無くして君臣主従の結合である間は、何時かは此の結合の分解すべき時が來る。北條氏も崩れた。豊臣氏も崩れた。さうして徳川氏もまた遂に崩れなければならぬ運命を有つてゐたのである。

しかし徳川氏の主従関係が崩れたのは三百年の後の話である。其の初、此の松平家が幸運を開いた時に於いては、所謂三河武士は主従関係の最も美しく發達した標本として、世間から認められたのである。徳川氏が強國の間に介在してゐる一小國から起つて、一步々々に其の地位を堅め、一年々々に其の勢力を加へ、さうして終に天下を取るに至つたのは、地理的位置や、時節や、用心深くて思慮に富み智計に長じてゐた家康の人物や、又は幸運や、種々の事情がそれを助成したことは勿論であるが、其の基礎を作つたのは、譜代の家來がよく其の幼主をもちたて、主家のために粉骨壘身したのと、家康がよく家臣を信任して、それを愛しそれを用ゐたところにあるので、要するに君臣水魚の如くに相得、心を一にして徳川氏の興隆を計つたからである。前にも述べたことのある三河物語はよく此の間の消息を明にしてゐるので、所謂三河武士の主従の間に如何に濃かな情愛が有つたかを、それによつて知ることが出来る。是は勿論長い間の譜代の主従であるのと、織田と今川との間に板挟みとなつて、斷えず兩方から壓迫せられてゐる苦境を、如何にしてか脱却しなければならぬ、といふ境遇から激成せられたのとのためであるが、家康の人物と態度ともまた人心を維ぐに十分であつた。が、こゝていはうとするのは、其の家康は人を取り扱ふことが上手であつたといふばかりで無く、眞に家來を愛したであらうといふことである。

もとより彼は幼時から幾多の艱難辛苦を経験して、おのづから世態にも人情にも通ずることが出来たのみならず、歳を重ねると共に種々の出来事に遭遇し、さまざまの場合に處して、それがために益々世故に長けるやうになり、懸け引もうまく謀略も巧になつたのであるから、人を知ることゝ扱ふことも上手であつたには違ない。けれども單に上手のみでは、あれだけに人を心服させることは出来なかつたのであるまいか。世に知られた家康の行動によつて考へると、彼は實に老獪で猾智で打算的で、時には冷酷と評しなければならぬことさへあり、死に臨んでさへも芝居をしてゐて、殆ど純真な感情の發露を認めることが出来ない男である。が、襦袢の裡に母と別れ、引き續いて父を失ひ、長じて後は織田の歡を買ふ爲に、妻をも子をも犠牲に供しなければならぬやうな境遇に陥り、親子夫妻の親しみをもしみくくと味ふことが出来なかつた、といふ經歷から考へると、彼が情愛を解しない冷血動物として考へられるやうになつたのも、無理の無いことであつたらう。彼は女色に溺れなかつた、といふと昔風の道德眼からはえらさうに見えたかも知らぬが、其の實彼は多くの女に接しながら肉の上に於いてのみそれを取り扱つたので、女性に對する情味を解してはゐなかつたらしい。それほどまでに功利的の男になつた。しかし人には情がある。親子夫妻の情をすら切實に解し得なかつた彼は、別に其の渾身の情を濺ぎつくす相手

があつたては無からうか。さうしてそれは即ち譜代の家來てはなかつたらうか。

頼るところも無い孤兒として、織田に囚はれ今川に質となり、誇張な形容をすれば、流離困頓とでもいふべき月日を送つてゐた間に、さうして纔に國に歸ることが出来た後も、弱小な其の國を抱いて列強の間に處し、如何にして世に立つべきかを苦慮しなければならなかつた時に、彼のために心からの愛情を捧げたのは、即ち彼の家來ては無かつたか。茫々たる天地の間、家康の頼みとしたのは、獨り此の家來あるのみであつた。家來もまた譜代の恩義といふことの外に、此の氣の毒な幼主のために滿幅の同情をよせたのであらう。主従の愛は濃かにならざるを得なかつたのである。斯うして養はれた家康の家來に對する愛情は、徳川氏が漸く勢を得て、益々家來のはたらきに依頼しなければならぬことを感ずるに至つて、一層強くなつたに違ない。彼が士を愛したといふ後に傳へられた幾多の逸事を、盡く事實と信ずる訣にはゆくまいが、一向一揆の中にも宗門よりはち主といふ考のために信仰を捨てたものがあり、「徳川さまはよい人持ちよ」と世にも歌はれたといふのは、其の根柢に斯ういふ事實があつた故ではあるまいか。さうしてそれによつて、三河武士の氣風が礪き上げられたのではあるまいか。

勿論、それが順調に發達したのは、徳川氏の勢力が段々盛になり、それによつて彼等がみな三

河ものたることを誇るを得、また彼等が功名を顯はし、彼等自身の欲望を充たしてゆくことが出来るやうになつてゆくので、彼等の意氣を沮喪させる何事も起らず、たゞ彼等の武士的情熱を煽る機會のみ多かつたからではある。さうなつてから新に麾下に集まつて来る武士に於いては、猶さらである。けれどもなほ其の間に一種の暖い空氣が磅礴としてゐたのではあるまいか。「御代御慈悲を以て一つ、御武邊を以て一つ、よき御普代を以て一つ、御なさを以て一つ、是によつて御代々々も末ほど御繁昌目出度成」(三河物語)と、生へぬきの譜代の彦左衛門はいつてゐるが、其の御武邊も、よき御普代も、御慈悲御情の力によることが多いので、同じ人が時勢の變化に對して滿腔の不平を瀝瀉しながら、「例へば地行は得取らて餓へ死ぬるとも、必ずくゆめゆめ此の心もちを一つも棄てずして持つべし」と子孫に教へた三河武士の精神も、こゝから生まれたのである。だから信長の慘ましい最期と對照して、家康の好運を開いた有力な原因を斯う考へるのは、必しも成敗の跡からのみ見た僻見では無からう。

茲て一言附記して置く。武士の生活の根本が主従關係であるならば、武士は何事をも主人のためには犠牲としなければならぬ。親よりもち主の方が重く見られてゐたことは、此の點に於いて當然の話であつて、これは既に前篇にも述べて置いた如く、其のころから親子の一世に對して主

従は三世の契とせられてゐた。徳川の代になつても同様で、公文の上にはさへそれが明に見える。慶長十九年、時の執政等が家康父子に上つた誓書に「雖爲親子兄弟、奉對兩御所様、御爲惡誦族、並背御法度輩、於有之者、有體に可申上事」といふ一條があり、上杉景勝の式目といふものにも同じ意味の簡條がある。孝といふ支那の文字が屢々借用せられてゐたに拘はらず、「子父のためにかくす」といふ儒教的道徳は認められなかつたのである（平和の世に於いては、實際問題としてこんなことが起る例は殆どあるまいが、兎も角も思想の上に於いて、親を第二位に置いてあることを注意しなければならぬ。しかし戦國時代には、真田父子が石田方と徳川方とに分れた如く、場合によつては親子が敵味方にならぬとも限らないから、かういふ用意も必要であつたらう。ずつと後に出来た幕府のお定書百ヶ條に、主殺の刑は鋸引の上礫であるが、親殺はたゞの礫であつて、其の間に輕重の差のあるのも、やはり此の時代の武士から傳はつた因襲的思想に淵源があらう）。親子ばかりでは無い。夫妻の間柄についてもまた同様である。武士の縁邊は主人の聽許を要するのが普通の例であつたらしく（長曾我部百ヶ條、上杉景勝式目等）、場合によつては主人から妻の離別を命ぜられることさへある。主命と雖も妻をすてずといつて、却つて義と情とを具へてゐることを信玄に賞せられた甲州の小幡某の話のあるのでもそれが知られる。

なほ附言する。武士の生活の基本が主従關係であるならば、彼等の思想もまた概して其の外に出ないのは自然の勢である。だから彼等の多數は、我が日本國といふやうな觀念を有つてはゐなかつた。第一彼等は世が平和となつた後も、日本全體を統率する政治的勢力のあることをすら、十分には考へてゐなかつたのである。大阪の役でさへ、屋形様へ身命を擲つてかせぎはするが公方への奉公だては仕らず、といつた上杉の家臣もある。彼等は主人の恩によつて生きてゐるが、將軍の恩は受けてゐないのであるから、これは當然の話である。だから全國を統一する公方の無い戦國時代では、なほさら日本といふやうな考は起らなかつたに違ない。たゞ彼等の主人には、場合によつては天下に號令しようといふ考があつた。けれどもそれすらも日本の統一といふよりは、諸大名を服従させるといふのが主なる觀念であつた。國內に就いてもさうであるから、外國に對する觀念などの無かつたことはいふまでも無い。文學の上に對外思想の現はれてゐるもの、ないのは當然のことである。勿論西國大名などは外國貿易を營み、また龜井茲矩が琉球に手を出さうとしたり伊達政宗が圖南の鵬翼を萬里の風にうたせようとしたりしたことはあるが、それも日本國民としての考からでは無く、たゞ彼等の利益のためであり、或は國內に其の力を用ゐる餘地の無くなつた時代に於いて、何事をかしようとする彼等自身の事功欲たるに過ぎなかつた。た

だ一國の政權を握る地位に立てば、自然に國家全體を考へるやうにもなるので、秀吉の征明計畫も本來は彼の個人的事功欲から出たことではあるものゝ、實行に臨んでは我が國の領土の擴められるといふ念が自然に加はつて來たらしく、家康もまた支那に對する國家の防衛に思ひ到つたらしい(東照宮遺訓)。けれども多數の武士にそんな考の無かつたことはいふまでもあるまい。

さて此の如くして主従關係に結合せられた武士が、長い間の斷えまない戦争によつて與へられた精神的訓練は、おのづから武士に一種特有の氣質を形成させたのであるが、それには昔の武士から承け繼いでゐる因襲的觀念も助けになつてゐる。又た同じく戦争から發生したのもあるから、其の精髓に於いては、源平時代の武士と違つたところも無い。畢竟、戦闘が彼等に敢爲と忍耐とを教へ、死を怖れざる勇猛心と死を見て歸するが如き安心とを與へ、強者に屈せず弱者を侮らず、權勢と利益とに惑はされず、友を愛し人を慈み信義を守り禮節を重んずる氣風を養はせたのである。武士の意氣地といふのも義理といふのもやはり此のことであつて、或はそれを意志の側から見、或はそれを理性の側からいつたに過ぎない。武士の情といふのも亦た其の一面であつて、意氣地あるもの義理を辨へてゐるものに於いて初めて情もあり、情あるものにして初めて意氣地を

立て義理に背かぬことが出来るのである。常に死を覺悟する勇猛心があれば、權勢にも利益にも心は動かされぬ。權勢や利益の欲求に壅塞せられない時、人に對しても初めて純眞の同情が湧き出る。戰場で武勇のはたらきをするのを重んずれば、老功の士に對する尊敬心もおのづから生じて、そこに禮節の基礎が据えられ、我が身の死を覺悟するものが、敵の首級に對して敬意を失はぬのも自然である。要するに凡てが戦闘から養はれたものであつて、其の間相互に密接の關係があり、分割すべからざる一つの武士氣質を形づくつてゐるのである。それが所謂武士道であつて、さういふ修養の無い百姓町人に對して有つてゐる彼等の精神的の誇りもまた茲にあつた。百姓どもが平生は弱いに拘はらず、敗け戦になつたものゝ混雜に乗じて分捕をしたり、明智光秀などの場合のやうに、落ち武者の首をとつて恩賞に預らうとしたり(川角太閤記)するやうな、卑怯な無情な振舞は武士の卑んだところである。婦人とても男と同じ氣象は養はれたので、みづから戰場に出た例こそ、三村高德の妻(備中兵亂記)などの外にあまり聞えないやうであるが、當時の人から尊敬と讚美と同情とを以て迎へられた柴田勝家や、細川忠興の妻の悲壯な最期によつても知られる如く、心ある婦人には事あるに臨んで其の家と其の身とを耻かしめず、或は夫や子を激勵し、或は士卒を愛撫し、又た或は從容として死に就くだけの素養はできてゐたらしい。

武士道といふ語の初めて用ゐられたのが何時であるかは、著者の斷言するに躊躇するところであるが、遅くとも戦國の末には、此の語が出来てゐたらうと思はれる。中古以來「道」といふ語は、例へば歌道といふやうに、今ならば「専門の學藝」とでもいふべき意味に用ゐられてゐたので、戦國時代には文道に對する武道といふ名が普通に行はれ、武藝、武術、戦争の心得など、いふのと、大差の無い觀念を現はしてゐた。だから武士には文武兩道の修養が無くてはならぬことゝせられてゐたのである。今川記に見えてゐる了俊の制詞といふものに「不知文道武道、終に不得勝利事」とあり、早雲寺殿二十一箇條の最終に「文武弓馬の道は常なり、記すに及ばず、文を左にし武を右にするは古の法、兼ねて備へずんばあるべからず」とあるのも其の一例で、後の方のは、徳川幕府で發布した最初の武家法度の第一條に、殆ど其のまゝ採られてゐる。なほ此の武道の語は鎌倉大草紙などの軍記ものにも屢々見えてゐる。要するに人についていふよりは、寧ろ知識技術を指した語である。さうして其の武道に長じ戦場のはたらきに熟達してゐたものを、武邊のものとも武邊の功者ともいふのであつた。ところが信長記(卷一二)などに見える武者道または武篤道の語は、これとは少し違つてゐて、全體としての武者の心得といふ意味に用ゐられ、知識技術よりは寧ろ人格に關するものとせられてゐるらしいが、かう

なると所謂武道だけでは無く、武士の人間としての修養が其の中に含めて考へられるやうになる。武道を體得することがあつたから其の人にあるのと、武道に熟達したのみでは武士としての根本が缺けてゐるからとの故である。武士道といふ語も畢竟此の武者道、武篤道と同一意味である。しかし此の語の由來はやはり武道にあるらしく、戦國ごろ(或は徳川の代に入つてからか)の作と思はれる義貞記といふものにも、文に對する武を「當道」の基とし、詩歌、管絃の藝に對してそれを弓馬合戦の道と解しながら、一切の武士の心得を其の當道の教として述べてゐる。義貞記には武士道といふ語は出てゐないが、徳川の初世に書かれた備前老人物語、武功雜記などには明に此の語があつて、其の指すところはほゞこれと同じである。(もつとも備前老人物語には「武士の道」が戦場での心得といふ程のことに、軽く用ゐられてゐるが、是は昔の武道の意義が遺つてゐるのであらう。それと反對に、東照宮遺訓などの武道は、文道と相對して用ゐられながら、何れにも一種の政治的意味が含まれてゐる。いふものゝ地位からあつたからさうなつたのである)。可笑記、浮世物語などの武士道、侍道もやはり同様であるが、山鹿素行などになると、武士の「士」を支那風に解釋して士農工商の「士」、士大夫の「士」とし、「道」の語も道德の「道」としてしまふので、其の士道の教訓は戦國時代の武士道から見



ると適に違つたものになるのである。(武道の語は既に平治物語卷三に見えてゐて、それは寧ろ武士道に近い意義らしいが、普通には上に述べたやうに用ゐられてゐる。)けれども此の武士の風尙には根本的に大なる缺陷がある。それは、源平時代の武士を論じた時に述べて置いたやうに、本來武士の業務が人間の生存欲を賭し死を冒しての戦闘であるから、其の生存欲を壓服するだけに、主人に封する熱烈なる愛情があり、或は敵に對する強い敵愾心が起り、又た或は戦場の殺氣立つた空氣に鼓舞せられた時などに於いて、始めて其の精神が著しく現はれるので、武士の氣風を緊張させるには、社會全體が斯ういふ興奮状態にあるを要することである。従つて斯ういふ感情の鎮靜してゐる平和の世に於いては、戦闘の間から發生した武士の精神が銷磨するのは、當然であるから、武士道は畢竟一種の變態道德に過ぎないのである。

又た此の武士道の養成せられた戦國時代に於いてすら、武士の氣節の砥礪せられた一大要因は、やはり社會的風尙の力であつて、「武士の命を棄つるは名を惜み世の嘲弄を耻づる故なり」(大友記)といふのが彼等の一面の思想であつた。「身は一代、名は末代」といふのもまた此の意味である。しかし世の聞えと人の評判とを標準にして我が行動を定めるとなると、そこにおのづから矯飾が生ずる。場合によつては體面のために心ならぬ振舞をしなければならぬことになる。我が

純眞の情を抑へて世間體を装はねばならぬことが起る。武士の意氣地にも武士の義理にも斯ういふ不純の分子が混つてゐるので、此等の言葉其のものに於いて既に人に對していふ態度が見える。信長記に、荒木一族の妻女等が多く殺されようとした時、某といふものが、「日ごろは女房の間さのみ親しくは候はねども、今度妻女を捨て置き候はんこと本儀ならざるよし」を申して、妻の命に代らんことを懇望した、といふ話がある。此の男に妻に對する情愛が無いのでは無からうが、身代りを乞うた動機(少くも申分)は、情愛よりも寧ろ妻を見殺しにするのが不面目であるといふ考にある。さういふのが言ひ過ぎであるとするれば、夫は妻を見殺しにすべきもので無いといふ義理であるといつてもよい。夫妻の間に於いてすら、情よりは義理が働く傾があるとすれば、其の他の場合についてはいふまでも無からう。女の辭世には親や子を思ふ情の率直に述べてある歌があるのに、男にはさういふものゝ殆ど無いのも、やはり一種の矯飾から來てゐる。所謂義理と情との衝突も亦たこゝから生ずるのである。さうしてそれは、戦國時代の興奮状態が鎮靜して來る平和の時代に於いて特に著しくなる。

そればかりで無い。本來武士の活動の根本は、多數のものに於いては、自己の生活の擴大にあり熾烈な事功欲にある。いひかへると勢利の憧憬にあるのであるが、勢利の憧憬にはまた生命の

欲求が伴ふ。武士の働きは此の欲求から起るが、たゞ其の欲求を達する手段としての戦闘が、却つて武士をして此の欲求をすてさせる習慣を養つたに過ぎない。こゝに矛盾があつて、それが即ち武士の生活、武士の思想の根本的の缺陷である。だから特殊の興奮状態と社會的風尚とに支配せられない場合、もしくはさういふ人物に於いては、此の欲求が何物をも排斥して猛然として頭を擡げて来る。武士道は本來其のものを否定する基礎の上に立つてゐるといはねばならぬ。

以上は武士道の根本に對する觀察であるが、それは概して源平時代の思想と同一であつて、ただ戦争の激しい世であるだけに、凡ての調子が強くなつてゐるに過ぎない。けれども戦國の世はもはや源平の昔では無い。全體が實力競争、弱肉強食の時代であり、又た昔には無かつた列國競争が行はれて、四隣みな敵であるといふ有様でもあり、其の上に南北朝から足利にかけて斷えず繰りかへされた混亂の長い年月を経て來てもゐる。だから此の時代の武士の思想には、源平時代には見えなかつた、或はあまり發達してゐなかつたものがある。前に述べたやうに、主従の人的關係の上に國の觀念が多少加はつて來たといふことも、其の一つである。

それから又た「源氏は二人の主とることなし」といふやうな、昔の武士の思想もよほど變つて來た。昔の東國武士は、長い歴史的因縁から悉く源氏の家人となつてゐたのであり、又た東國と

いふ廣い場所が、彼等のために特殊の世界を形づくつてゐたのであるから、彼等から見れば源氏が即ち天下唯一の主人であり、其の主従關係は殆ど絶對的のものであつた。だから平家全盛の場合に、東國武士の平氏に従つたのは、生活上已むを得ないことであつても、衷心に一種の苦痛を感じたに違ない。ところが此の時代では、全國に大名が數多く存立してゐるのみならず、其の滅亡が頻々として起るから、主従關係は必しも絶對的のものとも考へられなくなつた。さうして亡びた家の家來どもは、其の時一旦は浪人とならねばならぬが、浪人となれば衣食に窮する。窮した彼等が武士として働かうとすれば、また新しい主人を見つけて抱へられねばならぬ。さうして何處の大名も覺えある武士を要する時代として、ありつく場所は尠なくない。甲州ものが多く徳川に従つた如く、主家を仆した敵の家來にさへもなる。前に述べた如く主家が無くなればもはや主従の關係は絶えたのだから、それで別に不都合は無い。「昔は昔、今は今」と、利のあるところを求めて敵となり味方となり、向背去就を勝手にした南北朝頃の武士の考とは違ふ。祿に望みがあつて仕へるべき主人を撰ぶなども、同じ思想から來てゐるので、武士は或る意味に於いては、報酬を得て戦闘を職業とするものであつた。(武士が農民と全く區別せられ、城下にのみ集まつて戦闘を常務としてゐたといふ生活状態も、また此の思想の生ずる一原因になつてゐるであらう。)

勿論、單に祿の多寡のみが理由で、主家をかへたといふことはあまり多くはあるまいが、何かの事情で他家に仕へるものは少なくなかつた。割據的狀態に伴つて國といふ考が幾分か生じて來ても、上に述べた如く國勢の中心は土地から離れてゐる武士の主従關係であるから、武士の一部分に、或は彼等の思想の一隅に、斯ういふ考の生まれるのも無理はない。

なほ此の時代の武士の思想を源平の昔に比べて見ると、人間としての缺陷、社會としての弊害の方が多く目につく。本來が亂雜の世だから、これは當然であらう。さて其の第一は、人を見れば敵と思へといふ用心から、胸中を人に見すかされまいとして、自然に矯飾を加へるやうになるので、率直な淡泊な言行が、此の時代の武士には、容易に見られないやうになつたことである。「壁に耳石に口ある習」(大内義隆記)であるとするれば、「一言にても人の胸中知らるゝものなり」(早雲寺殿二十一箇條)と、言葉を慎むことは勿論であり、「深きもの」の第一に「物いはぬ人」を挙げ、「淺きもの」に「言葉多き人」を數へた(尤の草子)のも、斯ういふ武士的思想から來てゐる。女を淺はかなものとして、心を許すなど教へるのもまた同様である。喜怒哀色にあらはさずといふ武士の氣風も、忍耐とか人に弱みを見せないとかいふ方面からも生ずるが、それよりは寧ろ此の點に深い原因があるらしく、抑情の習慣もこれによつて益々養はれたのであらう(率直に

入と交ることの出來ない傾が、今日もなほ邦人の間にあるのは、此の武士的氣風の餘弊でもあらう)。

のみならず更に一步を進めると、場合によつては、うそも偽りも當り前のこととして許されてゐたので、功名を争ふためには味方同志ですらも相結くことを尤めなかつた(義貞記といふもの、細川幽齋の覺書、備前老人物語、武功雜記等にそれが見える。昔の宇治川の先陣争ひは事實かどうか疑はしいが、此の時代にはそれに似た例が實際あつたらしい)。明智光秀が「佛のうそをば方便といふ、武士のうそをば武略といふ、土民百姓はかはゆきことなり」(老人雜話)といつたといふのも、もつとものことである。其の結果、權謀術數を盛に用ゐるやうになるが、それがまた益々此の用心と矯飾との風を増長させる。「のせられてのする」を得意としてゐた家康は、平常お芝居ばかりをしてゐたので、本多正信などの用ゐられたのも此の故であるが、直情徑行を以て世に知られた秀吉とても、單に直情徑行のみでは無からう。たゞ秀吉は氣宇が大きくて人を恐れないのと、機略と決斷とに富んで物に拘泥せず、時に應じて宜きを制することの自在であるのと、のため、屑々として矯飾をつとめる必要が無かつたのである。平氣で自己の弱點を暴露するのは、大きい人物、自信のある人物で無くては出來ないことである。

side down  
comparison with Buddhism

其の第二は、死を輕んずる氣風が悪い方面に流れて來たことである。戰に臨んで死を怖れないのは、武士としての當然の修養であり、それから種々の美德も發生して來る。敵に向つて奮戦する場合はいふまでも無く、運命の極まつた時にも、敵に降り又は敵に殺されるのを屑しとせずして、みづから我が刃を我が身に加へる。自殺といふ風習の由來はこゝにある。そこに一種の悲壯があつて、落城を眼前に控へての最後の酒宴、從容として死に就く辭世の詠、無限の詩趣がそこに溢へられてゐるのみならず、平生に此の覺悟があつて始めて武士の氣節も砥礪せられる。生死關頭に立つてゐることを自覺することによつて、人の心も嚴肅になる。しかしそれは、死が人生の大事であるからのことである。敢て死に就かうとする武士の心情に悲壯の趣のあるのは、死を輕んずるがためでは無く、實は死を重んずるからである。其の重大なる死を敢てするところに、尊とさがあるのである。けれども戰に慣れ人を殺すに慣れると、ちのづから死を尋常茶飯視するやうになる。人の生命を輕んずるやうになる。人の生命を輕んずるのは即ち人生其のものを輕んずるのである。人生を輕んずることが人生其のものと矛盾し、人道の根本を破壊するものであることはいふまでも無い。ところが當時の武士には斯ういふ傾向があつた。彼等は屢々他人の死をば平氣で視てゐた。此の頃の武將には、往々一旦の怒によつて家臣を手打ちにするといふことがあ

つたが、是もやはり其の一現象で、刑罰に死を適用することが多いのと共に、知らず識らずの間には、人の生命を重んじない習慣が養はれたのである。「毒の蟲をば腦をわり髓をぬけ」(瓦林政頼記)といふやうに、後害を恐れて敵の子女を殺すやうなことは(源平の昔にもあつた如く)まだしもとして、信長が荒木を滅ぼした時のやうに、幾百人の女子どもを磔殺したり焚殺したりするのは、たゞ無情慘酷といふより外に評し様が無い。もつとも信長の敵に對する處置は、此の時代の人としても特別に苛酷であつたけれども、上杉謙信や伊達政宗にも、敵地に入つて老若男女を盡く撫て切りにした例がある。秀吉が秀次の侍女などを殺し悉したなども同様であらう。

が、自分が他人の死を輕んずるほどならば、自分の死とても他人からは輕んぜらる。終には自分に自分の死をも輕んずるやうになる。人の命の廉價な時代に於いては、どうせいつかは死ぬる命だと思ふ。そこに絶望的な、ステパチ的の勇氣が起る一契機があると共に、浮薄な死にやうをする原因もある。さうして戰爭から生れた社會的風尙として、命を輕んずることを何につけても讃めるといふ傾向も、またそれを助長する。自殺が輕々しく行はれたのも此の故であらう。殺伐な世に於いては、命を捨てるといふやうなことで無くしては、人心を刺戟しないといふ理由もあらうが、今日から見れば餘りに死を濫にしたものである。責任解除の意味で自殺をすることなども

此の頃からの風習であらう。かの殉死の如きもこれに關係があるので、其の半面には生命を重んじない思想がある。徳川時代になつて出来た恨之介に於いて、女主人公の乳母や朋友や侍女が自殺したのも、竹齋物語の挿話、薄雪物語、四人比丘尼などに於いて、戀人に別れた男女が自殺を企てたのも、昔な斯ういふ社會の反映である。固より殉死の半面は情に殉ずるといふことであるが、事實としては、主人を失ひ契りし人に別れて世にあるに堪へないといふ至情からよりは、寧ろ主従の情誼のために身をすてるのを賞讃する一種の社會的風尚と、それから養はれた因襲的道念のために死ぬことが(特に男に於いては)多かつたらう。男色の關係から來る殉死も同様である。又た上に述べた物語に見えるやうな、戀人を失ひ夫や妻に別れたがための自刃といふことは、夫の戦死したといふやうな特殊の場合に、妻が其の後を追うた例などがあつたかも知れぬが、其の他には事實としてあまり聞えてゐないことであり、さうしてかういふ場合でも、やはり情に殉ずるよりも耻を受けまいといふやうな用意が主因になつてゐたのであらう。けれども物語の作者が斯ういふ構想をしたのは、死を敢てするといふことが世に尙ばれてゐたからに違ない。昔ならば出家に終るべきものが、大抵は自殺をするのが此の時代の習慣であつて、殉死の如きも實は其の一例であるから、戀のために身を殺す物語も、其の生命をすてるといふ點に於いて讚嘆せられ

たのであらう(薄雪物語や四人比丘尼では自殺を遂げなかつたものが出家をしたが、謠曲の薄雪は女を自殺させた)。さうしてそれがために、終には或る場合に死に對して一種の憧憬を有するやうにさへ養はれたのである。これは源平時代には見えない戦亂の世の生んだ風尚である。

死を輕んじ人命を輕んずるものは、生きた人間に於いてもおのづから其の人格を輕んずる。人質といふものに於いてもそれが認められるので、これは一方からいふと人情の弱點を捕へるのであるが、其の人情を無視して若しくはそれを忍んで、質を敵手に委ねることの行はれかねない世であつて見れば、人間よりも勢利を重んじた時代の思想がそれに現はれてゐる。政略的結婚なども同様で、これもまた單に姻親によつて兩家の結合を堅めようとするのでは無く、半ば人質の、半ば間諜の意味で行はれるほどであり、次にいふやうに初から敵を亡ぼさんかための詐謀としてさへも用ゐられた。此の場合に婦人が全然人格を認められてゐないことは、いふまでも無い。だから秀忠の女を秀頼に嫁せ、其の秀頼を滅ぼしてから更に他に再嫁させるなどは、戦國思想からいふと何ても無いことであつた。婦人とても、唯々として政略の道具に使はれてゐたものばかりでは無からうが、一面に於いて斯ういふ思想のあることを忘れてはならぬ。戦争其のことが(其の半面の意味に於いては)本來士卒を勢力競争の道具として取り扱つてゐるので、いひかへれば

彼等の人格を認めないのであるから、其の餘弊が斯うなるのも自然の勢である。(序にいふ。戰鬪が社會の原動力である時勢に於いて、それと直接の關係の無い婦人が概して重んぜられないのは當然であるが、さりとて妻の地位が特に低かつたのでは無い。著妾は勿論普通のことであつたけれども、それは男子の僕があるのと同様に思はれてゐたのである。兩性の關係はどこまでも家族的見地より考へられてゐたから、夫妻はむしろ對等の地位にあつた。政略的結婚などは親や子を入質としたと同様のことであつて、夫妻間の特殊の問題では無い。)

其の第三は武士の義理もなさけも、主として一國一城の間、いひかへると主従關係によつて結合せられてゐる一團の間だけの問題であつて、其の外へ出た場合にはよほど態度が違つてゐたといふことである。敵國に對してそれが適用せられなかつたことは、いふまでも無い。今日に於いても國際道徳が發達しないのであるから、昔に於いて、而も不斷の戰爭の行はれてゐる此の時代の昔に於いて、こんな有様であつたのも不思議ではあるまい。武士は信義を守るといひ、情を知るといふ。しかし大名間の約束などは、それを破ることが平氣であつて、天照大神、八幡大菩薩、熊野の權現、あらゆる日本大小の神祇をかけての起請誓紙も、忽ち一片の故紙となつてしまふ。家康は斯うして豊臣氏を倒したては無いか。人質のやりとりや姻戚の親みも、随分あてにならない

いもので、特に政略的結婚に至つては、初から敵をたばかる一時の手段とせられたことも尠くない。細川藤孝や龍造寺隆信や宇喜田直家が婿を殺し、黒田長政が妻の父を殺し妻さへも火あぶりにしたことは、名高い話であるが、これらは信義の無いばかりでなく無情の極である。暗み討ちや毒害は固より、戰場での詐僞的和談さへも珍らしくはなかつた(反間を放つて敵の主従を離間したり、利を啗はせて敵のうちで内通させたりするのも、甚だたちの悪い權略であつて、勿論信義ある仕業では無い。秀吉が北條征伐の後、見せしめのためといふので、曩に降参して上方勢を導いた大道寺父子を誅したといふが、其の秀吉は現に松田を誘つて内通させようとしたのである。見せしめのために誅伐すべきほどの不忠ものを、敵方に作らうといふのは、敵に對しては何をしてもかまはぬといふ考からでは無からうか)。

それからまた武士は、一旦の威に屈して媚を勢家に呈するを耻辱としたといふ。そこに武士の意地がある。けれども昔から武士の本場と考へられてゐた關東ですら、小さい大名は北條なり上杉なりの優勢な大名に阿附して。纔に其の領地を支へてゐたのであつた。もつともこれは致し方の無い小國のあはれさではあるが、相應に力のある大名でもやはり同様であつて、關ヶ原の役に家康が勝ち、大阪の役に豊臣氏が滅びたのは、畢竟意地も無く氣概も無く、強いものには敵はぬ、

長いものにはまかれよといふ思想が、多数の大名を支配してゐたがためには無いか。此の點に於いて幾多の大名は、三河物語の著者から「百姓同前にて、此の前々も草の靡きにて、強き方へばかり付きければ、後世にもかく可有」と罵倒せられて、一言の抗辯もできない者どもであつた。しかし彼等が大名として其の領地を永く保持することが出来たのは、畢竟之がためであつて、もし豊臣氏のために情誼を守つて、飽くまでも操守を貫かうとしたら、家は滅び國は除かれるにまづつてゐる。大名とても世渡り上手で無くては、其の身其の家が保てないのである。

もとよりこんな話ばかりでは無い。毛利勢が秀吉と和睦した後には本能寺の變をさいた時、隆景が堅く人々を制してどこまでも約束を守らせたといふことや、瀧川一益が信長の事變に際して厩橋を引き上げた時の關東武士の態度などは、武士の信義を敵にも示す好話柄であり、敵方の妻子を助けたことも尠なくはなく、別所長治が三木城の運命の定まつたのを見て自殺を決心し、部下の將士の命乞をした時、秀吉がそれを許し、酒肴を贈つて彼等を犒つたといふ美譚もある。謙信が甲州に鹽を贈つたといふこともある。又た新納忠元や坂部岡江雪が、日本國の軍を引き受けて一戦するのが武士の面目だと威張つた談もある。しかし、これらは何れも自己の存亡に關しない、事に餘裕のある場合か、又は其の行動が大局を左右するに足らぬものゝことであつて、自分の領

地を失ふか失はぬかの危急の際、もしくは自己の勢力を擴張するに絶好の機會といふやうな時の話では無い。本來戰國の競争は、諸大名が名々に自分の領地、自分の勢力を大きくしようといふ欲望から起り、其の欲望の衝突から生じたものであるから、彼等の行動の根本義が、此の領土と其の基礎の上に築かれた勢力との保存もしくは擴大にある。戰國は其の最も必要な手段であるが、強者に阿附するのがそれよりも便利な方法であるとすれば、それを撰ぶのであり、約束を破り詐僞をはたらき、無辜の婦女子を殺すのが必要であるとすれば、敢てそれを行ふのである。畢竟戰國競争の單位が主従によつて結合せられてゐる一團であるから、其の競争の方便としての戰國によつて養成せられた武士的精神は、其の主従間、味方同志の間に於いてこそ發揮せられるが、其の範圍外にまで及ばなかつたのは自然の勢であらう。

もつとも戰國が習慣となり、又た戰國によつて鍛鍊せられた精神が、武士の全人格の中心となつてゐるのであるから、大名にも、不利益と知りつゝ一戦を試みようといふ意地も、一方にあつたには違なく、個人的の性格から斯ういふ傾向の強いものもあつた。又た主従の結合は必しも永久的のものでなく、また土地の上からいつても、畢竟地方的團結に過ぎないのであるから、よし敵に對して詐謀を用ゐても、慘酷なふるまひをしても、それは政策の上から來る國主城主、もし

くは主將の態度と行爲とであつて、一般の武士は敵方に對して（競争心と國自慢と敵愾心とこそはあれ）甚しき憎惡の念を有つてゐるのではない。だから無辜の民を殺すにしても、個人的に殘虐を加へるやうなことは無かつた。これは同一民族から成立してゐる我が國民固有の性情の現はれたものでもあり、又た武士的修養の結果でもあるが、たゞかゝる場合にも、割合に平氣でゐられるだけに殺伐な氣風が、戦争といふものによつて、彼等の間に養はれてゐたのである。

しかし、信義を破り、情を思はぬのは、必しも敵に對する場合のみでは無い。實力競争の時代、強いものがちの世の中であつて見れば、家來とても主家を仆さうとしないにも限らぬ。現に齋藤道三の如きは主を殺し婢を殺して家を起し、「昔は長田、今は山城」と世に歌はれた。けれどもそれが既に一國の領主として勢を振つてゐれば、非難はしつゝもそれに従ふ武士も多く、現に信長は其の聲になつたては無い。明知光秀が信長を仆したのも、成功すれば罪を問ふものゝ無い世の中であることを知つてゐたからであらう。それが單純な逆臣として取り扱はれたのは、武運拙くして秀吉に打ち破られたからのことである。其の秀吉も織田氏を排して主家の權を奪つたものといへばいれようし、現に信長をば武力を以て倒した。主從關係を絶對のものとして見れば勿論武士道の罪人である。けれども世はそれを尤めず、天下の主として全國の武士が皆な其の命

に服したては無い。陶氏でも毛利に破られなかつたなら、大内のあとを承けて毛利と同じ位置を占めたであらう。（もつとも光秀が主家に叛いたのは怨恨が其の原因となつてゐるので、秀吉が權力競争の結果、信孝を仆さなければならぬやうになつたのとは違ふ。是は世間にもわかつてゐたので、多くの武士が光秀には従はない秀吉には歸服した一つの理由は、こゝにあつたであらう。けれどもまた光秀の動機が天下を取らうといふ點にあつたとすれば、地位と場合との相違が二人をして異つた態度を取らせたのではあるが、其の間に共通の點が無いでも無い。）主従ばかりで無い。父を逐ひ出した信玄も立派な武將として、強國の主として、畏敬せられてゐたては無い。さうして武士として耻かしからぬ、もしくは武士の龜鑑とせられてゐる、幾多の勇士が其の下についてゐて、懸命のはたらきをしたては無い。要するに世を支配するものは、實力と實力の優劣によつて定まる成敗とであつて、義理でも無ければ情でも無い。「非はもとより理にあさる、理は法度にあさる、法度も時の權にあさる」ところが強いものがちの世に於いては、時の權はたゞ強者にある。主に背き親に背いて人に指彈せられるのは、主と親とに背いたからでは無く、それが弱者であり失敗者であるからである。武士生活の基礎となつてゐる主從關係も、斯う考へると頗るぐらつき易いものであつた。斯ういふ風に強者の行爲が（少くとも事實上）正當



視せられることは、南北朝の混亂時代から馴致せられ、此の頃に至つて極端に達したものであつて、源平時代の武士にはまだ経験せられなかつたことである。これが戦國武士の思想の昔と違ふ第四の點である。

但しこれは武士の實狀である。敵を打ち破るに手段を撰ばないことは勿論、場合によつては我が主君をも仆して我が領地を大きくし、我が勢力を振ひ、我が欲望を成就しようとする戦國武士の、實際はこんなものであつた。かう考へると武士、特に國主大名は畢竟一種の盜賊であつたと云つてよい。「盜賊と武略とは文字かはり道異なれども心は同じ」(北條五代記)。必しも武略ばかりで無い。其の武略を肝要とする彼等の全體の行動がさうである。蜂須賀小六が大名になつて人がそれを許してゐたのも不思議では無い。けれども此の實狀は、人間の世の中としてはあまりに亂脈であり、あまりに心もちがよくない。だから當時の人も心あるものは此の形勢を慨歎した。幾多の軍記ものにも屢々其の意がほめかされてゐる。齋藤道三などが世間から非難せられたのも此の故である。さうして此の思想は漠然たるものながら事實上世を動かす力ともなつたので、明智光秀の失敗した理由の一つはこゝにもあらう。が、それだけではあまりに力がない。そこで、

彼等は思想の上で、此の亂脈な放埒な強いものがちの世態は、果して人生の眞實であるかと考へた。考へた結果、世には「天道」といふものゝあることを知つた。「權は天道におさる」の一轉語を下して、理をも法をも押へる時の權の上、強者の上に、更にそれを押へる天道を拉して來たのである。

しかし其の天道とは何か。今川了俊の制詞といふものにも、既に「不恐天道働事」の一條があり、此の時代の軍記ものなどにも時々此の語が見えるが、それは畢竟無道の行をしたものは、一旦の榮華に誇り一時は權勢を振つても、必ず天罰を蒙る時が來るといふので、それを天道の働きと見るのである。特に主従關係が社會の綱紀となつてゐる世であるから、「昔より今に至るまで主に對し不義ありしもの必ず滅ぶること疑なし」(相州兵亂記)といふ思想があつて、それが天道の權威の最も著しい證徴とせられた。世は如何に亂脈に見えても、其の間に此の天道が行はれてゐるといふので、それを倫理的にいひ換へると、人は此の天道を恐れて不義無道の行を避けよといふことになり、強者の權をそれによつて抑へようとするのである。これは通俗的道德として起り易い思想でもあるが、人生と社會とを支配する宇宙間の道理があるとして、それを道德的のものとする點に於いて、儒教の影響をうけてゐるらしい。が、それは兎も角も(前篇にも既に述べ

たことがあるやうに)此の思想は榮枯盛衰を以て天道の行はれる徴證とするのであるから、世に榮えてゐるものは天道にかなつたものであり、従つて榮華を求める根柢の精神は是認せられることになる。たゞ其の求める方法に善惡があり、又たその應報が長い時間に於いて行はれるといふのみである。

が、競争が激甚で、眼前の自己の存亡が切實の問題である時、人間五十年の短い間に我が功名を遂げようとして、あらゆるものが血眼になつてゐる時に、目的のために手段を撰ばなくなるのは免れ難い事情であり、又た長い後世のことが多くの武士を支配するに不十分であつたことはいふまでも無い。彼等は不義非道によつて榮えてゐる諸大名にも服従して、それに忠節を盡すを以て本務としてゐたては無いか。又た子孫の繁榮を希ふに至つては、既に權勢を得たものゝ問題であつて、權勢を求めてゐるものゝ考へるところでは無いのである。のみならず、此の思想は世上の現象に於いて天道の行はれるのを見るのであるから、如何なる世態もそこに正當視せらるべき理由がある。家の滅びるのは惡逆の報かも知れぬが、滅びるのが正當ならば、其れを滅ぼすのも同一現象の裏面の事實として、正當で無くてはならぬ。或は天道の執行者として賞讃せられなくてはならぬ。其の間に善惡是非の批判を容るべき餘地があるにしても、事實に於いて、人の家を

仆し人の國を滅ぼすことは是認せられなくてはならぬ。戰國の紛争を鎮定するにはあまりに力の無い思想である。これは此の天道説の假定の上に立つての話であるが、更に別の方面から観ると、明白なる事實として、實力の大小強弱が家國の盛衰興亡を支配してゐる。何等の罪過が無くても、國が小さく勢が弱ければ覆滅の運に逢ふことを免れない。これは天道説とは矛盾してゐるのでは無からうか。だから天道説其のものが、世を支配する唯一の規範として、當時に於いても認められたのではなかつた。現に彼等は家の衰へ國の滅びる場合には、別に「時節到來」といひ「運の極まり」といふ思想を以て、此の眼前の事實を解釋しようとしたのである。ところがこの運命觀とかの天道觀とは、互に齟齬する觀念であるのに、彼等はそこに氣がつかなかつた。それほどに彼等の天道觀は、不徹底な力の無いものであつた。

天道が既に力の弱いものであるならば、人はたゞ激烈なる戰國競争の間に立つて、其の身を保ち其の勢を張らうと懸念に努力する外は無い。努力して事の成るか成らぬか、志の達せられるか達せられないかは運命であるが、運をば運に任せて我は我が力を揮ふのみである。秀吉は固より運がよかつた。家康もまた運のつよい大將といはれてゐた。事實、徳川の天下を取つたのは家康の長壽のふかげてあつて、其の長壽を得たのは運命に違ない。けれども家康の言行によつて考へ

ると、彼は實に人力の重んずべく尊ぶべきを知つてゐたので、どこに落ちるかかわらぬ雷にさへ、其の禍を少くする方法を考へてゐたといふ。彼の事業が此の慎重の用意に負ふところの多いことは勿論、長壽さへも攝生の功が少なくなかつたであらう。實力競争の世に人力の尊重せられるのは當然の勢であるから、家康ほどに意識してゐないにしても、我が力が我が事をなすに足るといふ考が、武士の間に生じて來たことは争はれまい。けれども世には人力の如何ともすべからざることがある。特に戰陣の間に於いて、もしくは其の勝敗によつて事の決せられる權力の争に於いては猶さらである。だから「運は天にあり」といふ源平時代以後の武士の標語がなほ持續せられ、「武士は冥加と武邊と果報と三つ揃はねば本意を不達事も有之事に候」(武功雜記)といはれたのである。が、人力を頼むも天運に任せるも、畢竟は強いもの勝ちの世に於いて強さを制し勝を制しようとする武士の心理に外ならぬ。さうして武運めてたく開けて勝利に勝利を重ね、強者の上の強者になつたものが、終に天下を一統して此の競争の結末をつける。其の間の徑路に如何なることがあつたにしても、天下最上の權を得た以上、あらゆる武士は皆な其の前に雌伏する。たゞ其の權を得たものは、それを長く子孫に持續させたい。彼は茲に至つて始めて天道の恐るべきを思ふ。家康が治平の後に屢々天道を口にしたのは、此の意味に於いて甚だ興味がある。

しかし家康のいふ天道には往々政治的意味があつて、武家の政の治まらぬ時には天道が新しい武家に世を預けるから亂れた家は亡びるなど、支那風の革命説らしいことをいつてゐる(東照宮遺訓)。儒者と道を談じて禪讓放伐論などをしたといふから(駿府政事録)、其の感化もあらうが、政權を得た彼としては自然に思の茲に到つたのでもあらう。本佐録といふものが果して本多正信の著であるかどうか、多少の疑もあるが、こゝにも政治的意義を含んだ天道論が見える。ところが政權を握つて諸大名に臨むのは、一國一城の主君として家來を率ゐるとは性質が違ふ。家來は主従の情誼によつて命を彼に捧げてゐる武士であるが、諸大名は勢に従ふ「百姓同前」のものである(もつとも此の口氣といふと、家康が大坂を仆したのは強盜同様であらう)。けれども、家康は自家の權力を鞏固にするためには、彼等を巧に操縦し、威を以て嚇し利を以て誘ひ、又た人情の弱點を捕へる結婚政略や人質の招致を以て、彼等に臨まねばならぬ。武士道は主従の間にこそ行はれるが、大名相互の間や將軍と大名との間には思もよらぬ話だからである。大久保彦左衛門が諸大名を罵り、彼等に對する將軍の態度に不平を鳴らしたのは、主従關係と大名間または治者と被治者との間柄との區別を知らなかつたためである。けれども三河武士が大名の班に列し

て外様大名と肩を列べる時には、外様大名もまた習慣上、將軍と主従らしい形になる。主従の名があつて主従の實の無い時に、眞の主従の情誼に累を及ぼすことは自然の勢である。武士道は茲に至つて、何等の動搖をも見ないで済むであらうか。

かういつて來ると、前にのべた問題に立ち戻つて更に一言しなければならぬことがある。秀吉が織田に代り家康が豊臣に代つて天下を取つたのは、主従關係もしくは誓約を破つた點に於いて、不人情でもあり不信でもあり、武士道の罪人でもある。しかし國家を統一し國政を主宰する實力のあるものが出なければならぬ場合に於いて、事實上、信長の死後の織田にも秀吉の歿後の豊臣にも、其の資格が無いとすれば、何人か彼等に代らねばならぬが、何人が代つても秀吉や家康と同じ地位に立たなくてはならぬ。其の手段に緩急寛嚴の差はちのづから生ずるであらうが、畢竟は同じ態度を取る外は無かつたらう。さすれば不信不義を敢てするものにして始めて天下を治平にするのが出來た、といふ一見奇怪な結論に到着する。昔から大盜は國をぬすむといふ語があるのは、此の事實を直言したもので、儒教の革命論も家康の天道論も、それを正當視すべき理論を立てようとして案出せられたものに過ぎない。が、如何なる理論を案出して事實は事實である。さうして斯ういふ大盜の出現を要求するのも、また其の時々の動かすべからざる事實であつ

た。これは政治上の實際と政治道徳との根本的矛盾であるが、これを取り去ることは、專制政治、武斷政治の世の中に於いては到底出來ない話であつて、それには眞の國民政治を打ち建てる外に途は無い。我が戰國時代にそんなことの出來る等が無かつたことは明であるのみならず、こんな事實の起つたことが實は、武力競争の結果として優者が天下を統一しなければならなかつた戰國時代の必至の勢である。さうして競争の手段が武力である以上、我が勢の優れるを證するためには主家をも滅ぼし故友をも殺さねばならなかつたのである。たゞ社會が主従關係によつて成り立ち、其の間から生じた武士道によつて世の紀綱が維持せられてゐた當時に於いては、自然にかういふ政治上の問題をも、同じ主従の情誼、武士道によつて批評し裁斷するやうになるので、政治上の著明なる事實と道徳的觀念との矛盾が特に目立つ。武士道は本來、狭い一國一城の主従間に於いて發達し、又た維持せられて來たものであるから、それを廣い天下の政治の上、又は政權争奪の狀勢に適用することは、事實上不可能であるに拘はらず、全體の政治組織の骨ぐみが表面上主従らしき形をなしてゐるがために、理論上それを適用しなければならぬやうになつたのである。が、それは即ち國家統一の場合に於ける武士道の破産ではあるまいか。

そればかりで無い。武士道は戰亂の間から發生したものである。其の根柢には世の紛争に際し